

誠忠の茶園

―牧之原の荒地に挑んだ幕臣たち―

刀を鋤に替えた幕府精鋭隊

太田精一 著

誠忠の茶園

目次

(プロローグ)	七
一・幕末の旗本	八
(一) 桜田門外の変	八
(二) 幕臣攘夷派	一一
(三) 幕府講武所	一五
二・混迷する幕府	一六
(一) 公武合体へ	一六
(二) 新徴組と清河八郎	一八
(三) 大草高重自宅謹慎	二一
三・攘夷の蹉跌	二三
(一) 生麦事件の代償	二三
(二) 泥舟、鉄舟の蟄居	二七
(三) 尊王攘夷の凋落	三一
四・最後の将軍	三四
(一) 長州征討の失敗	三四

(二)	大政奉還	………	三八
(三)	慶喜江戸城退去	………	四三
五	江戸城明け渡し	………	四六
(一)	精鋭隊と彰義隊	………	四六
(二)	江戸城総攻撃回避	………	五一
(三)	慶喜上野から水戸へ	………	五六
六	救国の恭順	………	六〇
(一)	彰義隊壊滅と戊辰戦争	………	六〇
(二)	水戸から駿府へ	………	六四
(三)	困窮する幕臣たち	………	六八
七	剣を鋏に代えて	………	七一
(一)	帰農の決意	………	七一
(二)	開墾地視察	………	七四
(三)	牧之原入植	………	七八
八	茶園の形成	………	八二
(一)	地元民との軋轢	………	八二
(二)	茶の栽培に着目	………	八五

十三.	牧之原の土に生きる	………	一三九
(一)	初収穫茶徳川家に献上	………	一三九
(二)	栄達を望まず	………	一四五
(三)	東照宮造営に向けて	………	一四九
十四.	分裂の危機を乗り越えて	………	一五三
(一)	明治天皇に謁見	………	一五三
(二)	分裂の危機	………	一五八
(三)	石油に懸ける夢	………	一六三
十五.	入植幕臣たちの明治維新	………	一六八
(一)	栄誉の天覧流鏑馬	………	一六八
(二)	相次ぐ盟友の死	………	一七二
(三)	茶園の自立	………	一七八
十六.	茶園に懸けた夢	………	一八四
(一)	牧之原の土となれ	………	一八四
(二)	大草高重の遺徳	………	一九一
(三)	駆け抜けた動乱の時代	………	一九六
十七.	幕臣の残した茶園	………	二〇二

(一) ねぎらいの宴	二〇二
(二) 品質を高める牧之原茶	二〇七
(三) 沃野に眠る	二一二
あとがき	二一八

(プロローグ)

爽やかな風が吹いている。新芽が出揃い、茶園は、若草色に染まっている。雲雀が、空高く舞い上がり、牧之原の灌木の茂みの中に消えて行った。

八十八夜も近い。

大草高重は、中條景昭と共に、牧之原の茶園を見廻っていた。

茶園は年々広がり、明治二十四年のこの年には、すでに茶処として全国的にも知られるようになっていた。

荒地として放置されて来た牧之原の大地は、旧幕臣たちの血と汗によって、開墾が進み、緑の茶園にその姿を変えつつあった。

だが、多くの同志が倒れ、離散し、入植当初の旧幕臣たちの数は、大幅に減少している。そのため、入植に至るまでの経緯とその後の開拓の歴史を知る者も少なくなった。

大草高重と中條景昭は、見廻りを進めながら、衰退する徳川家に忠誠を尽し、武士としての誇りを持ったまま刀を鍬に変え、二人三脚で茶園を築き上げて来た苦闘の歴史を振り返っていた。

二人は、初めて牧之原の視察に訪れた矢口原に、いつしか来ていた。

矢口原に立ったのは、明治二年の暑い夏であった。

眼下には大井川が流れ、東方には、富士の秀峰が手に取るように見えた。南には、駿河湾が真夏の陽を浴び、キラキラと光っていた。

灌木と雑草に覆われた坂道を喘ぎながら登って、やっと到達した矢口原の眺望は、前途に立ちはだかる困難を乗り越え、入植を決意させるほどの素晴らしいものであった。

手ごろな石を見つけ、休息のため二人は腰を下ろした。

高重は、二十年余りの苦難の歴史を刻んだ景昭の横顔に目をやった。その顔には、幕末の動乱の時代を生きぬいた証が、皺の一本一本に刻まれている。

高重は、景昭の顔から目をそらし、じつと瞼を閉じた。すると幕府崩壊の予兆を招いた桜田門外の変のあった日から今日までの移り変わりが、走馬灯のように脳裏に浮かんで消えて行った。

一．幕末の旗本

(一) 桜田門外の変

明け方から雪が降り出して来た。薄墨を流したような雲の中を乱舞しながら降りてくる。地上は、見る見る白一色に染まって行った。

安政七年（一八六〇）三月三日。暦は、すでに春であったが、江戸には珍しい大雪である。大草他喜次郎高重は、前年十二月部屋住みから、大番士入りを仰せつかり、登城の支度をしていた。

その時、大声で叫ぶ門番の声が玄関から聞こえて来た。

「御前様、大変です。今しがた桜田門外で、大老井伊様が、水戸浪士の襲撃を受け、大怪我をなさったそうです」

「それはまことか。で、怪我の様子はどうじゃ」

「へえ、見たわけではございませんが、この界限じゃあもつぱらの噂で、お命を取られたつていう話もあります」

高重は、小石川鷹匠町の山岡鉄太郎（鉄舟）のもとに、若党の伝七を走らせた。ことの真偽と攘夷派幕臣たちの動きを探らせるためである。

鉄舟のまわりには、多くの旗本の子弟や江戸在住の攘夷派の志士たちが集まっている。その連中が関係しているのではないかと思っただからだ。

高重は、伝七が門を出るとほとんど同時に、城に向かって駆け出した。

思わぬ大変事が起き、城内は騒然としている。大番頭も右往左往するばかりであった。

昼が過ぎ、しばらくして雪がやんだ。

その頃になると、次第に事件の全貌が明らかになって来た。

「二十人近い水戸の浪士が、登城途中の井伊大老の駕籠を襲った。護衛の武士と大乱闘になり、多くの死傷者が出て、井伊大老は、首を討ち取られた。浪士の中には、薩摩藩士も混じっていた」との伝聞が広まった。

高重は、ひとまず屋敷に引き上げ、伝七からの報告を受けた。

「手前が着いた時には山岡様は、もう城に出向きお屋敷にはいませんでした。お屋敷にいた若侍たちは、それほど悲しんでいる様子ではありませんでした。大老が首を打たれ、幕府の権威が墮ちたことは残念だが、これから攘夷をおおっぴらに主張できるようになると、むしろ喜んでいるようでした」

劍客として名高い山岡鉄舟は、幕臣の中の攘夷論者である。剣を通じて他藩の藩士や浪士とも交流があった。

高重が、鉄舟と知り合ったのは、安政四年の暮れ、北辰一刀流千葉周作道場の玄武館であった。

高重が、早朝稽古を終え、汗を拭いていた時、一人の目鼻立ちの大きい巨漢が入ってきた。その巨漢が、道場で一礼し、竹刀を持って立ち上がると辺りは急に静かになった。すさまじい気迫のもとに突き出される竹刀の先を誰もかわすことが出来ない。立ち会った門弟のことごとくが後ろ向きに倒れて行く。まるで真劍勝負を見るようであった。

高重は、隣に座っている男に問いかけた。

「あのすさまじい突きをする大男は、何者ですか」

「ご存知ないですか。鬼鉄といわれている山岡鉄太郎（鉄舟）ですよ」

「そうですか。あれが有名な山岡さんですか」

聞きしに勝る鋭い太刀捌きに、高重は、目をそらすことができない。

高重は、鉄太郎の稽古の終わるのを待って近づいた。

「拙者、大草他喜次郎と申します。かねてから貴殿のご高名は、聞き及んでいましたが、お見事な太刀捌き今日始初めて拝見しました。以後お見知りおきを願わしゅう存じます」

「初めてお目にかかります。山岡鉄太郎です。お恥ずかしいところをお目に掛けました。大草殿といえ、あの鎌倉遠馬で高名な……。いやご無礼しました。以後ご昵懇に願います」

鉄太郎は、高重が、騎馬や騎射だけでなく剣にも優れていることを一瞬のうちに見抜いた。

鎌倉遠馬とは、安政二年（一八五五）三月二十三日、江戸から相模鎌倉八幡宮まで三十二里をわずか四時間で往復したという記録を打ちたて、江戸市中を沸かせた出来事のことである。その快挙によって高重の名は、広く世間に知れ渡っていた。

（二）幕臣攘夷派

大草高重は、かねてから幕府の弱腰外交に批判的であった。徳川家の祖法を守り、夷荻を退け、朝廷を敬い、御公儀の力によって日本国の統治を存続すべきであると考えていたのだ。

鉄舟も高重と同じ考えで、幕府は率先して攘夷を行うべきであるとしていた。意気投合した二人はそれから急速に交友関係を深めて行くことになるのである。

大草他喜次郎高重（後徳川慶喜の勧めで太起次郎と改める）は、天保六年（一八三五）七月二十三日、五百五十石取りの旗本和田勝正の次男として丹後の大津浜陣屋で生まれた。十三歳のときに騎射の名門大草家の養子となった。

養父大草高克には、男子がなく、禄高三百石取りの譜代旗本としての大草家を絶やしてはならないとし、盟友和田勝正の次男を養子に迎えたのである。

屋敷は、上野「不忍の池」付近の旗本侍屋敷の立ち並ぶ一角にある。敷地五百坪、建坪六十坪、玄関、馬小屋、表門、それに裏脇に通用門がついていて、若党四人、下女四人、門番一人を抱えた中堅の旗本である。

生家の和田家は、代々騎射の名手の家柄で、十三代勝忠、十四代勝季と二代続いて「重藤の弓」の所持を許されている。和田家と大草家は、騎射を通じて古くから知己の中であり、そんな縁もあって他喜次郎を養子に迎えることになったのである。

一方、山岡鉄太郎（鉄舟）は、天保七年六月十日（一八三六）江戸で生まれた。三河以来の旗本小野家の分家朝衛門高福たかよしの後妻の子である。母は、常陸鹿島神宮の神職塚原石見の二女礒で、先妻の死んだ小野家の後妻として嫁いで来た。小野家は、代々武術をもって徳川家に仕える家柄

で、母の生家塚原家は卜伝を出した剣の名家である。

鉄舟が高名な剣客となったのも両親の血筋を引いているからであろう。十一歳の時、父が代官として飛騨高山に赴任したため、小野家は一家をあげて高山に引越した。しかし、同地で母と父が相次いで他界したため、鉄舟は残された家族と共に江戸に戻った。

江戸では、北辰一刀流千葉周作の玄武館に入門。そこで、大草高重、坂本龍馬、清河八郎などと知り合ったのである。

山岡鉄舟は、剣に加えて他の武術にも興味を持ち、旗本で忍心流の槍の名手山岡紀一郎(静山)道場に入門した。

ところが入門して間もなく師である静山が亡くなってしまった。静山には、弟が二人、妹が二人いた。

静山のすぐ次の弟で、次男の謙三郎(高橋精一・泥舟)は、すでに母の実家高橋家を継いでいる。三男の信吉は、言語障害があったので、妹に婿を取らせ、高橋家を継がせる必要が生じた。そこで鉄舟に白羽の矢が立ったというわけである。

だが、鉄舟の実家小野家は、禄高も家禄も高橋家より高く、彼自身も兄の跡継ぎになることが決まっていた。

どうしても鉄舟を跡継ぎにしたい高橋泥舟は、鉄舟の次の弟金五郎に山岡家の意向を伝えるよう頼んだ。

「金五郎さん、鉄さんに山岡家の婿になってももらいたいのだが、無理だろうか。兄の紀一郎（静山）がぞっこん惚れ込んでね。（あれほど稽古熱心で、真面目に武術に取り組んで、人間を鍛えようとしている人は江戸広といえどもない）とまで言っていたのだ。拙者も、一旦山岡家を出て高橋家に入ってしまった以上、今更また戻るわけにもいかない。無理な相談だと思うが、鉄さんに妹の英子の入り婿になってももらえるようそれとなく聞いてもらえないだろうか。英子もまだ子供だが、鉄さんを慕っているようだしね」

「分かりました。兄に聞いてみます。当方の小野家は、男の兄弟も多いので跡継ぎに困ることはないでしょうから」

金五郎は、折角決まっていた小野家の跡継ぎの地位まで棒に振って、山岡家の婿養子になることはないだろうと思いつつ、鉄太郎にその話を持ちかけた。

だが、話は、金五郎の予想とはまったく違った方向に展開した。

「静山先生が他界される前に、山岡家の跡継ぎに拙者をお望みであったなら、その師恩に報いなければなるまい。幸いに小野家は、跡継ぎの心配はない。英子さんが承知しているのであれば、その話をお受けすると伝えてくれ」

静山先生や高橋泥舟がそれほどまでに自分を高く評価してくれていることに感激した鉄舟は、すぐに承諾した。

それだけではない。実直で武術しか興味のなかった鉄舟も、江戸育ちで日増しに女らしくなっ

ていく英子をいとおしく思うようになっていたのである。

こうしてすぐに縁談がまとまり、鉄舟は、泥舟の義弟となったのである。鉄舟二十歳、英子十五歳、泥舟二十五歳であった。

その後、この二人は、実の兄弟以上に互いに助け合い、幕末の動乱期に、徳川の盾となって目覚ましい活躍をすることになるのである。

(三) 幕府講武所

高重と鉄舟は、安政三年（一八五六）、幕府の設立した講武所で共に師範を務めるようになった。鉄舟は剣術、高重は、馬術と騎射である。

この講武所で、高重は、中條景昭、高橋泥舟、関口隆吉、成瀬三五郎、落合正中、松岡萬^{つもる}など多くの武術師範と親交を深めている。なかでも中條景昭との出会いは、その後の高重の運命を決定づけることになった。

中條金之助景昭は、講武所結成当初から剣術師範として出仕していて、劍豪として知られていた。文政十年（一八二七）六月十九日江戸六番町で生まれた。高重、鉄舟より八歳以上年上である。

中條家は、三河以来三百石取りの旗本の家柄で、景昭は父市右衛門、母ますの長子である。父は、小姓組頭、祖父は、御書院番を勤め、禄高に役料がついて、裕福であった。

幼少の頃より武芸を志し、心形刀流の伊庭如水軒春秀の門下に入り、頭角を現した。さらに、千葉周作の玄武館で学び、剣を磨いている。

山岡鉄舟、坂本龍馬、清河八郎などと同門ではあるが、そのころは、年齢も違い、あまり交流はなかったようだ。講武所で剣術を教えるようになって、高重、鉄舟、泥舟などとも親交が深まった。

景昭の心形刀流の組太刀は、音に聞こえ、明治になってからも、鉄舟との立合いを慶喜の前で披露している。

文久三年（一八六三）五月景昭は「新徴組」の江戸市中取締の支配を命じられ、火中の栗を拾う役割を担うことになるのである。また、幕府旗本攘夷十七人組の一人として、攘夷の実行を迫る建白書を提出している。

旗本攘夷十七人組は、講武所の師範たちを中心に結成された。結成当初は、幕閣に攘夷の決行を促す勢力となったが、時代は尊王開国へと傾き、その流れに抗しきれず、ただひたすら幕臣として徳川家の存続を願って行動した。大政奉還後は、慶喜を護衛する「精鋭隊」を率いて、上野、水戸、駿府と移動している。

二・ 混迷する幕府

（一） 公武合体へ

桜田門外の変直後の三月十八日、万延と改元された。しかし、この年号は長続しなかった。一年足らずで文久に変わっている。

日米通商条約調印と将軍継嗣問題に辣腕を振るった井伊大老暗殺によって、日本各地の尊王攘夷派の武士が勢いづいた。勤皇の志士と名乗る浪士が京で暗躍し都の治安が悪化して来たのである。

幕府老中安藤信正は、開港・通商条約に関する朝廷の反対をかわし、勤皇派浪士の矛先を和らげるため、孝明天皇の妹和宮の将軍家茂への降嫁を要請した。

孝明天皇は、文久元年十月（一八六一）攘夷の実行と京都の治安を確保するため、和宮を家茂のもとに嫁がせることに同意した。公武合体の推進である。

朝廷だけの力では、七百年間続いた武家政権を崩壊させ、貴族政治を復活させることは困難である。開国を迫る外国の圧力をはね退け攘夷を図るには、幕府の武力に頼るほかないと孝明天皇は考えていた。

ところが、幕閣は、当時の世界情勢を比較的正確にとらえていた。

欧米列強の東洋への進出は著しく、日本の国力では、外国の力に抗し、鎖国を続けることは困難である。開国政策を逆戻りすることはできないと判断していたのである。

そこで、幕府は、苦肉の策に出た。

攘夷派の意見も取り入れる形で幕府組織を変え、政治総裁を置くことにした。その総裁に、三

卿のうちの田安家から出た越前藩主松平春嶽を任命した。また、將軍補佐役として水戸家の一橋慶喜をつけたのである。

慶喜は、英邁の誉れ高く、島津斉彬、徳川斉昭、松平春嶽の推挙を得て、十四代將軍の地位を紀州徳川家の家茂と争ったことがあった。

幕府は、孝明天皇の要請に従い、將軍家茂の上洛を図り、京都の治安を回復させるため、浪士の徴募を図ることにした。巷に溢れる浪士を治安部隊として京に送り込み、尊皇攘夷を唱える浪士たちを取り締まろうとした。毒には毒をもって制するという手段に出ようとしたのである。

この浪士徴募は、気骨ある旗本の不評を買った。とくに講武所の教授たちは、不快感を隠さなかった。徳川家に武をもつて奉じてきた旗本をないがしろにして、浪人どもに京都の警護をゆだねるのはおかしいのではないかと反対するものも少なくなかったのである。

だが、旗本の多くは、長期間平和な暮らしに慣れ、尚武の気風を失っている。武術を磨くより、公儀の能吏となることを好む風潮となっていたのだ。

(二) 新徴組と清河八郎

文久二年(一八六二)十二月、小石川の伝通院に設けられた浪士徴募所に大勢の応募者が集まった。浪人、郷土、博徒、百姓、町人とさまざまな身分の者たちで、まともな武士は少ない。

幕府は、二百三十四人の採用を決定し、これに新徴組と名付けた。取扱役に松平主税介、取締

役に山岡鉄舟、松岡萬^{つもろ}を当て、幹部は幕臣で固めた。

ところが、この新徴組の創設には、影で清河八郎が深く関わっていたのである。

「王城を守護し、京都の治安を守るためには、幕府の警察力の強化が必要である。そのためには武術に優れた有為の浪士を諸国から募ることが大切である」と清河は、鉄舟に提言した。鉄舟とは千葉周作道場の玄武館以来の剣友である。

学問もあり博識な清河に魅かれていた鉄舟は、彼の建言を幕閣に繋いだ。攘夷論者として、江戸の浪士仲間の間では知られていた清河を通じ、鉄舟は、江戸の在野の勤皇家とも係わりを持つようになっていたのである。

清河八郎は、出羽国田川郡清川村の出身である。この村の斉藤家の長男として天保元年（一八三〇）十月十日に生まれた。斉藤家は、大地主で、酒造業を営み、苗字、帯刀を許されている。本名は元司。清河八郎とは、後からつけた活動家としての名である。

彼は、学問を志し、江戸に出て東條塾に寄宿生として入った。この東條塾の隣が千葉周作の道場玄武館である。就学途中、諸国遍歴の旅に出たが、再び塾に戻った。その頃から玄武館で剣術修業を積むようになったのである。

文久三年（一八六三）二月十三日將軍家茂は、東海道を通過して上洛の途についた。新徴組は、

その五日前に先発し、中山道を京に向かいすでに到着している。この時は、取扱役が、松平主税介から前駿府奉行鵜殿鳩翁うどのきゅうおうに代っている。

清河は、京都到着後、この新徴組を朝廷の親衛隊とし、攘夷決行の中核隊としようとした。

ところが、それを画策している最中に、前年武州生麦村で起こった事件が、清河の計画を狂わせることになった。

島津久光の行列の従士が英国人一人を殺害し、二人に傷を負わせるといういわゆる生麦事件である。英国は、交渉が一向に進展しないことに腹を立て、江戸に軍艦を差し向けると幕府を脅かしたのだ。

幕府は、京での清河の計画を察知し、この生麦事件で江戸の治安が悪くなったことを理由に、新徴組を江戸に戻すことに決定した。清河は、やむなく新徴組を取りまとめて江戸に帰ることにした。

しかし、江戸に帰ることを拒んだ者が二十人ほどいた。近藤勇、土方歳三の率いる多摩の農民出身の天然理心流の一派と神道無念流齋藤弥九郎道場の師範代芹沢鴨の率いる一派である。

幕府は、江戸に帰った清河の動きを警戒し、新徴組に新しいお目付け役を加えた。取締役に速見又四郎、取締出役に佐々木只三郎、高久安次郎、広瀬六兵衛、調役に依田哲次郎、永井寅之助、山内八郎、中山修助といずれも武術の達人ばかりである。こうして新規加入のお目付け役を中心に、清河暗殺計画がめぐらされたのである。

清河が、上之山藩の金子与三郎の家を訪問したとの情報を得たお目付け役の佐々木只三郎、速見又四郎、中山修助、高久安次郎は、麻布一の橋で、清河の帰りを待ち伏せした。

清河は、金子宅でご馳走になりいささか酔っていた。金子宅を辞したのは、四つ（夜十時）過ぎである。橋を渡りきると、陣笠を被った侍に呼び止められた。

「清河さんですね」

清河が、ふと顔を上げると、四、五人の武士に取り囲まれた。

「そうだが、何か」

相手の顔を覗こうとする瞬間、背後から速見又四郎が抜き打ちざまに浴びせかけた。

清河は肩を切られ、前のめりになり柄に手を掛けたその時、裂帛の気合と共に正面から切り込んだ佐々木只三郎の大刀が、右首筋を切り裂いた。清河の体は、一、二、三、歩、横に足を運びどうと倒れた。首の付け根から肩口にかけての傷口から鮮血が飛び散った。

文久三年四月十三日蒸し暑い夜であった。

（三） 大草高重、自宅謹慎

大草高重は、家茂の上洛に当って、旗本こそが警護の従士として相応しいと考え、随行を希望していた。だが、その思いはかなえられなかった。

それだけではない。かねてから信奉していた慶喜も將軍後見職として、上洛することになった

のである。武家の棟梁とその補佐役が、二人とも京に上り、政治の中心が京に移ってしまう。

思いあまつて、高重は、かねてより旧知の間柄であった次席若年寄村松備中守宅を訪ね、慶喜の上洛を思い留まらせ、家茂の警備には、直参旗本をもって当らせるべきだと建言した。

「旗本は、そもそも神君家康公以来、代々幕府より碌を受け、徳川家のために武をもつてお役に立つための家臣たちです。将軍が上洛されるというのに何ゆえあつて、氏素性のはつきりしない急ごしらえの新徴組などに將軍家の警護を任せるのでござろうか」

「貴殿の誠忠の志にはほとほと感じ入った。まだ幕臣にも貴殿のような三河武士の心を持ち続けている旗本がいるとは心強い。しかし、新徴組の上様警護はすでに決まったことである」

「決まったことならばいたし方ございません。しかし、何故後見職の一橋慶喜様までが、ご上洛いたせねばならないのか合点が参りません。ここに思い留まるよう嘆願書を認めましたので、ぜひこれを松平春嶽様にご提出いただきとう存じます」

村松備中守は、その嘆願書に目を通した後、おもむろに顔を上げて言った。

「この意見具申を松平春嶽様がお取り上げになることはまずなかろう。受け取られようによっては、お役御免、閉門謹慎のご処分があるやも知れぬ。覚悟の上であろうな」

「もとより覚悟はいたしております」

高重は、毅然として旗本の気骨を示した。

村松備中守は、数日後、政治総裁松平春嶽に建言した。だが、「今回の浪士派遣は、関白鷹司

輔熙様の御意向でもある」として受け入れられなかった。

その上に、村松備中守は、職を解かれた。

高重もその責任を取って、病氣届けを出し、自宅謹慎をすることになったのである。

三．攘夷の蹉跌

(一) 生麦事件の代償

生麦事件は、内憂外患に苦しむ幕府に、さらに大きな課題を突きつけることになった。島津久光の行列の従士が武州生麦村で英国人を殺傷したこの事件は、責任の所在を巡って幕府と島津藩との対立が生まれた。

それだけではない。交渉の過程を通じて、幕府の権威失墜を国の内外に露呈することになったのである。

英国代理公使ニールは、幕府に殺害者の引渡しと十万ポンドの賠償金を要求した。ニールは、この賠償金を支払わなければ、英国艦隊を横浜港に入港させ、武力行使も辞さない」と幕府を脅したのだ。

幕府は、この圧力に屈して、十万ポンドを支払った。

攘夷論者は、この措置を幕府の弱腰外交と批判している。

幕臣の中からも批判の声が上がった。ことに講武所の師範格の旗本たちは、外国御用掛小笠原長行ながみちと直接交渉に当たった川路聖謨としあきらを非難した。

「薩摩藩士がエゲレス人を切ったからといって何の不都合がござろう。そもそも大名行列を馬に乗ったまま見物するなど無礼千万である。エゲレス人が、日本の習わしを知らなかったために起こった不幸な事件でござった。ただ、いきなり切り殺す必要があったかどうか。もし、払うとしても賠償金ではなく、見舞金程度に留め、それも薩摩に支払わせるべきである。何故幕府が払わなければならないのか理解に苦しむ。なあ、大草殿」

中條景昭は、大草高重に同意を求めた。

「賠償金を支払うとしても薩摩が払うべきで、とりあえず幕府が立て替えただけではあるまいか。外国との交渉の窓口は、幕府が一手に引き受けるということにしなければならぬからだ。日本の大名行列についての慣わしを知らなかったとはいえ、非はエゲレス側にある。日本にいる以上、日本の慣習に従うべきであろう。賠償金などという名目では、払わないほうがよい」

高重は、責任の所在と外交の一元化についての見解を述べた。

「エゲレスは、どうもそれだけでは済ませたくないようじゃ。薩摩にも賠償金の支払いと犯人の差出しを要求して軍艦を鹿児島に派遣するという噂がある。エゲレスは、弱いと見れば脅しをかけて金をむしり取ろうとしているのだ」

景昭はいまいましたように言った。

生麦事件に対する幕府の対応は、朝廷の耳にも達した。幕府の弱腰外交を非難する声が朝廷内にも高まり、孝明天皇は、攘夷決行の日を具体的に示すよう上洛中の家茂に要求した。家茂は、苦し紛れにその日を文久三年（一八六三）五月十日と回答したのである。

しかし、欧米諸国と通商条約を結んでしまった幕府には、攘夷の決行などできるはずがない。切羽詰まった幕府は、外国御用掛小笠原長行を通じて、英、仏両国に横浜港閉鎖の交渉をした。が、歯牙にもかけられなかった。

英国は、十万ポンドの賠償金を幕府に支払わせるだけでは満足しなかった。薩摩に対しても、犯人の処刑と賠償金二万五千ポンドの要求を突きつけたのである。

薩摩は、これを拒否した。

ニールは、外交交渉では解決できないと判断し、実力行使に出た。

六月二十二日、キューバ提督率いる英国軍艦七隻が、鹿児島湾に入港、薩摩との砲撃戦が開始された。

薩英戦争である。戦闘は、激烈をきわめ、英国軍艦も損傷し、死傷者を出している。薩摩側の損害も大きく、砲台が破壊され、民家にも被害が及んだ。

この戦いによって英国は、薩摩の実力を見直し、薩摩は、攘夷が困難であることを悟った。それから英国と薩摩は、急速に接近することになるのである。

一方、長州は、幕府の約束した攘夷決行の文久三年五月十日に、関門海峡を航行する米国商船を砲撃。同月二十三日には、フランス軍艦、その三日後には、オランダ軍艦を砲撃した。フランス、オランダ軍艦は、横浜港に回港し、直ちに長州の暴挙を幕府に抗議した。

ところが、幕府は、強硬に攘夷を主張する長州の暴走を止めることができなかった。

幕府の対応に不満を募らせたイギリス、アメリカ、フランス、オランダの四国は、翌年の元治元年（一八六四）八月、艦船十七隻の連合艦隊を組織し、報復のため長州へ出撃、陸戦隊を上陸させて砲台を占拠した。長州は、惨敗し、停戦を要求して、関門海峡の自由航行を認めたのである。

攘夷決行のため、長州が、外国船を砲撃した直後の文久三年八月、京都で政変が起こっている。攘夷派の少壮公卿と結びついた長州が、薩摩と会津によって京都を追われたのである。京都における政治的発言力を失った長州は、元治元年七月、藩兵を率いて京都に攻め上ったが、会津、桑名、薩摩軍によって敗退した。いわゆる禁門（蛤御門）の変である。

幕府は、禁門の変の直後、天皇に長州追討令を要請。直ちに九州、四国、中国の大名二十一藩に出兵を命じ、十一月十八日に総攻撃を開始することに決定した。だが、長州藩は、幕府に謝罪し降伏したため、攻撃を免れた。

禁門の変、下関戦争と相次いで敗れた長州は、内部紛争が起き、これまでの尊皇攘夷から勤皇倒幕へと藩論が大きく傾いて行った。

(二) 泥舟、鉄舟の蟄居

幕府は、文久三年四月、新徴組を江戸に帰還させ、清河を殺害したものの、二百人を超す浪士たちの取扱に苦慮した。ほっておけば何をするか分からない撃剣集団である。

幕府は、懐柔策に出た。それぞれに屋敷を与え、手当を出して、庄内藩お預りとし、江戸市中取締りに当らせることにしたのである。

高橋泥舟と山岡鉄舟は、文久三年二月、將軍家茂警護と新徴組監督のために京に上った。泥舟は、京で鶺鴒うどのきゆうおう翁おに変わり新徴組取扱となり、鉄舟は、取締役となった。そのことが後に、二人にとって、災いとなるのである。

二人は、新徴組を引き連れて江戸に帰還した。

帰還後、二人は、新徴組を朝廷の親衛隊にしようとする清河の意図を見抜けなかった罪により、蟄居を命ぜられた。

また、速見又四郎、佐々木只三郎をはじめ京で出役を仰せ付けられた幕臣たちも監督不行届きの咎で、免職となっている。

泥舟、鉄舟の蟄居の噂は、城中を駆け巡った。両人が幕府への反逆を企てたとまで囁かれる始末であった。

「大変だ。御老中水野様のお声がかかりで、奥州相馬、越後の新発田藩が、二千の兵を率いて討手

に来るといふ噂がある。どうやら反逆の疑いをかけられているらしい。逃げたほうがいい」

泥舟の門弟井戸金平が馬に乗って駆けつけて来た。夜明けも近い。外はひんやりとした空気に包まれている。

松岡萬つむぎほか数名の門弟が、続々と集まって来た。逃げるべきか、戦うべきか、はたまた切腹すべきか議論が分かれた。

「お主たちの拙者を心配してくれる気持ちは有難い。だが、二千の討手が来ればどうあがいても勝ち目はない。幕閣に対する反逆の気持ちなどまったくなくないのだから、きちっと申し開きをする。それでも分かって貰えなければ切腹するまでだ。なあ鉄さん。そうしようじゃないか」

泥舟は、鉄舟の顔を覗きこんで言った。

「すまない。清河の件では、兄上を巻き込むことになってしまった。何もやましいことはないから逃げることはない。だが、無実の罪に問われることは残念だ。申し開きが聞き入れられなければ、武士らしく切腹するよ。覚悟はできている」

鉄舟はそう言って、にっこり笑った。

しばらくすると、幕閣内でも泥舟、鉄舟を擁護する声上がり、伝通院に集まった兵は、やがて引き上げて行った。

落葉も消え、霜の降りる季節となった。鷹匠町の庭の草花も枯れ、土が白く盛り上がっている。

反逆者という罪は免れたものの、鉄舟は、尊皇攘夷浪士を擁護。泥舟は、鉄舟の言動を放任していたとして、蟄居よりさらに罪の重い永久閉門を言い渡された。

鉄舟と泥舟は、鷹匠町の屋敷から出ることができなくなってしまったのである。だが、夜になると門人、友人が入れ替わり立ち代り裏門からやってきた。道場で槍の稽古をする者、居間で時局談話をする者など普段と変わることはなかった。

慶喜の上洛に異を唱えて、謹慎中の大草高重も、ときどき暗くなってから鷹匠町の鉄舟の家とすぐ隣にある泥舟の家を訪ねている。

門人たちとの稽古や来客者たちとの世間話を通じて交流を深めるためである。その間に高重は、次第に攘夷の実現が困難であることを感じるようになっていた。

それを裏づけるかのような報せが薩摩からもたらされた。薩摩が、英国艦隊の砲撃を受け、かろうじて撃退したものの、城下に大きな被害が及んだという報せである。

(黒船のすさまじい砲撃に対して、お台場にある砲台程度では、とても防ぎきれものではない) 外国の軍事力が、予想をはるかに上回る強力なものであることに、高重は、気づき始めていた。

十一月初旬の冷え冷えした夜、高重は、謹慎の身であるにもかかわらずそつと家を抜け出し、鉄舟の家を訪ねた。

先客がいる。松岡萬つもろである。鉄舟と攘夷の実施の是非について論じていた。高重は、すぐさまその議論に加わり、日頃思っていたことを率直に語った。

「山岡さん。松岡さん。拙者は、一日も早く攘夷を実行したいと思っている。だが、今、それを決行しても成就するだろうか。仮に、黒船の一隻や二隻焼討し、奪い取ったところで、本国から続々と新手の黒船を送り込まれば防ぎきれものではない。異国船は、新式の大砲や鉄砲を持つていて、弾も豊富で、遠くに飛ばすことができる。弓でまともに戦っても勝ち目は薄い。夜陰にまぎれて射こむなら何とか対抗できるかも知れないが、それには熟練した射手を相当数揃えなければならぬ」

「確かに大草さんの言うとおりだ。だが、攘夷は、帝のご意志であるからその臣下としての徳川家は万難を排しても実行しなければならない。武器は劣るが、接近戦に持ち込めば、鍛錬を積んだ大勢の武士を抱えるわが方に分があると思う」

鉄舟の言葉について松岡も強硬論を唱えた。

「幕府が国を閉ざしたのは、家光公以来である。それから外国船の来航は、長崎だけとし、平和を保ってきた。あえて外国と戦う必要はないが、国を開かなければ、武力に訴えても開かせるといふ強圧的な態度が気に入らん。幕府、朝廷が一丸となって事に当れば、攘夷も不可能ではない。幕閣にその気概がなければ駄目だ。まずは、將軍家が先頭に立ち、諸侯に攘夷の必要を説いていただかなければなるまい」

五日後の十一月十五日、酉の下刻。泥舟は、道場へ出て一人槍の稽古をしていた。そこに鉄舟

が現れた。茶を振舞うため、彼を居間に通した。すると外から半鐘の音が聞こえている。

泥舟と鉄舟は、雨戸を開けてみた。城の方角が赤々と燃え、火花が飛び散っている。すわ一大事。泥舟は、閉門中であつたが、すぐに白無垢を着て、その上に火事装束をまとい、登城の支度をした。

泥舟は、馬に跨り、鉄舟は、槍を抱え、門を出ようとした。すると、松岡萬が血相を変えて長巻を持って現れ、泥舟の行動に加わつた。泥舟の騎馬の両脇を鉄舟と萬が固めて、炎上中の江戸城に駆けつけたのである。

二の丸は、焼け落ちたが、夜明け近くなつて鎮火した。泥舟と鉄舟の忠勤振りは周りの人の心を打った。老中では、謹慎を破つてまで登城した二人の行為の是非をめぐつて議論が分かれた。

二人は、鎮火後、切腹を覚悟で自宅に閉じこもり沙汰を待った。もともと幕府への反逆心などなく濡れ衣である。そのことを熟知している友人、門弟たちは、老中酒井雅楽頭うたのかみに二人の忠誠心がいかに厚いかを訴えた。その訴えが叶えられ、閉門を解くという御沙汰が下つた。晴れて疑いが解かれたのである。

その後、泥舟と鉄舟は、徳川家の存続、慶喜の警護、大政奉還後の名誉回復のために心血を注ぐことになるのである。

(三三) 尊王攘夷派の凋落

文久、元治、慶応、明治へと移る幕末の動乱は、歴史上日本が、最も激しく揺れ動いた時代である。

そのわずか七年足らずの間に、鎌倉以来八百年近く続いた武家政権が倒壊し、王政復古の名の下に、西欧式絶対君主制度を取り入れた藩閥政治が、生まれている。

文久三年（一八六三）の薩英戦争によって、英国の武力の強大さを目の当たりにした薩摩は、攘夷が困難であることに気づき、開国、倒幕へと藩論が傾いて行った。

その翌年の元治元年（文久四年二月二十日元治と改元）は、攘夷派のとった組織的な活動の最後の年となった。三月には、水戸藩の武田耕雲斎、藤田小四郎たちが、尊皇攘夷を旗印に、筑波山で挙兵し失敗した。さらに六月には、長州を主力とする京での尊皇攘夷派の浪士の掃討が行われた。

新撰組による池田屋事件がその最たるものである。この事件によって、近藤、土方率いる新撰組が一躍有名となった。半面、勤皇の志士からは、深い恨みを買うことになるのである。

池田屋事件は、攘夷派の公家を京から追放した文久三年八月一日の政変と並んで、京での長州の政治勢力を一掃することになった。

失地回復を図るため、長州は、軍を京に向けた。会津、薩摩を主力とする親幕府軍と元治元年（一八六四）七月に蛤御門で戦い、大敗を喫した。

窮地に立った長州に、さらに追い討ちをかけるように、イギリス、フランス、アメリカ、オラ

ンダの四国連合艦隊が、下関の砲台を占拠した。

幕府は、長州征討を決定し、西国二十一藩に兵の動員命令を下した。

幕臣たちの間でも、長州征討の気運は、高まっている。

だが、講武所の高橋泥舟、山岡鉄舟、中條景昭、大草高重などの幹部たちは、長州征討には、懐疑的であった。

「夷荻が国を狙っているようなときに、内輪もめでもあるまい。まずは幕閣が、各藩に命じて、国防建白書を差し出させ、沿岸警備を怠りなくさせることが肝要である。長州には、責任者の処罰を厳格に行うよう命じ、若い藩士たちの暴走を防ぐ手立てを提出させればそれでよい」

泥舟は、長州討伐に反対して、そう語った。

「おいたわしいのは、家茂公だ。お若いのに総大将として出陣しなければならない。講武所のおれらは、付き従って行くべきであろうが、今、この時期に江戸を空っぽにしては、江戸の治安が守れない。外国にも、つけいる隙を与えることになる」

景昭は、家茂の若さと江戸の治安を心配した。

「ところで、京では、新徴組にいた多摩の天然理心流の近藤一派が、会津侯お預けとなり、新撰組と名乗って、ずいぶん暴れているらしい。池田屋では、見事な働きをしたと評判が高い。これからどんな動きをするであろうか。注目しているところだ。鉄さんはどう思うね」

泥舟は、池田屋事件で有名を馳せた新撰組が、傾きかけた幕府の支えになることができるのか、

聞いて見たかった。

「そうさね。隊長の近藤は、よく知っている。実直な男だ。多摩の百姓の出で、武士になりたがっていた。それも直参旗本だ。今は、会津藩お預けとなっているが、手柄を立てて、やがては旗本にしてくれと言ってくるだろう。幕府の力が衰えたこの時期にあつて、幕臣がだらしないから余計に目立つ。これからも幕府のために働き、注目されることになると思うよ」

鉄舟は、新徴組に応募してきた近藤勇の精悍な顔を思い浮かべながら語った。

「確かにそうかもしれない。だが、われわれ幕臣にとっては、百姓上がりの連中に功名をさらわれるのは、なんとも情けない。そのためにも講武所をもつと隆盛にしなくてはならない」

高重は、講武所を充実することによって旗本の名に恥じない誠忠の士を養成し、難局に当るべきだとの考えを示した。

四．最後の将軍

(一) 長州征討の失敗

長州征討は、幕府内の反対論を抱えたまま強行された。元治元年七月、将軍後見役の徳川慶喜は、孝明天皇に謁見した。

天皇は、公武合体によって、難局を切り抜けることを考えていた。勤皇を唱えながら、京の治

安を乱す長州の浪士たちを快く思っていないなかつたのだ。むしろ京にいる將軍後見役兼禁裏守護総督の慶喜に大きな期待を寄せていたのである。

その頃、景昭、高重などの攘夷十七人組は、江戸にいた。長州を憎悪する声は、江戸の町に広がり、外桜田にある長州の上屋敷と麻布の中屋敷が、多数の鳶と町火消しの手で破壊され、取り壊されている。

高重は、それを聞いて上屋敷に駆けつけた。屋敷は、すでに取り壊され、大勢の見物人で賑わっている。

「長州が憎いとはいえ、將軍家のお膝元で、町人が暴動まがいのことをするのは捨て置けぬ」

高重はそう言って、しばらく壊れた屋敷跡に立って、石を投げつける町人を制止続けた。

長州征討には、家茂自ら出馬するはずであった。だが、十月になって長州は、恭順の意を示し、謝罪した。幕府は、それを受けて、征討を取り止めたのだ。

ところが、その後長州では、高杉晋作、桂小五郎を中心とする反幕勢力が、藩内の主導権を握った。彼等は、徹底抗戦の構えを見せ、幕府に反旗を翻したのである。

それを知った幕府は、慶応元年（一八六五）四月、（元治二年四月七日、慶応へと改元）第二次長州征討を布告し、五月には家茂自ら江戸城を出発、上洛した。その後、拠点は大坂に定め、大坂城に入城している。

長州征討には莫大な戦費を必要としたため、一年余りの準備期間をかけている。

幕府は、江戸、大坂の豪商、社寺に献金を命じ、兵糧その他の軍需物資を大量に買い集めた。そのため諸物価が著しく高騰し、庶民の暮らしは悪化するばかりであった。

その頃、幕政改革があり、兵制もヨーロッパ式を取り入れることになった。

旗本を集めて西洋風の銃隊を編成、奥詰銃隊としている。これによって、講武所の教授方である中條景昭、高橋精一は、任を解かれ、大草高重の騎射指南役も廃止された。刀槍、弓による日本古来の戦法では、鉄砲や大砲を中心とする近代戦には、太刀打ちできないことを幕閣も気付いたからである。

騎射指南役の廃止に対して異議を唱える上申書を配下の武士が提出した。だが、取り入れられなかった。高重も配下の幕臣が幕府の方針に反して、上申書を提出したことに責任を感じ、自宅謹慎した。その間に御役御免となっている。

攘夷十七人組は、幕府方針によつてほとんどが御役御免となったが、結束はさらに強まり、江戸城明け渡し後、慶喜の親衛隊として動乱の時代を駆け抜けることになるのである。

慶応二年、幕府は、大軍をもつて長州を取り囲んだ。しかし、旧式の装備で戦意の希薄な諸藩を統率し、戦場の士気を高める能力に欠けていた。

連戦連敗となったのである。その上、幕府及び各藩の征長準備期間中に、薩長同盟が成立している。そのため薩摩は参戦しなかった。そのことも諸藩の士気に大きな影響を与えることになっ

た。

幕府にとっての不幸は、それだけではなかった。大坂城内で十四代将軍家茂が突然病床に伏せ、七月十七日、不帰の人となってしまったのである。家茂の突然の死は、幕府軍に衝撃が走り、長州征討は中止された。

十五代将軍は、徳川慶喜と決まった。慶喜以外に幕府の命運を託すことのできる人物はいなかったのだ。慶喜は、水戸に蟄居している間に多くのことを学んだ。水戸は、光圀以来、伝統的に尊王意識が強く、父の斉昭は、尊王攘夷論の草分け的存在であった。慶喜もその影響を受けて育ったのである。

だが、蟄居中に日本を取り巻く国際環境は、大きく変貌した。諸外国の開国への圧力がますます強まった。列強諸国の実力を目の当たりにした慶喜は、攘夷がもはや困難であることを実感したのである。

(尊王の思想を変えないで朝廷と幕府の間をいかに調整し、この難局を切り抜けるか)

山積する問題を抱えて、慶応二年(一八六六)十二月五日、慶喜は、将軍職を継いだ。

その直後、相次いで幕府の屋台骨を揺さぶる事件が起きた。

孝明天皇の崩御と薩長同盟の成立である。

慶喜が将軍となったその月の二十五日、公武合体を推進した孝明天皇が崩御され、幕府は、強力な後ろ盾を失ってしまった。

（幕府の政治、経済、軍事力は、悔りがたく、薩摩、長州などの雄藩の力だけでは、日本国の統治はできない。幕府が率先して行動を起こさなければ、攘夷など無理だ）

そう孝明天皇は、感じていたに違いない。その孝明天皇の崩御は、幕府にとって、大きな支柱を失うことになったのである。

さらに、薩長同盟の成立は、幕府の権威を失墜させた。反幕勢力を勢いづかせ、西南諸藩の幕府離反を誘うことになったのである。蛤御門で敵味方に分かれ、激しい戦いをした薩摩と長州がまさか手を取り合い、西南諸藩を糾合し、立ち向かって来ようとは、幕府には、思いも寄らなかった。この二つの変事は、幕府にとって大きな誤算となったのである。

（二）大政奉還

慶応三年（一八六七）一月九日、睦仁親王（後の明治天皇）が践祚した。長州征討の失敗は幕府の威信を大きく傷つけることになった。幕府は、もはや日本を独力で統治する能力を失っていたのだ。

兵庫開港の期限が迫っている。

慶喜は、薩摩の島津久光、宇和島の伊達宗城^{むねなり}、越前の松平春嶽^{しゅんがく}、土佐の山内容堂^{ようどう}を呼んで議論を尽くし、政局の打開を図った。一月十九日、慶喜は、これら諸侯の意見を入れ、孝明天皇の国葬を理由に、ついに長州征討軍の解散を決断した。小倉城の陥落も、この決断を促す要因とな

った。

孝明天皇の大葬儀は、同月二十七日に行われた。

懸案の兵庫開港問題は、再三朝廷の却下を受けたが、粘り強く説得工作を行い解決した。すでに歴史の歯車は、開国へと回り出していたのである。

兵庫開港と長州からの撤退、この二つの問題を解決し、何とか体面を維持しながら幕府は、命脈を保って十月を迎えた。

しかし、それも薩摩、長州、土佐など西国雄藩の政治勢力に、膝を屈する時が来た。

慶応三年十月十四日、徳川慶喜は、朝廷に大政奉還を願い出た。就任後わずか一年足らずの將軍職であった。二百六十五年間続いた徳川幕府も終焉を迎えたのである。

だが、国政を朝廷に返還したとはいえ、幕府の政治組織はそのまま残っている。大政奉還によって、国政がどのように変わっていくのか誰も予想できない。

慶喜は、大政奉還後、有力大名による合議政体になったとしても、その主導権は、幕府が握ることになると読んでいた。

長期政権によって、行き詰まった幕府の官僚組織では、この難局を切り抜けることは困難である。だからといって朝廷や薩長だけでは、国の運営はできない。天皇の名のもとに雄藩の力を結集することによって、倒幕運動を抑え、徳川家主導のもとに新しい政体を築き、政権の維持を図

ることができると考えていたのである。

ともあれ、大政奉還は、幕府はもとより、朝廷、諸大名を巻き込んだ政治的大混乱となった。世情は騒然とし、物価は高騰。京や江戸の治安は悪化し、各地で農民一揆も起こっている。

そんな時、大政奉還の発案者である土佐の浪士坂本龍馬が殺害された。

惨事は、十一月十五日夜、京都河原町の醤油屋近江屋新助の二階で起こった。同じ土佐出身の中岡慎太郎も共に惨殺されている。誰が暗殺命令を下したか。また、実行犯は誰であったか。すぐには分からなかった。

後世になって、佐々木只三郎、今井信郎など幕府見廻組の犯行であることが、ほぼ明らかにされている。今井信郎が、後に自分たちが殺害したと自供しているのだ。が、誰の命令であったか、現在でも、解き明かされていない。

大政奉還は、武力による倒幕を凶ろうとする薩長や岩倉具視などの公家グループにとっては、都合の悪いものであった。彼等は、慶喜が大政奉還を願い出た日に、天皇から倒幕の密勅を受けている。

大政奉還後の青写真ができないうちに幕府から政治的主導権を奪わなければならない。

薩長は焦った。

慶応三年十二月九日、薩長は、朝廷に働きかけ、王政復古の大号令を発令させることに成功した。それにより、倒幕の気運を一举に高めたのである。

その結果、親幕派の皇族、公家などは失脚。幕府の京都における出先機関は廃止された。それだけでは終わらなかった。

慶喜には、官位の辞退を勧告し、領地返上を命ずることを小御所会議で決定したのだ。

これに激怒した会津、桑名の両藩を中心とする幕府軍は、鳥羽伏見で薩長軍と戦った。が、惨敗した。勢いに乗った薩長は、討幕軍を組織し、江戸に向かって進撃を開始、戊辰戦争へと戦火が広がって行くのである。

鳥羽伏見の戦いで幕軍敗北との報は、江戸の町を混乱に陥れた。薩摩藩士を名乗る浪士が、強奪を繰り返し、江戸の町人に被害を与えている。

山岡鉄太郎、松岡萬、中條景昭、大草高重など江戸の治安を任されていた旧講武所の面々は、暴徒を鎮圧し、治安の回復に努めた。

鳥羽伏見での敗戦を大坂城で聞いた慶喜は、薩長軍が、「錦の御旗」を立て、官軍となったことを知った。慶喜は、將軍として出馬を促す幕臣や親藩の声を無視するわけには行かない。

だが、水戸出身で、尊王思想の薫陶を受けた慶喜は「錦の御旗」が薩長軍に翻った途端、戦意を喪失していた。

慶喜は、孝明天皇の崩御後、朝廷への政治工作が遅れたことを悔やんだ。

（時を失した。大政を奉還し、王政復古となった以上、朝廷に逆らうことはできない。このまま

戦い続ければ日本国中を戦火に巻き込むことになる。それによって弱体化した日本は、植民地化されかねない。今となつては、ただひたすら恭順を貫き、徳川家の存続を図るより道はない」

慶喜は、老中板倉伊賀守と若年寄永井玄蕃頭げんぼのかみを別室に呼んだ。

「予は、ひとまず江戸に立ち戻ろうと思う。鳥羽伏見の戦いに敗れた今、雪崩を打って薩長軍に味方するものが増えるであろう。ましてや、わが軍は旧式の武装で、刀槍に頼っている。新式の鉄砲、大砲を装備した薩長軍に対して勝ち目は薄い。江戸では、幕府軍をフランス式の兵制にし、装備も改めているので、薩長軍を打ち負かすことができる。江戸に戻って再起を図ることのほうが得策である」

慶喜は、会津の松平容保かたもり、桑名の松平定敬さだあき、老中板倉伊賀守、小笠原壱岐守などを引き連れて密かに大坂城の後門より抜け出た。

慶喜には、戦う意志は、始めからなかった。江戸で再起を図るとするのは、恭順の意志を側近たちにも隠し続けるための芝居であったのだ。

こうして慶喜は、慶応四年（一八六八）一月六日真夜中、天保山沖に停泊する幕府軍艦開陽丸に乗り込み、大坂から脱出した。

暗い海の中を走る開陽丸は、波浪に揉まれ、大きく揺れている。それは、あたかも徳川家の前途を暗示するようであった。

(三) 慶喜江戸城退去

十二日明け方、慶喜は、品川沖から小舟に乗り移り、浜御殿に到着した。しばらく休息後、西大手門外下乗橋に出て、城内に入った。勝安房守(海舟)が迎えに出ている。

その夜、城中で大評定が行われた。

「薩長軍は、あくまでも私兵であつて、官軍ではない。錦旗は、朝廷を脅して作らせたものである」

こうした認識では、全員異論はない。

だが、薩長軍に対する徳川家の対応を巡っては、恭順派と主戦派に分かれて激しい議論が戦わされた。

「たとえ朝廷を脅して作った錦旗であろうと、それを掲げる以上、官軍を意味する御旗となる。それだけ薩長の朝廷工作が幕府より巧みであつたということだ。京での朝廷取り込み合戦に敗れたのだ。第一、慶喜公は、ひたすら恭順しているではないか。大将がいなくては戦にならない」

恭順派は、慶喜の意向に従つた行動を取るべきであると主張した。それに対し、主戦派は、

「薩長軍が私兵である以上、錦旗は、形式に過ぎない。古来朝廷は、勝駒に乗つて来た。勝てばやがて朝廷も味方につき官軍となる。幕府には十分戦えるだけの陸軍と海軍を備えている。それにフランスも全面的に後押しすると言っているのだから、負けるはずはない」と反論した。

老中小笠原耆岐守は、大坂から慶喜に随行する途中の慶喜の言動からその真意が分かっていった。

家臣団の意見を「恭順」で取りまとめるため、大久保越中守忠寛ただひろ（一翁）と計って勝海舟を海軍奉行に復職させた。海舟は、すぐに陸軍総裁にも補され大権を任された。彼は、城内の主戦派を巧みに説得し、幕臣の多くを恭順に導いた。

だが、奥羽二十三藩の重役たちは、主戦論を主張、奥羽列藩同盟を形成し、薩長軍との一戦も辞さない構えを見せている。

代表格の庄内藩家老松平権十郎が、海舟を訪れ、徳川家の決起を促した。

「徳川家に対する至誠は、誠に有難く思います。だが、この日本で戦を起こすことは、外国につけ入る隙を与えることになりませぬ。今は、幕府だとか薩長だとか言っている場合ではござらん。政権を朝廷にお返しした以上、朝廷を中心とした新政府を造らねばなりません。そのためには、今は恭順しかないのです」

海舟は、奥羽列藩同盟の自重を促し、徳川家としては、あくまでも恭順を貫くことを言明した。

正月も過ぎた寒い日、中條景昭は、大草高重を深川のとある料亭に呼び出した。夕闇が迫る頃で、灯りがちらほら点き始めている。高重が、女将の案内で中に入ると、奥の部屋に景昭が榊原健吉と共に待っていた。

榊原は、直心影流の達人として、幕臣の間でも広く知られている。

景昭は、真剣な眼差しで高重を見て、おもむろに口を開いた。

「大草殿、貴殿をわざわざ呼び出したのは他でもない。実は、大久保越中守様が拙者に、江戸城内での主戦派が暴発して上様に危害を加えることのないよう、武芸の達人たちを集めて親衛隊を結成して欲しいとのことである。そのための人選を一任された。こうして榊原さんにも立ち会ってもらったのだが、貴殿にも手助けを願っていたのだ。貴殿の人柄と腕を徳川家のために役立てて貰いたい。一肌、脱いでは貰えないだろうか。ここにいる榊原さんもそう願っている」

「中條さんもご承知のとおり、拙者は、騎射にかけての自信はあるが、剣、槍については、それほどはござらん。さりながら、あなたの頼みとあっては、お引受けしないわけには参りません。拙者もかねてから、徳川家譜代の旗本として、主家が危急存亡のこの時、何かお役に立ちたいと思っていたところでござった。そんな折に、結構なお申し出をいただき、微力ながら一命を賭してお役目を果たす所存ですので、お仲間にお加えください」

高重は、景昭の要請に応え、即座に引き受けた。まるで自分の考えを代弁してくれているように思えたのだ。それに、心ならずも朝敵とされた慶喜の心情が、痛いほど分かった。今ここで、慶喜の一命を守ることは、徳川家の存続を守ることになる。譜代の家臣として、当然のご奉公であると思っただのである。

景昭は、熱い眼差しを、高重に向け、両手を差し伸べた。

「即座にお引き受けいただき、かたじけない。武芸については、心配には及ばぬ。貴殿の腕前は、拙者がよく存じている。それに何よりも貴殿のその誠忠の志と人望を役立ててもらいたいのだ」

中條景昭、大草高重たちは、高橋泥舟、山岡鉄舟、関口隆吉、松岡萬などを加え、早速人選に取りかかった。

七十名の隊士がすぐ集まった。幕臣最強の撃劍集団が形成され、「精銳隊」と命名された。頭かしらは、中條景昭、頭取には大草高重が就任した。景昭は、俸禄千石格、御役金八百両、高重は、俸米二百俵と御役金五百両が加給されることになった。

慶喜は、二月半ばの霧の深い早朝、江戸城を退去した。上野東叡山大慈院に引きこもり謹慎を続けるためである。

警護には、精銳隊が当たった。城門を出てしばらくすると、慶喜は駕籠の外に出て、城を振り返った。主をなくした城は、朝霧にかすんで漂っているようである。慶喜の頬に一筋の涙が光っている。景昭、高重など精銳隊の面々は、膝を折り、城に向かって手を合わせた。

五・江戸城明渡し

(一) 精銳隊と彰義隊

上野東叡山大慈院に引きこもった慶喜は、月代さかやきも剃らず、髪も伸ばしたまま、木綿の羽織、袴

を着てじつと庭を眺めていた。

家康公以来、二百六十五年も続いた徳川の時代が音を立てて崩れて行く。その渦中にあることすら忘れさせるほどの静けさである。

四十雀が、高い声を上げ飛び去った。止まっていた枝には、蕾が膨らみ、若芽が顔を出し始めている。

慶応四年三月、春の夕日が薄く庭を照らしていた。

(予が、何故朝敵の汚名を着なければならぬのか)

慶喜は、朝敵とされてしまった自分の政治力のなさを責めた。同時に、薩長のやり方に憤りを感じた。

だが、今、幕府軍を率いて薩長と戦うことは、日本全体を戦乱に巻き込むことになる。それが欧米列強の思う壺である。

それだけは、避けたかった。

(有力大名による合議政体が実現したとしても、今となつては、徳川家がその主導権を取り戻すことは困難である。陋習、門閥、官僚機構がシロアリののように巢食い、幕府の屋台骨を腐らせてしまった。それに、外から開国という大波が押し寄せ、日本全体を呑みこみ、支配されかねない。その大波に呑みこまれないためには、天皇の名のもとに力を結集して、新しい政治体制を築くことが必要である)

慶喜は、そう考えた。

だが、それだけではない。政治の裏に渦巻く権力闘争の醜さにも嫌気がさしていたのだ。今はただ、徳川家の存続を願うのみであった。一命にかえてもそれだけは守りたかった。(ひたすら恭順するしかない)

慶喜は、目を閉じた。すると、迫り来る東征軍の足音が、聞こえるような気がした。

老中の板倉伊賀守、小笠原壱岐守は、すでにいない。松平肥後守は、江戸を出て会津若松に帰っている。庄内の酒井忠篤も帰藩した。幕閣を構成し、権勢を誇った大名は、周りに一人もいなくなつた。

大慈院の外には、中條景昭、山岡鉄太郎(鉄舟)、大草高重、関口隆吉(たかよし)、松岡萬(つもる)などの精銳隊士五十人と高橋精一(泥舟)率いる遊撃隊百人が警護している。

高橋泥舟は、夕日を浴びた木立を眺めている慶喜に声をかけた。

「浅草東別院に上野の上様をお護りするといつて集まった者どもが、彰義隊と名乗り氣勢を上げているそうです。その連中が、暴挙に出ると厄介なことになりかねません」

「予の警護であれば、精銳隊と遊撃隊で十分である。あまり多くの人数が集まると恭順の真意が伝わらなくなる。彰義隊は、まさか幕府の復活を願っているのではあるまいな」

「漏れ聞くところによりますれば、もと一橋の家臣で、渋澤成一郎という者が頭取として彰義隊をあやつっているようです。それに上州甘楽郡岩戸村(かんらくぐん)の名主の次男坊天野八郎という者が副頭

取として隊を取り纏めていると、聞いております」

「どれくらいの人数が集まっているのだ」

「かれこれ六、七十人ではないかと思えます。幕臣は、まだそれほど多くはありません。しかし、薩長のやり方に不満を持つ者が続々と集まって来ているようで、このままですと、上様を担いでこの上野に立てこもり、薩長と一戦を交えるなどと、不屈きな考えを起こす者も現れかねません。そうならないうちにここを引き払い、どこか安全なところにお移りになったほうが得策と心得ます」

泥舟は、慶喜が、武力闘争の渦中に巻き込まれることを怖れた。

京では、有栖川宮熾仁親王ありすがわのみやたるひとを東征大総督とする征討軍が設けられた。慶喜を逆賊として討ち、徳川家を滅亡させなければ、新政府の基盤は、いつ徳川家によって覆されるか分からないとの懸念が、渦巻いていたのである。

その頃、勝安房守（海舟）は、慶喜の信任を得て、陸・海両軍の軍事一切を取扱う徳川家の軍事総裁となっていた。

勝は、幕臣の中では、最も内外の情勢を見通すことのできる人物である。

（幕府は、制度疲労を起こし、もはや幕制の改革だけでは、どうしようもないところまで来ている。西欧列強の力に対抗するには、強力な政府に導かれた近代的な国軍を結成する以外にない。そのためには、内戦による国力の消耗を避け、新しい政治組織のもとに、日本を造り直すことが

必要である)

勝は、その考えをことあるごとに慶喜に伝えていたのである。

慶喜は、薩長から朝敵の汚名を着せられても、じっと耐えていた。誇りを捨て、恭順を守り通し、内戦の口実を与えないようにして来たのである。その忍耐力と朝廷に対する尊崇の念は、水戸徳川家の血脈を引く慶喜の中に生き続けていた。

勝は、江戸を戦火に巻き込まないために、主戦論を唱える危険分子を江戸から体よく追い払うことを考えた。

新撰組もその対象とされた。鳥羽伏見の戦いから帰って来た新撰組の近藤、土方が、東征軍を迎え撃つために結成した甲陽鎮撫隊に、武器及び資金援助と大名取立ての約束をして、甲府に追いやっている。

新撰組が甲州勝沼に到着した時には、すでに乾退助(板垣退助)率いる三千の兵が甲府城に入っていた。鎮撫隊は、散々打ちのめされ、隊は、ばらばらとなり、命からがら江戸に逃げ帰って来た。

しかし、江戸では、敗残の鎮撫隊を受け入れるところはない。近藤、土方などの幹部は、やむなく江戸を出て、佐幕派藩主水野日向守を頼り下総を目指した。

彰義隊は、天野八郎が渋澤成一郎を追い落とした頃から、旗本の二、三男坊たちが隊に加わり、

徳川家の抗戦派からも資金が流れるようになった。それによつて、家格の高い幕臣が頭に据わつた。天野八郎は、頭かしら並となり、その下についた。さらに、組頭格の会計掛、器械掛、本営詰、天王寺詰、真如院詰などの幹部職制を敷いて、組織の充実が図られた。

その頃には、上野に本拠を移している。

また、この彰義隊の指揮下に砲兵隊、純忠隊、臥龍隊、旭隊、松石隊、浩気隊、水心隊、などが附属機関として置かれた。

俸給も幕府から支給されることになり、隊員も一二〇〇人を超すまでに至った。だが、徳川家の正規軍ではなく、強力な指揮官もいなかった。

一方、中條景昭、大草高重、関口隆吉などの率いる精銳隊は、彰義隊が「錦切り取り」と称し征討軍兵士を襲うことを防ぐため、夜中見回りを強化し、江戸の治安維持を凶っている。

慶喜の護衛をするだけでなく、江戸の治安維持から、慶喜の助命嘆願活動まで積極的な働きを見せていた。なかでも精銳隊幹部の関口隆吉たかよしは、輪王寺宮りんのおうじのみやにおすがりして、朝廷から慶喜の命と名誉を保障するお墨付きを戴くよう画策している。

(二) 江戸城総攻撃回避

慶喜の恭順の誠は、東征軍にはなかなか届かなかった。

最後の手段として、駿府まで攻め上つて来た西郷隆盛のもとに特使を派遣することになった。

慶喜は三月五日、勝を呼んだ。

大慈院の周りの桜も綻びかけている。不忍池の水もぬるみ、水鳥が活発に動き始めた。だが、慶喜の心の中には冷たい風が吹いていた。

江戸城総攻撃も近い。

「安房守よ。そちは西郷と親しい。駿府まで出向いて西郷と会い、予の恭順の誠を伝えてもらいたい。徳川家としては、朝廷に逆らう気は毛頭ない。何とか戦にならずに収めたいのだ。だが、そちが行っては、江戸が留守になり、城に残っている抗戦派を抑え切ることができない。誰かそちの代わりに信頼できる人物はいないか」

「はあ、精鋭隊の中でお側に仕えている高橋伊勢守（泥舟）がよろしいかと思えます。あの者ならば冷静、沈着かつ腹も座っています」

「しかし、伊勢は予の側近としてつねに側にいて貰わねばならぬ」

「しからは、伊勢守と相談してみましよう。その上で決めたいと存じます。後のことは、この勝にお任せください」

「相分かった。その方に任せる。江戸総攻撃は、何としても回避しなければならぬ。江戸の町民を薩長との争いの中に巻き込みたくないのじゃ」

慶喜は、江戸城総攻撃が、幕臣たちの薩長への反感を強め、ひいては朝廷にまで怨嗟えんさの聲が広がるのを恐れた。これから日本国を一つにまとめて行くためには、朝廷の権威にすぎるしかない

と考えていたのである。

海舟は、すぐに高橋泥舟に相談した。

泥舟は、何のためらいもなく義弟の山岡鉄舟の名をあげた。

「そのお役目は、山岡鉄舟が最適任かと存じます。拙者の妹婿で、世間では乱暴者などと言われているますが、あれで冷静沈着、細心にして大胆。それでいて妙に人を惹きつけるところがありません。あの男なら西郷さんと会っても気後れしないと思います」

「分かった。では、その者にしよう。駿府に行く前に、わしが西郷さん宛に書状をしたためるの
で、拙宅に取りに来るように申し付け願いたい」

その後、鉄舟は、慶喜から直接内命を受け、その足で勝の屋敷を訪問した。

「よう来なさった。これがわしからの西郷さんへの書状じゃ。ところで、征討軍の中を通り抜けて行くわけだから西郷さんに辿りつけるかどうか分からん。西郷さんをよく知った益満休之助を連れて行くが良い。あの男は、江戸の薩摩屋敷にいて、江戸の町の治安を乱したので、牢屋に入れておいた。つい先だって赦免したばかりだ」

「そうします。益満さんなら拙者も知っています。西郷さんとも親しいと聞いていますので便宜を計らってくださるでしょう。では行ってまいります」

「何分頼んだよ。徳川家の存亡が掛かっているからね。なに西郷さえ引つ張り出せば、後はわしが何とかする」

海舟は、鉄舟の眼差しに並々ならぬものを見た。彼なら、慶喜の真意を伝えてくれるものと確信した。

この時、勝海舟は四十六歳、山岡鉄舟は三十三歳であった。

海舟の書状には、徳川家が恭順を守っているのは、単に徳川家のためだけの問題ではない。それ以上に日本の現状が心配だからである。日本人同士が兄弟喧嘩をしている時ではない。外国の侮りを受けないために、一致団結して国難に当らなければならぬ。それでも、貴方が江戸を攻撃するというのであれば、こちらにも覚悟がある。江戸の町を焼き払っても戦い抜く、というものであった。

益満は、途中箱根で倒れ、清水次郎長一家が代わって駿府まで鉄舟を送り届けたともいわれている。

三月九日、山岡鉄舟は、駿府に到着、料亭松崎屋で西郷と会った。鉄舟は至誠の涙を流し徳川家の立場を訴えた。

「西郷さん。もしお手前が拙者ども幕臣の立場であれば、どのようにされるのでござろうか。主家を救うためとあれば、たとえ朝敵の汚名を被ろうとも、あらゆる犠牲を払って東征軍と一戦を交えなければならぬ。勝さんもそう申しておりました。江戸城総攻撃を取りやめていただければ、城を明け渡すことをお約束いたす」

「分かり申した。じゃつどん、江戸城総攻撃の取り止めをおいどん一人で決めることはでき申さん。大総督宮のご意見を伺い、次第によっては、帝のご聖断を仰ぐことになる。まずは、勝先生とお会い申そう」

西郷は、江戸城総攻撃をひとまず延期する旨、飛脚便で伝えた。

海舟は、鉄舟からの報告を三月十日に受けた。徳川家は、その後江戸町民に、東征軍との話し合いにより、三月十五日の江戸城総攻撃はひとまず延期されたので安心するようにとの高札を出している。

東征軍の本営は、三月十二日池上本門寺に入った。

海舟は、万一東征軍との話し合いが、決裂した場合は、下町に住む火消し、侠客、川岸の連中を動員し、江戸の町を焼き払い、東征軍の駐留を困難にするという作戦を立てていたのである。

三月十三日、高輪南町の薩摩屋敷、同十四日、芝田町の薩摩屋敷で、勝は、江戸城総攻撃中止についての西郷との会談を行った。二人は、肝胆相照らし、多言を要することなく終わった。

西郷は、海舟との会談の後、京都二条城で、三条実美、岩倉具視、大久保利通、木戸孝允、廣澤実臣、後藤象二郎を交えて大激論の末、慶喜の助命と水戸での謹慎を認めさせ、海舟との会談の実効を図った。

城明渡しの条件については、数回のやり取りがあった。当初、慶喜の蟄居先は、備前岡山池田候御預りとの申し渡しであった。だが、勝の強い要請により、水戸に謹慎と変更されている。

会談に先立ち、勝は、横浜の英国公使館を訪れ、パークス公使に、慶喜の助命と徳川家の処遇について、新政府が寛大な処置をとるように口添えを頼んだ。そのことも新政府の態度を軟化させる結果となったのである。

勝が、無事会談を終え、江戸城総攻撃はなくなったとの噂が広まり、町民が安堵の胸を撫で下ろした翌日、元外国奉行の川路聖謨としあきらが自害した。

砲火を交えることなく江戸城明渡しが決まったことを見届け、徳川幕府の崩壊の端緒となった開国を断行した責任を取ったのであろう。

新緑に覆われ、初夏の装いを始めた四月十一日、江戸城の明渡しが行われた。徳川宗家の跡取りとなった田安中納言徳川家達いえざとが出迎え、東海道先鋒総督が入城した。

上段に先鋒総督の大將橋本実梁さねやなこれに西郷隆盛、海江田信義のぶよしなどが居並んで、下段に家達、大久保一翁いちおうちうらが控え、受け渡しが行われた。幕臣たちは、悲憤の涙をこらえ、城内の武器、家財を整え、征討軍に引き渡した。

(三) 慶喜上野から水戸へ

城明渡しの当日、四月十一日の朝、慶喜は、江戸を去り水戸に向かった。

頬はこけ、顎には、無精髭が伸びている。

中條景昭、大草高重の精銳隊二百十六人、高橋泥舟の率いる遊撃隊百七十二人が警護に当たった。谷中から千住に向かう途中、多くの江戸町民が、土下座して見送った。

出発当日は、松戸泊まりとなった。

江戸を離れると急に人家がまばらとなる。宿舎となった陣屋には、夜通し篝火が焚かれている。近くの林から梟の鳴き声が聞こえて来た。

人影らしいものが走った。高重は、提灯をかざし、林の中に分け入った。

とっさに刀の柄に手を掛けた。相手の息使いが、聞こえて来る。

「誰だ」

高重は、提灯を左手にかざした。

月代が^{さかやき}伸び、汚れた着物をまとった浪人風の男が、光の中に浮んでいる。

「慶喜公のご一行とお見受けした。拙者新撰組の生き残りである。警護の一人に加えていただきたい」

「残念ながらお引き受けするわけにはまいらん。新撰組のお方が、この一行に加わっているということが明るみに出れば、慶喜公の恭順の真意が、朝廷側に伝わらない恐れが生じよう。誠に相すまぬが、^{こころ}堪えて、この場を立去っていただきたい。あえて貴殿の姓名は聞き申さず」

新撰組の生き残りと言乗るその男は、高重の気迫に押され、説得に応じた。その悄然とした背中には、敗残の影が漂っていた。

藤代、土浦、片倉を経て十五日には水戸の弘道館に着いた。精鋭隊、遊撃隊が、手分けして弘道館周辺の警護に当たっている。四月二十一日には、大総督熾仁親王たるひとが江戸に入城したとの報せがもたらされた。

中條景昭は、大きな体から、高橋泥舟に声をかけた。泥舟は、黒い筒袖に白い陣羽織を羽織って篝火の脇に悄然と座っている。肩が落ち淋しげであった。

水戸に着いてから、慶喜の御用取次ぎは、気配りの細やかな平岡丹羽に代わったのだ。誠実で一本気な泥舟は、疎まれるようになっていたのである。

「中條さん、大草さん。上様に対するそれがしの役割は、もはや終わったような気がする。警護には、精鋭隊の面々がおられるし、上様の謹慎が解けたら江戸に戻ろうと思っている」

「高橋さん。それは今しばらく思い止まっていたください。ご貴殿がいればこそ、彰義隊や主戦派の連中から慶喜公をお守りすることができたのです。大草殿もそう思ってはおりませんか」

「中條さんの言われる通りです。今となつては、攘夷は、もはや時代にそぐわなくなつてしまいました。慶喜公をお守りして、徳川家の存続を見届けるまでは、高橋さんには、お側においてもらわなければなりません」

水戸にも初夏の風が吹き、卯の花が咲き始めた。

新撰組の近藤勇が、板橋庚申塚で首を切られたとの報せが入った。慶喜が水戸に到着してしば

らく後の四月二十五日のことである。

「首は、塩漬けにされ、京の三条河原に晒された。近藤の娘瓊子たまの許婚勇五郎が、処刑を見守った。勇五郎は、勇の父や兄にすぐ知らせ、駕籠かきを雇い、首のない遺体を菩提寺の竜源寺に埋めた」との風聞が伝わって来た。

高重は、毎日のように、慶喜に召し出された。これといって特別な用向きがあるわけではない。そうした日常の話題の中に、高重の改名のことが出た。

子孫の大草省吾氏と郷土史研究家塚本昭一氏の共著による「牧之原と最後の幕臣、大草高重」は、その時のいきさつを次のように表している。

「貴公の名は、他喜次郎と申すが、太平の世であればしかりと存ずる。が、この後の日本はどう変わるか解らぬ。予は、世捨て人なれども、貴公は、これから世に出る男と見る。他人が喜ぶこと以上に自ら足を地に着け、太く立ち上る相がはつきり見える。依って『太起次郎』と書き名を変え、ることをすすめるが如何か・・・」

「他喜次郎は、親から授かったものにて、大切に修めて参りましたが、今は徳川家に一身を持って捧げる者にて、上様からの仰せは諱名いみなに通ずるもの・・・有難くお受けし、これより太起次郎としてご奉公いたしたく存じます」

こうして、大草他喜次郎は、名を大草太起次郎と書き改めることになったとある。

この時、陪席していた高橋泥舟が、記念に一筆認め、高重に与えるよう慶喜に懇請した。そこで慶喜は、二首の歌を詠み、高重に与えた。その歌は、今でも大草家に、大切に保存されているという。

六・救国の恭順

(一) 彰義隊壊滅と戊辰戦争

大総督熾仁親王たるひとの江戸入城以来、東征軍の横暴が目につき、江戸の町民からも反感を買った。治安も悪化して来た。

彰義隊は、勢いを増し、佐幕派の武士たちが続々と上野の山に集まって来ている。

旧幕臣や脱藩浪人で結成された純忠隊、遊撃隊、歩兵隊、神木隊などが合流し、三千人にも達したのである。

それを見て、事態を憂慮した東征軍作戦参謀の大村益次郎は、彰義隊に総攻撃を仕掛けた。黒門口を鹿兒島、熊本、鳥取藩に、背後の谷中方面には、長州、佐賀、久留米、大村などの諸藩を配置し、本郷の台地には、福岡、岡山、佐賀藩が大砲を据えて上野を取り囲んだ。

彰義隊は、山の周囲に木柵を設け、保塁を築いた。

五月十五日早朝、征討軍の攻撃が始まった。降りしきる雨の中で、白兵戦が展開された。

だが、戦局を決定付けたのは、本郷台地から打ち込まれる無数の砲弾であった。彰義隊の陣地に炸裂して壊滅的な打撃をあたえたのである。

彰義隊との戦いは、それから一年半にも及ぶ東日本の各地で起こった戊辰戦争の幕開けとなった。

薩長の武力による強引な政権奪取に反感を持つ過激派幕臣たちや諸藩の浪人たちの激情がこの上野戦争を招いたのである。

兵数や兵器が劣り、統制も不十分であった彰義隊は、一日で壊滅してしまった。この戦いで寛永寺の堂塔、伽藍の多くが焼失し、千二百軒の家屋に被害が及んだのである。

それでも水戸にいる慶喜は、ひたすら恭順を続けた。

慶喜の恭順が、偽りないことを確認した新政府側は、五月二十四日、徳川家の処分を発表した。

徳川宗家を相続した家達いえさとに、駿河を中心とした領地七十万石を与え、徳川家の存続を決定したのである。

慶喜は、徳川家の存続が決まってひとまず安堵の胸を撫で下ろした。

だが、謹慎がまだ解けたわけではない。

それどころか、水戸の近くの奥州に反新政府の動きがあり、それに巻き込まれる怖れが、強まってきたのである。

江戸無血開城を行い、彰義隊の鎮圧を果たした東征大総督府は、これまでの東海、東山、北陸

三道の先鋒総督兼鎮撫使を廃止し、会津、庄内の二藩討伐のため、新たに白河口、平潟口、越後口の三総督を任命した。

まず、主力をもつて北陸を衝き、残りの軍が、白河口に進撃して会津諸道を封鎖する。その一部を裂いて平潟方面に進出し、浜街道の諸藩を帰順させるといふものである。

これに先立つ慶応四年（一八六八）五月三日、仙台、米沢、庄内藩が中心となって奥羽列藩同盟が形成された。その翌日には、越後長岡藩など北越諸藩が加わり、奥羽列藩同盟に拡大している。

東北諸藩は、恭順をし、謹慎中の会津藩主松平容保かたもりの征討令を総督府が下すことは、公明正大の措置ではないとして、建白書を太政官に提出した。が、取り上げられなかった。

奥羽越列藩同盟に加盟した東北諸藩には、外様大名が多かった。仙台伊達家、米沢上杉家を始め、徳川家に忠誠を誓うほどの恩義はない。同盟を結成した最大の理由は、薩長に対する不信の念であった。

新政府への反対勢力の一掃を狙って隣邦会津、庄内を悪者に仕立てたやり方に対する憤懣ふんまんが、同盟の結成を促進したのである。

高重は、奥羽列藩同盟の動きが心配でならなかった。同盟に参加する水戸藩士が後を立たず、慶喜を担ぎ出して、同盟の盟主とする動きが察知されるからである。それだけは、何としても避けねばならなかった。

越後長岡藩は、当初奥羽列藩同盟に参加する意志はなかった。家老の河合継之助は、新政府側にも奥羽列藩同盟側にもつかず、中立を保ちながら時勢を見極めようとした。

しかし、その願いは、東征軍には届かなかつた。そのため、やむなく立ち上り、すでに東征軍と干戈^{かんか}を交え始めた。

会津攻略も近い。

高重は、江戸に出て、五月一日、鉄舟と面談した。

彰義隊は、すでに壊滅していたが、生き残りの隊士は、町のあちこちに潜んでいる。

高重は、慶喜の身柄が拘束される怖れのあることを鉄舟に話した。

「山岡さん。慶喜公が、このまま水戸にいると奥羽越列藩同盟に担ぎ出されることになりかねない。勝さんに頼んで駿府あたりにお移りいただけると取り計らい願えないだろうか」

「そうですか。それは、憂慮すべきことですね。早速、勝さんに相談してみましよう」

翌日、二人は、海舟の屋敷を訪れた。

海舟は、関口隆吉に、西郷、大久保に実情を訴え、慶喜の赦免と駿府移転を認めるよう頼んだ。

関口は、すぐに小松帯刀^{たてわき}に走った。帯刀は、大久保利通^{ありすのがわみやだいそうとく}に有栖川宮大総督に伺いを立てるよう手紙を書いた。

関口は、その手紙を大久保に手渡した。

「大久保さん。折角、慶喜公の恭順が本物であると国の内外にも知れ渡って来た。これで日本も

大きな戦はない、と諸外国も踏んでいる。政争の具に利用されては困るのです。慶喜公を水戸から駿府に移し、そこでしばらくじっとしていただくことが、新政府にとっても大いに助かることになると思います」

「分かりました。このことは、ありすのがわみやだいそうとく有栖川宮大総督や西郷さんにも凶り善処します」
大久保は、早速有栖川宮に上申し、許可を得た。

奥羽越列藩同盟に立ち向かわなければならぬ新政府は、慶喜の水戸での存在も気になるところであった。

勝は、水戸在住の精鋭隊の半数を江戸に戻るよう命じた。

高重は、水戸に帰る途中、久し振りで家族のもとに立ち寄った。高重の留守宅には、父高克、長男高政、妻うらがいた。高重には当時もう一人和田家に継嗣として出した次男、勝重がいる。

三男の金十郎が生まれたがこの時にはすでに早逝していた。

後に、牧之原入植後は、さらに四男、二女に恵まれ、大草家は大家族となって連綿と続いている。

(二) 水戸から駿府へ

慶喜の駿府への移転が決まった。水戸で慶喜警護に当たっていた精鋭隊二百人のうち百人が残り、後の半数は遊撃隊の二百人と共に江戸に帰ることになった。

警護のために残った精銳隊士も慶喜に従って船で駿府に行く者、慶喜とは別に、陸路駿府に向かう者に分けられた。慶喜の信頼が厚く、腕利きの厳選された者だけが、船で随行することになったのである。

勝は、山岡鉄舟を交え江戸に来た高重と慶喜の駿府移転について話し合った。その結果、高重は、急ぎ水戸に帰り、慶喜を護衛して海路駿府に移動する。鉄舟は、慶喜の受け入れ体制を固めるため、駿府に赴き、大久保一翁いちおほうと協議する。勝は、江戸に残って、新政府との調整を図り、旧幕臣の身の振り方を考えるということになった。

高重は、水戸に着くとすぐ精銳隊、遊撃隊の幹部に江戸での会談の模様を伝えた。その時、鉄舟から書状が届き、駿府の久能山東照宮が、新政府の手にゆだねられる怖れがあると書き送ってきた。

東照宮には、神祖家康公が祀られている。何としても新政府軍の占拠から守らなければならぬ。

精銳隊頭の中條景昭は、全員駿府に赴き、久能山を守ることを命じた。

慶喜は、北越、会津での戦争が続いている限り、水戸においては、恭順の誠を貫くことは困難であると判断し、駿府移転に同意した。

慶応四年七月十九日夕刻、慶喜は、水戸を出発した。景昭と高重は、松岡萬つとむると共に厳選され

た精鋭隊員を率いて警護に当った。

下町から小船で那珂湊に着き、祝町から徒歩で鉾田に出て、再び舟に乗り、銚子に到着した。銚子沖には、榎本武揚が回航させていた旧幕府軍艦「蟠竜」が停泊している。それに乗り清水湊へと向かった。海上三日の船旅である。

高重は、甲板に立ち、物思いに耽っている慶喜の姿をしばしば見かけた。その沈鬱な表情は、何人も近づきがたいものがあつた。

清水湊に着いた慶喜は、精鋭隊に護られて松並木の街道を進み、宝台院へと向かった。とつぷりと日が暮れ、灯明が闇の中に光っている。精鋭隊の他には、お供は、医師、御膳所の者を含めて十人ほどしかない。

宝台院は、徳川家康の開基で、二代將軍秀忠の生母西郷局昌子ゆかりの寺である。もともと竜台寺と称す寺であつた。

寛永五年（一六二八）七月、西郷局へ朝廷から正一位追贈がなされた。その時贈られた「宝台院殿一品大夫人松誉貞樹大祿尼」の法号宝台院をとって、三代將軍家光が、竜台寺を宝台院と改めたのである。

寺領三百石、格式の高い寺である。

宝台院には、中條景昭、大草高重など精鋭隊士が慶喜の身边警護に当つた。

慶喜は、精鋭隊全員が、宝台院の周りで警護に当るのは、恭順中の身にはかえって目立ち過ぎ

るとして、人数を減らすよう景昭と高重に言った。

駿府には、無禄移住の旗本たちが、続々と集まって来た。まず住むところの確保をしなければならぬ。ところが、駿府は、江戸に比べて町の規模が小さい。近隣の農家や町屋を借り受け居住する者も少なくなかった。その頃の駿府の民家は四千戸。とても収容しきれぬものではない。夜具も不足した。近郷近在から借り集めて来て何とか凌ぐ有様であった。

物価も高騰した。

清水湊では、鉄舟と親交の深い清水次郎長の子分たちが近くの民家や寺院を借り受け、続々と舟で到着する旧幕臣たちの宿泊所の確保に尽力している。

北越の地を朱に染めた凄惨な戦いは、八月半ば過ぎまで続いた。長岡藩の兵力は少なく他藩からの応援の方が多い。加えて、「衝鋒隊」のように上野戦争に参加し敗れた部隊も、この北越戦争に参戦している。後に牧之原の開拓に大きな足跡を残した今井信郎のぶおも「衝鋒隊」のリーダーの一人として参戦した。

慶応四年七月二九日東征軍千人余、長岡軍千二百人の戦死者を出して北越戦争は終結した。

さらに、明治元年（慶応四年九月八日に明治と改元された）九月二十二日会津藩、二十三日庄内藩、二十五日盛岡藩が相次いで降伏した。東征軍と戦った会津、庄内、盛岡の藩兵及び応援部隊合わせて三千人が戦死。東征軍も五百人余の犠牲者を出して奥羽での戦いは終わった。

しかし、それだけではまだ済まなかった。戦いは北海道へと持ち越され、榎本武揚たけあき率いる榎本軍との函館はこだて五稜郭ごりようかく戦争が翌年の明治二年四月に始まった。

この函館戦争も明治二年（一八六九）五月十八日、両軍合わせて千人余りの戦死者を出し、榎本軍が降伏して終結した。

一年半に及ぶ明治戊辰戦争は、これをもってすべて終結し、薩長を中心とした新政権が、権力を掌握したのである。

（三） 困窮する幕臣たち

景昭と高重は、高橋泥舟、山岡鉄舟と相談し、精鋭隊を「東照大権現の守護」を目的とする集団に切り替えた。そして、久能山の山麓の近くにある石蔵寺、照久寺、大王寺、本覚寺などのほか三保神社や名主、豪農の納屋などを借り、隊士を住まわせることにした。

その時、精鋭隊という名称は、新政府軍を刺激することになると考え、明治と改元された九月八日、東照宮守護を目的とした新しい組織であるという意味を込め、「新番組」と名付けた。

慶喜たちが駿府に入った時には、すでに新政府軍は駿府を引払っていて、東照宮が、壊される怖れはなくなっていた。そのため、東照宮守護は、もはや名目だけに過ぎなくなっていたのである。

高重は、景昭と共に照久寺を宿舎とした。この寺は、久能山城の守将榊原清政の一子照久を祀

っている。晩年の家康は、照久を側近として重用したという。

新番組の隊士は、宿舎が定まったので、いよいよ家族を江戸から呼び寄せることになった。

慶応四年八月、徳川宗家を継いだ家達は、駿府に向けて江戸を発った。行列は、御側用人、御小姓、御小姓衆奥詰目付、御徒目付、合わせて総勢百人足らずであった。

かつて駿府奉行を務めたこともある大久保一翁いちおうが、八月十五日江尻で出迎えた。家達の入城に当って受け入れの準備をするため先着していたのである。

駿府入りした行列は、まず宝台院を訪ねた。謹慎中の慶喜に挨拶し、西郷局の御霊屋に参詣した。

数えで六歳になったばかりの家達は、まだ子供で、駿府七十万石を支える力はない。

「何分にもよろしく頼む。徳川家も予の代で潰さなくてよかった。これから世の中が大きく変る。

そちや勝などが亀之助（家達）を盛り立てて、家臣の暮らしの立つようにしてくれ」

慶喜は、徳川家の命運を大久保一翁や勝海舟に託したのだ。

「承知いたしました。この一翁一命をもって徳川家をお守りいたします」

大久保は、慶喜の心中に去来する複雑な思いを察し、顔を上げることができない。陪席していた高重も平伏したままじっと嗚咽をこらえていた。

家達が宝台院を出て駿府城に入ったのは、正午過ぎであった。城は緑に包まれ、ひっそりとしている。木々の葉を揺らす風に秋の気配が感じられた。

勝海舟は、この頃、新政府軍との連絡方として江戸に残っていた。七月十七日に江戸は、東京と改められ、天皇の御所が、京都から江戸に移った。九月八日には、慶応から明治へと改元されている。

勝が残務整理を終わって、駿府に移ったのは十月の末である。高橋泥舟も家達の用人として十月初めに駿府に到着、いずれも山岡鉄舟が出迎えた。

温暖な駿府にも冷たい風が吹く季節となっていた。

高重は、毎夜、頭取の景昭と会合を重ねている。同志の宿舍割当は済んだが、江戸から呼び寄せた家族の生活のことなど早急に解決すべき問題を抱えていたのだ。

この頃までに、旧幕臣の多くが江戸から駿府に移り住んでいる。駿府は徳川の家臣たちで溢れていた。家族、使用人を含め、一度に四万人もの人が増えたことになる。だが、徳川家からの禄はもはや期待できない。

景昭と高重は、慶喜公の警護に当たった精鋭隊士だけでも身の立つようにしたかった。精鋭隊が慶喜警護の役割を担っているうちは、俸禄にもありつけた。

だが、東照宮を護る組織に変わり、新番組となつてからは、駿府藩から支給される「一時救済の制」による扶持米に頼るよりほかはなかった。この制度では、かつて千石以上の旗本は四人扶持、五百石以上三人扶持、百石以上二人半扶持、二十石以上二人扶持、それ以下は一人半扶持である。

一人扶持とは、一日玄米五合の基準で計算されている。

翌、明治二年からは、その倍額が支給されることになったが、最低限の生活を維持することさえ困難な状況であった。

「中條さん。隊士の中には、三日も四日も食い物がなくて水ばかり飲んでいという家族が出る始末です」

高重の話に景昭は、耳を傾けながら言った。

「確かに困窮している。江戸にいた頃は、お互いに一つの物を分けあい、助け合って生きてきた。ところが、最近では、隙があれば人の物でも掠め取って食おうという輩やからが増えている。新番組には、そこまで落ちぶれた者はいないがこのままでは、そうなる怖れがある」

二人は、旗本としての誇りを捨てず生き抜く方策を模索し始めた。

七． 剣を鋏に代えて

(一) 帰農の決意

中條景昭、大草高重の率いる新番組の隊士二百人が、駿府に移り住んだ明治二年の春、予期しない出来事が起きた。

新政府の中心となっていた薩摩、長州、土佐、肥前の四藩の藩主が支配する領地と農民を天皇

に返還すると申し出たのだ。

他の藩も相次いで追隨した。版籍奉還が行われ、各藩の領地と農民は、天皇のものとなったのである。

徳川家達もそれにならない、駿府藩から静岡藩へと藩名を変え、藩主ではなく、知事となった。静岡の藩名は、土地柄が四季を通して、温暖で静かであるということからつけられたという。軍事と徴税の権限は、まだ各藩に残されていたので、徳川家の家臣たちにも知事から扶持米が支給された。だが、天領だけで四百万石あった所領が七十万石に減ったのだから、多くの家臣を抱える徳川家にとって、扶持米の支給は、重い負担となった。そのため藩から支給される扶持米は、五分の一にも満たなくなったのである。

新番組の隊士たちも家族の生活が成り立つ方策を考えなければならぬ。

隊長の中條景昭と副隊長の大草高重は、静岡藩の重役大久保一翁、勝海舟、山岡鉄舟たちに相談を持ちかけた。

「我々は、家族を抱えて暮らしが立ち行かない。扶持米だけではどうにもならない。何とか隊士がまとまって暮らせる方策はないかと話し合った。その結果、帰農して、皆で土を耕そうということになり申した」

景昭は、隊士たちの苦渋の決断を代弁し、勝に伝えた。

「そうさな、それはいい考えだ。新番組の連中が何もしないで久能山の麓にいる。それだけで新

政府も警戒する。帰農するということになれば、安心するに違いない。今は、新政府を刺激しないほうがいいからね。ところで、どこかい土地の当てでもあるのかね」

勝が、景昭に訪ねた。

「実は、先日、精鋭隊仲間の関口さんが、我々の身の振り方を心配して久能村を訪ねて来た。帰農は、関口さんも大賛成で、恰好の土地があるとのことだった」

景昭は、高重や松岡萬つもろなど新番組の幹部を交えて関口隆吉と会合を持ったときのことを話した。

「ほうそれで関口さんはその土地について、何と言いなさった」

「関口さんは、大井川の右岸から御前崎にかけて広がる牧之原台地のことを話しておられた。広大な原野で、徳川家の所有地であるから藩庁にお願いすれば、下げ渡して貰えるのではないかも言っておられた」

「中條さん、大草さん、それはいい話ですな。徳川家にも、そんな土地があつたとは気付かなかつた。大久保さん、その土地を新番組の連中に与えたらどうでしょう。その他にも百姓をしたいという家臣たちがいれば、分け与えたらいい。そうすれば、この駿府に溢れている無禄の家臣たちの救済にもなる。また、新政府も徳川の家臣団が刀を鍬に変えたといえれば、安心するに違いない。その安心料として、新政府から金を引き出しましょう」

勝は、大久保の同意を求めて熱心に語った。

「分かり申した。徳川家の家臣たちの救済に役立つのであればよい。正式には上様の決済を仰がなければならぬので、藩庁に嘆願書を提出ください」

大久保一翁、勝海舟の内諾を得て、景昭、高重たちは、勇躍、久能村に帰った。

牧之原は、徳川幕府の天領で金谷原といわれていた。大井川の西岸から御前崎にいたる広大な台地である。

東西八キロ、南北二十八キロに広がるこの台地は、標高三百メートルの金谷町の西北方から東南に向かって少しずつ低くなり、駿河湾の海岸近くでは、百メートル足らずとなっている。

小松や雑木が茂り、狐や狸の住む原野として放置されていた。このうちの千四百二十五町歩（千四百ヘクタール）が新番組へ正式に下げ渡されることになったのである。

（二）開墾地視察

明治二年（一八六九）、旧暦六月初旬、中條景昭、大草高重、山岡鉄舟等は、関口隆吉の案内で、牧之原の視察を行った。

島田から大井川を舟で渡り、谷口原から生い茂った雑草や灌木を掻き分け、牧之原の台地を登った。梅雨明けの強い日差しが照りつけている。

汗を拭きながら一時間ほどして、頂上の台地に出た。突然眺望が開け、眼下には大井川がゆったりと流れている。

北東には、富士山が青空の中に屹立している。駿河湾を隔てて伊豆の山並みが浮かんで見えた。

「見事な眺めだ。ここに立つと世俗の憂さを忘れるような気がする」

感動した景昭が、思わず声を上げた。

「まったくその通りです。これを見たら、移住を拒む者も減るでしょう。ただ、土地を耕し収穫を得るまでには、時間がかかる。その間、どうやって食い繋いで行くかが問題です。藩庁に、その間の生活資金を支給頂くよう交渉しなければなりません」

高重は、足元の荒れ地を眺め、入植当初の隊士の生活を心配した。

すると山岡鉄舟が、すかさず答えた。

「拙者の承知しているところでは、新番組の牧之原開墾は、藩命によるものであることになった。それ故、隊士には御手当金が支給されることになると思う。十分ではないが、何とか家族が当面暮らせるくらいの金が出るはずです」

鉄舟は、大久保一翁、勝海舟、平岡丹波などがすでに相談して、藩庁から御手当金を出すと決まっていることを明かした。

「ところで、この地には、どんな作物が適しているとお思いか。見るところ荒れ地で、薄の草むらの中に松や雑木が点在している」

高重が、景昭に問いかけた。

「そうさな。ソバか、さつまいも位しか育たないかもしれない。水田は無理で、陸稲にしても米

作りは難しかろう」

景昭の答えを聞きながら、高重は、雑草の生い茂る中に隠れた土を掴んで、言った。

「二百人の隊士が家族を抱えて生きて行くためには、金になるものを作らねばならない。それをこれから皆で考えなければなりません」

すると鉄舟が、景昭、高重、隆吉を見て語った。

「牧之原開墾は、藩命であるとはいえ、武士としての本来の仕事ではない。それ故、必ずしも従う必要はない。だが、これだけの広大な土地を開墾するには、多人数で一致協力しなければ、成し遂げられない。その点、中條さん、大草さんのいる新番組は、精鋭隊以来結束が固い。それに隊士全員が、徳川家の行く末を案じて自立の道を講じようとしている。見上げた心構えだ。世間は、この開墾の成否を注目しているので、おそらく他藩でも真似する者が出てくるであろう」

「どんな作物を作るにせよ、この景勝の地で新番組の隊士が離散せずに、徳川宗家の盾となる事ができるのは良いことだ。そう思わんか。大草さん」

景昭は、高重に同意を求めた。

「これまで苦楽を共にしてきた新番組の面々と一緒にこの地で暮らせるなら、開墾の苦労も乗り越えられよう。それが、徳川宗家の御膝元でできるのだから贅沢は言うまい」

高重は、景昭が刀を鍬に代えてまで守り抜こうとする誠忠の志しに共鳴し、改めて結束を誓い合うのであった。

久能村に帰った景昭と高重は、松月院に新番組の組頭たちを集めた。

紋付袴に威儀を正した景昭は、中央に着座し、高重は、その横の須彌壇の前に座っている。景昭は、おもむろに口を開いた。

「今日お集まり願ったのは他でもない。かねてからご相談申し上げていた開墾地について、大草さん、山岡さん、関口さんと共に牧之原を視察してきた。大井川が眼下に流れ、北東には富士山を仰ぐ景勝の地である。荒地地ではあるが、広大な未開墾の土地がある。徳川の所有地で、その一部を新番組の我々に、お下げ渡し下さることになった。そこで百姓をやらうと思う。皆が力を合わせれば、荒地地も緑野に変えることができる。牧之原に移って刀を鍬に代え、かの地に骨を埋める覚悟で、励もうではないか」

景昭の言葉を補足し、高重が言った。

「牧之原の開墾に従事する者は、静岡藩士の身分で、開墾方という役職になる。したがって藩から手当が支給される。百姓をするといっても身分まで百姓となるわけではない」

「それでは、藩は、われわれを見放したわけではなく、藩士のまま、領内の石高を上げるために新田開発を直接家臣にさせるということですか」

隊士の質問に景昭は答えた。

「まあそんなところだ。ただ、見て来たところ台地になっていて、水を貯え、水田にするのは相

当難しい。したがってまずは畑作を中心に考えざるを得ない」

ついで高重が、入植希望の有無について言及した。

「これは君命であつても、強制ではない。家族ともよく相談の上、牧之原に移り住む者は明夕刻までに申し出られたい」

翌日までに新番組隊士のほとんどが牧之原への移住を決意したのである。武士の身分のまま金谷開墾方として、入植できることが魅力であつたに違いない。

(三) 牧之原入植

中條景昭、大草高重の率いる新番組の一隊は、久能村を出て金谷に向かった。明治二年七月、朝から強い日差しが照りつける日であつた。

乏しい家財道具を積んだ大八車の行列が続く。その車を引く者、後を押す者、いずれも武家風の男たちである。周りには砂埃が立っている。刀は、二本差したままで、つづらや風呂敷包みを背負った者も少なくない。

沿道の住民は、この異様な風体の一団を好奇の眼差しで眺めている。

昼時に、島田の宿に入った。そこで昼食を済まし、南へと進んで、大井川の堤に出た。対岸には、赤茶けた崖が広がっている。その崖の上にわずかに松や灌木の点在する台地が見える。

「あの対岸に小高く盛り上がって見えるところが牧之原だ」

一行の誰かが、西に傾いた太陽の下で光って見える場所を指差した。

「なるほど、台地になっている。あれが“終の棲家”となる牧之原か」

新番組の面々は、お互いに顔を見合わせ、迫り来る苦難を乗り越えようと互いに誓い合うのであった。

久能村を発ってからすでに十時間になる。炎天下八里ほどの道のりを歩いてきた。大井川の河原石も焼けつくように暑い。

島田宿の旅籠屋の主人、清水栄蔵他十数名の町民たちが、出迎えに出て、道案内と渡船の手配を行った。

対岸を渡り、生い茂る雑草と灌木をかき分けながら山道を登る。すると突然眺望が開けてきた。牧之原台地の平坦な頂である。夕日を受け、大井川がキラキラ光っていた。夕闇も迫り、一行は、付近の寺社に分宿した。景昭は種月院、高重は、医王寺の本堂にそれぞれ宿を取った。

翌朝、景昭の呼びかけに応じて、牧之原で眺望の最も優れた谷口原台地へ全員が集合した。

日の出を遥拝する。これから直面する苦難の道に乗越え、開墾に専念することを互いに誓い合うのであった。

現在、その地には、中條景昭を顕彰する立像が発っている。

牧之原入植と同時に新番組は、解散された。

新たに静岡藩から金谷開墾方という名称が与えられ、静岡藩の一組織となった。収入は、大幅に減少したが、旗本当時の禄高に応じた手当てが支給されることになったのである。

開墾地は、おおよそ千四百二十五町歩（千四百ヘクター）で、これを地区ごとに十一組に分け与えられた。開墾方頭かしらの中條景昭は、加藤光正、成瀬春久、などと共に総勢十五名で谷口原に入植した。

一方、頭並の大草高重は、和田勝重、小島勝直、石井兼正らと共に総勢十六名で、岡田原に入った。その他、六本松、大沢原、庄内原、沢水加原、牛渕原などにもそれぞれ入植した。いずれも家族を久能村に残したままの単身赴任である。

景昭の割当の土地は、七十五町歩（七十四ヘクター）、高重は六十五町歩（六十四ヘクター）であった。移住士族の平均割当面積は一戸当たり四、五町歩程度であったという。

この牧之原が原野として放置されていたのは、徳川为天領であったことと、強度の酸性地のため、農業地としては、適さなかったことによる。

岡田原に入った高重は、組を二つに分け、医王寺と八幡神社を寝所とした。

翌日から早速作業を始めた。まず、下草を刈り、木の根を掘って道を造る。それぞれに割り当てられた土地に小屋を建てる。

一日も早く久能村から家族を呼び寄せるため、懸命に働いた。

水の確保は、農産物の栽培にとって欠かせない。だが、この台地には、水が乏しかった。大井

川の三角州が、海の沈下によってできたこの台地は、地下が礫岩層となっていて、水はけがよく保水が効かない。降水は、たちどころに吸い込まれてしまう。山肌から流れこむ乏しい水源の水を貯めるには、雨を待つしかない。

高重は、岡田原の入植地の水源を探し歩いた。しばらくすると、赤松林の間に湿地帯を発見した。そこに池があったのだ。

地元の百姓たちが「岡田原ヶ池」と呼んでいる池である。百姓たちは、この池の水を利用してところどころに畑を作っていたのである。

高重は、この池を「大草の池」と名付け開墾地の水不足を解決しようとした。

ところが、地元の百姓にとつては、いきなり入植してきた開墾方の武士に大切な水源を占拠されるのは、死活問題である。

「この土地は、もともと徳川家のものである。その中にある池だから、所有権は徳川家にある。大草家はその払い下げを受けたのだから、所有権は大草家に移転したことになる」と高重は主張した。

これまで通り水が使えなくなることを怖れた百姓たちは、大草家に嘆願した。高重も地元民との融和を図るため、百姓たちの利用を従来どおり認めることにした。だが、その呼び名は「大草の池」で押し通した。

家族を呼び寄せるため、高重は、居住に適した土地をあちこち探し回った。すると医王寺の境

内からすこし離れたところに「いぬが沢」といわれる沢があった。この地は、蛇の生息地として、地元の百姓たちも近づかなかった所である。だが、生活に必要な水と強い西風を防ぐのに適当な林があった。

高重は、この地を岡田原入植の本拠地と定め、家を建てることにした。

静岡藩の開墾方の役人の身分である高重は、百姓たちを日雇いとして出役させ、普請を急いだ。共に入植した和田家、石井家、小島家の普請も同時に行われ、こうして、久能村にいる家族を呼び寄せる準備が、着々と整えられたのである。

八．茶園の形成

(一) 地元民と軋轢あつれき

牧之原に大挙してやってきた武士たちを見て、地元民は驚いた。しかも百姓をするというのである。

もともと幕府の直轄地であった土地なので、異を唱えることはできない。

だが、これまで秣場まぐさばとして使っていた入会地までいきなり静岡藩に取り込まれてしまったのである。百姓たちは、危機感を抱いた。

せめて秣場だけでも、確保したいと考えた。

入植して間もないある日、高重は、岡田原の庚申塚こうしんづかの黒松の上から見える範囲の原野を岡田原入植組の土地とした。その目印に赤い布切れをつけた竹竿をその土地の囲いに立てた。

ところが、その竹竿を地元の百姓の何者かが抜き去ってしまったのである。

岡田原の開墾方の武士たちは激怒した。

高重は、中根正種、加藤則元、近藤正守の三人を現地に派遣した。徳川家の家臣に、与えられた土地を踏み荒らすことは許せなかったのである。

三人が現地に着くと、暗闇の中に三十人余りの百姓たちがたむろしていた。

「おい、その者たち何をしているか」

中根が、白刃を振りかざし、大声で咎めた。突然、闇の中から抜刀した武士の姿を見た百姓たちは、震え上がり、慌てて逃げた。腰を抜かし、逃げ遅れた百姓が二人捕らえられた。中根は、周りの百姓たちに聞こえるように大声を上げた。

「何故、我々の埋めた竹竿を引き抜いた。誰がやったのか詮議のため、医王寺に連行する」

翌朝、坂部村五人の世話役の連署による嘆願書が届けられた。それには、

（坂部村は、ずっと以前からこの土地を秣場として使っている。没収されては、肥料も作れない。特段の思し召しを頂きたい。また連行された若者二人を釈放願いたい）との要旨のことが、記されていた。

夕方、坂部村総代本間賢三と名乗る男が、医王寺の本堂に高重を訪ねて来た。

「坂部村の秣場のことで開墾方のお役人様に、お話を聞いて頂きたく、罷り越しました」
本間は、服部一徳に取次ぎを頼んだ。夕日が医王寺の本堂に影を落としている。

「通せ」

高重は、重い口調で言った。

風呂敷包みを小脇に抱えた一人の武士が現れ、高重の前に平伏し言上した。その態度は、岡田原組の面々の前でも臆することなく、堂々としている。

それもそのはず本間は、れっきとした武士であった。掛川藩太田備中守に仕え御納戸役を努めていたが、掛川藩の上総国替えを機に、職を辞してこの地に残り、島田宿の郡役所の翁役員をしていた。そのことから、坂部村との係わり合いができたのである。

高重の横に座っていた入江兼明が、本間の前に立った。本間が、進物の風呂敷包みを解き、平伏して折箱を差し出すや否や入江は、その箱を刀の鞘で払った。中から饅頭が、ころがり出た。高重は、その一つを剣先に差し、本間の面前に突きつけた。

「本間賢三と申したな。面を上げい。ここに来るからには、相応の覚悟をして参ったであろう」
本間は、頭を上げた。面前に、剣先に刺さった饅頭がある。

「そちの持参した饅頭など食えるか。受け取るわけにはいかん。そちが食ったらどうじゃ」

高重は、饅頭を本間の鼻先に突き出した。本間は大口を開けて刃先から饅頭を抜き取り見事に口中に収めた。饅頭が口中に入ったと見るや高重は、刀を振るった。一閃した刃先は、本間の頭

上を掠め鬣が落ちた。だが、本間は平然として正面の一点を見据えたままであった。

高重は、久し振りに死を覚悟した武士の潔さを見る思いがした。爽やかな気持ちに突き動かされた高重は、本間の願いを聞き届ける気になっていたのである。

牧之原一帯の原野は、徳川の士族に与えられ、秣場として使っていた入会地も坂部村を除いて、すでに士族の手に帰している。

だが、坂部村の百姓たちは、本間賢三の指導のもとに士族から借地権を得ることができた。ただ、目廻り三寸以上、背丈以上の木を切ってはならないという条件がついていた。それ以外の雑木や下草は、これまで通り、刈り取っても良いことになったのである。

(二) 茶の栽培に着目

牧之原に入植した開墾方の武士たちにも、当初どんな作物が適するのかわからなかった。鋤を持つのが始めての連中ばかりで農業の知識に乏しい。

土地の百姓に訪ねても、的確な答えは得られなかった。水利に恵まれず、痩せたこの土地は、百姓たちからも半ば見捨てられていた。せいぜい大根かさつまいも位しかできないと思われていたのである。

そんな時、松岡萬が、牧之原にやって来た。勝海舟から伝言を頼まれて来たのだ。

「勝さんは、牧之原には、茶の木を植えるといいのではないかと言っていた。あの人も牧之原の

ことはいろいろ気にかけているようだ。だから一度話しに行ったらどうであろうか」

景昭と高重は、早速、松岡の案内で、服部一徳をともない静岡の海舟宅を訪れた。当時、彼は、藩政を大久保一翁や山岡鉄舟にまかせて、静岡から三里ばかり北の山村にある白鳥家に身を寄せ、隠棲していた。

白鳥家は、庄屋でこの地方の山林を所有する豪族である。

海舟は、一行の来訪に満面の笑みを浮かべ、離れの居間に案内した。

「やあ、よく来てくれた。まあおくつろぎください。牧之原で何を作るか。思案しかねていると松岡さんから聞いている」

「そうです。ソバ、麦、さつまいもの類であれば、何とか育つとは思いますが、多くの収穫は望めない。植林するにしても時間がかかりすぎ、当面の暮らしの助けにはならない」

高重は、苦しい胸の内を明かした。

しばらくして、海舟は、おもむろに口を開いた。

「茶がいいと思う。茶は大井川奥の川根で昔から作っている。あそこでは百姓でも茶を飲んでいると聞く。同じ川筋の牧之原の土だ。合うかもしれないよ。それに茶は、これからも外国にどんどん売れる。長崎に行った時に茶の輸出で大儲けをした大村の“おけい”おんなあきんどという女商人に会ったことがある。また、開港以来横浜では、生糸と茶でずいぶん儲けている商人もいるというじゃないか」

高重は、若い頃幕府への献上茶を運ぶ採茶使として、宇治に出張したことがあったので、茶の栽培や製造について現地を視察し、ある程度の知識を持っていた。

「なるほど。茶は、他の作物と違ってすぐ金になる。それに、たしなみ深い人たちが喫する高尚な作物であるから、武士が作るにふさわしい。中條さん、茶を植えましょう」

景昭の横で聞いていた松岡が、すぐ賛意を示した。

「早速、川根に行つて茶の実を仕入れて来ましょう。茶の実は、この季節に採取しますから、百姓も持っているはずです。春の種蒔きにはちょうど間に合う」

この頃、松岡は、静岡藩の治山、治水の仕事を担当していたので、川根にも知り合いが出来、種の入手先についても目途がついていた。

景昭と高重は、栽培すべき作物が決まり、目の前の霧が晴れる思いがして、海舟宅を辞した。

明治二年晩秋の風は、上気した高重の顔に心地よく感じた。

（これで、開墾地に植えるべきものも決まった。家もだいぶできた。もう少しすれば家族も呼べる。何もかもが新しく始まるのだ）

高重は、一カ月後の明治二年十二月末には家族を呼び寄せ、久し振りで正月を家族揃つて迎えることが出来たのである。

茶は、種を蒔いて収穫するまでに、三、四年かかる。景昭と高重は、その間の資金について話し合った。

茶の栽培は、地質が礫層で水はけの良いところに適する。根が腐らないからである。茶の木は、幹の何倍もの根を張り、その根は、石の間の土にしっかり入り込む。根は、幹を切っても枯れず長い生命力を保つ。栽培も水田ほど難しくない。茶の木の間に野菜を作ることにも出来る。

海舟は、茶についての栽培知識があつたわけではない。だが、換金作物として、茶が将来有望であることの先見性を持っていたのである。

また、松岡も静岡藩の治山、治水掛として農山村を視察して、産物にも詳しくあつた。その上、後に静岡県知事となつた関口隆吉も父が、御前崎の佐倉村の出身であつたので、牧之原の地理にも詳しく、茶の栽培に適した土地ではないかと感じていたようである。

そうしたことから、海舟は関口からもすでに話を聞いていたのかも知れない。

いずれにせよ、茶の栽培は、科学的根拠にもとづいて行われたわけではなく、川根茶の例に鑑みて、何となく牧之原に適するのではないかという思いが、商業的見地からの発案と相まって、栽培に踏み切るに至つたのだ。それが幸運にも牧之原の土壤に合つていたのである。

景昭と高重は、牧之原の開墾方全員を集めて、海舟との会談の結果を報告し、一致協力して緑の茶園にすることを熱く説いた。

茶園を作ると決まつた後の二人の行動は早かつた。

まず、島田の町に住む坂本藤吉を牧之原に招請した。坂本は、茶の生産から製造に至るまで精

通して、栽培方法を開墾方藩士たちに懇切丁寧に教えた。また、宇治で修業したこともあって煎茶、抹茶、玉露、薄茶などの製法にも詳しく、その加工方法についても教えている。

春は近い。

種蒔きから苗木を育てるには人手がいる。明治三年の節分を過ぎる頃には、久能村から続々と家族が牧之原に移住して来た。

(三) 彰義隊残党の内紛

新番組の隊士が牧之原に開墾方として入植した頃、彰義隊生き残りの幕臣たちが静岡にやって来た。しかし、役職も禄もない。

上野の戦いで敗れた後、彰義隊士は四散している。捕らえられた者、北越、会津、函館戦争に参加した者、江戸の町中に潜伏した者、さまざまである。

明治二年の大赦令によって、こうした彰義隊生き残りの者たちも自由の身となった。だが、頼るべき徳川家は、すでに江戸を引き払い、駿府に発った後である。

旧彰義隊士の中に、古くから高重の友人である大谷内龍五郎幸重がいた。

彼は、下総八万石の土井大炊頭の家臣早川総右衛門の次男として生まれ、長じて千五百石の旗本大谷内家へ婿入りしている。神道無念流の達人として世に知られていた。三十四歳で彰義隊に参加し、九番隊長として、上野黒門口で両腕に傷を負った。殊に右腕は重傷で、薩摩軍に捕らえ

た。高重とは同年輩で、古くからの友人である。

大谷内は、大赦令で釈放後、駿府へ行くことに決め、高重を頼ることにした。その話を聞きつけた旧彰義隊の隊士が、駿府移住を希望し、九十六人にもなった。

大谷内は、隊長に選ばれ、駿府へ移動の途中、沼津の城から半里ばかり東の横田の番所で咎められた。彰義隊の残党の駿府入りは、好ましくないとされていたのである。その後、何とか駿府入りが許されたものの、静岡藩庁は、彼らを邪魔者扱いにして一切援助はしなかった。

「何故、徳川家からかくも冷たくされなければならぬのだ。徳川の滅亡を防ぐために命を張って戦ってきた我々の忠節は、しよせん独りよがりのものでしかなかったのか」

大谷内は、徳川家への忠誠心が、かえって徳川家の存亡を危うくするものになったことを感じ取っていた。

徳川家としても、新政府に反旗を翻した彰義隊の残党を保護することは、憚られた。新政府に徳川攻撃の口実を与えることになることを怖れたからである。

そのため、静岡藩としては、彰義隊の関係者とは係わり合いを持ちたくなかった。慶喜の恭順の意に服さなかった家臣は、静岡藩士とは、認めるわけには行かなかったのである。

百人近い旧隊士が家族を抱えて、困窮し悪事に走る者も少なくない。彰義隊生き残りの評判は、ますます悪くなるばかりであった。

そこで、大谷内は、厳しい隊規を制定した。その上で、結束を固めるために、各自勝手な行動

をしない、との誓いを立てさせ、その証として連判状を作成した。その連判状を藩に示し、見返りに生活の保障を得ようとしたのである。

だが、連判状に血判を押し、隊規に従うと誓約しながら、違反する者が現れた。

斎藤金左衛門と上野岩太郎である。

斎藤は、六人家族で、妻と十六歳の長男（養子）を含め四人の子供を抱え、生活に困窮していた。歳は、五十に近い。

上野岩太郎は、老母、妻、弟、五歳の女子を抱え、斎藤以上に、赤貧洗うがごとき生活であった。二人は、この生活苦から逃れようとして、沼津勤番組に密かに仕官を求めている。

そのことが発覚したのである。

抜け駆けの猟官活動だとして隊士の不信を買った。

明治二年十二月二十七日、大谷内は、上野岩太郎を呼んで詰問した。

「上野さん。我々は、血盟を誓った同志ではないか。何故、抜け駆けしてまで誓いを破ろうとしたのだ」

上野は、大谷内に両手をついて、家族の窮状を訴え、離脱の許可を求めた。

「拙者は、老母と家族を抱え、百姓屋の納屋に仮住いしています。藩からの扶持米もなく、江戸から持ってきた金目の物はすべて売り尽くしました。神社や寺の池の鯉や鰻などを夜陰にまぎ

れて獲り、なんとか糊口をしのいできました。だが、もういけません。一家心中を考えている時に、旗本時代の同輩が、手を回してくれてやっと見つけた仕官の口です。この機会を逃がしては、冬を越せません。隊規に背き、まことに申し訳ありませんが、どうぞお見逃しください」

上野は、悲痛な叫びを上げて畳にひれ伏した。

木枯しが吹き、すきま風が、大谷内の家の中にも流れ込んでくる。破れた障子から擦り切れた畳を這うように、その冷たい風が、彼の膝元を通り抜けた。

「分かった。やむを得まい。血盟の誓いを破ってまでも仕官を求めようとしたのは、よくよくのことに違いない。貴公のことは、他の隊士にも話をしよう」

「忝く存じます。誠に勝手ながら、他の隊士によしなお伝えください」

上野が大谷内の仮住まいを辞し、暗闇の中を田圃道にさしかかった。その時、闇の中から人影が動いた。

「上野殿でござるな。血盟の誓いを破ったお主を生かしておくわけにはいかん」

「誰だ、待ち伏せしていたな」

「藤田寛三だ。裏切りは許さん」

「待て、拙者の話も聞いてくれ。今、隊長に脱隊のお許しを得てきたところだ」

「隊長が何と言おうと拙者は許せん。暮らし向きは、皆苦しいのだ」

藤田も抜け駆けをしたかった。だが、それは、武士の面目を捨てることでもある。純真で一本

気なこの若者は、己の心の弱さを断ち切るように、刀を抜いた。一閃した刀身は、上野の首を断ち切っていた。上野が、刀に手をかける暇もないほどの一瞬のできごとであった。

藤田は、その足で同僚の吉沢力松を誘い、下徳村にある斎藤金左衛門のもとに走った。斎藤は、謡の稽古から帰宅する途中であった。

「斎藤金左衛門殿であるな」

「左様、この夜更けに何用か」

「ただ今、上野岩太郎殿を成敗して来た。斎藤殿もお覚悟召され」

「はて、何のことでござるか。拙者には、思い当たる節はない」

「血盟に背き、己だけ仕官をしようとした。許しがたい仕業である」

抜刀した二人を前に斎藤も刀を抜いた。もはや話し合いは、通じないと判断したのだ。にらみ合いが続いた。

斎藤の左方にいる吉沢が、切りかかった。斎藤はその太刀を払い、切っ先を吉沢に向けた瞬間、右から藤田が、脇腹を狙って太刀を振った。その刃先をかわそうとした一瞬の隙に、吉沢の太刀が斎藤の左肩に食い込んだ。

斎藤は、よろめきながら刀を青眼に戻そうとした。その時、藤田が、腹を突いた。腹をえぐられた斎藤は、うめき声を上げて、その場に倒れ伏した。

翌日、藤田と吉沢は、斎藤と上野の首を風呂敷包みにくるみ、沼津郡役所に投げ入れ、行方を

くられました。

この事件は、静岡藩を愕然とさせた。もはや彰義隊の残党を放置するわけには行かない。だからといって、今更、追放もできない。静岡藩は、扱いに苦慮したあげく、暮らしの立つ道を講ずることにした。

そこで、新番組の開墾方にならつて、扶持を与え、牧之原を開墾させる案が浮上した。体よく駿府の近くから追い払うことも出来る。

こうして、旧彰義隊士の牧之原移住が決まった。しかし、誰が彼らを説得し、牧之原への移住を決意させるかが、大きな問題として残った。

武士としての誇りを捨てきれないでいる彼等に移住を決断させ、百姓をさせるには、さまざま手段を講ずる必要があつたのである。

それだけではない。

この殺傷事件は、旧彰義隊内部に大きな波紋を投げかけ、後に、中條景昭、大草高重の率いる開墾方の藩士を巻き込む大事件へと発展するのである。

九． 旧彰義隊士の牧之原移住

(一) 金谷開墾方助勤

彰義隊内の殺害事件は、隊長の大谷内龍五郎の心を深く傷つけた。

龍五郎には、血盟の誓いを破つてまで、沼津勤番組に職を得ようとした斎藤、上野両氏的心情が痛いほど分かった。だから、脱隊を許したのである。

そのことを、隊士全員に伝える間もなく、この不幸な事件が起った。

(隊長である拙者の責任は重い。何故もつと早く二人の苦渋を聞き、全隊士納得の上で、隊を抜けるようしなかつたのか)

龍五郎は、自分の統率力のなさを悔やんだ。

苦しみ抜いた末、二人を手厚く葬り、墓を立てることにした。

斎藤は、沼津市住吉町の光明院。上野は、清水町堂庭蓮華寺にそれぞれ墓を立て、菩提を弔つた。墓石には、『義施大谷内龍五郎幸重建之』と刻んでいる。

彰義隊を牧之原に移住させることを決めた静岡藩は、説得役に中條景昭、大草高重を当てることにした。そのことを頼みに山岡鉄舟が、牧之原にやって来たのである。

景昭も高重も鉄舟の頼みとあれば、応じないわけには行かない。ことに高重は、旗本当時から鉄舟、龍五郎とも昵懇じっこんの間柄であったので、その説得には、適役であった。

高重は、大谷内龍五郎と清水の宿屋で対面した。三年ぶりで会う二人には、再開を喜ぶ余裕さえなかつた。お互いに厳しい表情で、しばし無言のまま、見詰め合っている。

先に口を開いたのは、高重であった。彼は、強い口調で藩の意向を伝えた。

「静岡藩としては、この度の殺害事件を重く受け止めている。彰義隊士の徳川家への忠誠心は、多とするところであるが、それが昂じて藩内の秩序が乱れ、治安が悪化することを、藩庁では心配している。とはいえ、貴公たちの窮状を見過すことは出来ない。そこで、藩は、彰義隊の諸士たちに、扶持米を支給し、開墾方の助勤として、牧之原への移住を勧告することになった。今日は、そのことを伝えにこうして、出向いて来たのだ」

これを聞いて、龍五郎は、語気を荒げて、高重に詰め寄った。

「開墾方の助勤とはどういうことか。貴公たちの下について百姓をしろということか」

「そうだ。われわれに見習って牧之原の土地開墾に当れということだ」

高重の言葉に龍五郎は、時代の流れに取り残されて行く、悲哀を感じた。

彰義隊士には、徳川のために命を賭して薩長軍と戦ったという自負があった。

（開墾方となっている新番組の連中は、將軍警護のためと称して戦いを避けてきた。にもかかわらず、先に駿府に来たお陰で、広大な土地を下賜されている。しかるに、われわれは、敗れはしたが、武士の意地を貫いた。そのわれわれが、何も戦わなかった新番組の連中の下風に立ち、百姓をしろというのか）

龍五郎は、彰義隊の『義』が世間に受け入れられず、迷惑でしかない存在であることを思い知ったのである。

高重は、龍五郎の逡巡する心の動きを読み取った。敗者に鞭打つような態度を心中詫びながら、断腸の思いで藩の方針を切り出した。

「貴公たち彰義隊が、あくまで移住を拒むのであれば、藩は、追放令を出し、解散に追い込むと言っているのだ。そうなれば貴公たちは、散り散りにこの地を去るほかあるまい」

龍五郎は、しばらくじつと、腕を組んで考え込んだ後、重い口を開いた。

「やむを得まい。不本意であるが致し方ない。移住することにしよう。ただ、拙者は、このように不自由な体だ。片腕では、百姓はできぬ。また、隊士の中には百姓をしたくない、という者もおろう。そういう連中のわがままを許して頂きたい。そうした連中も含めて一つ処に住むことのできるように、配慮下さるといふのなら、牧之原に移り住もう」

「相分かった。新番組の牧之原開墾方の仲間は、貴公たちを決して拒むものではない。むしろ旧幕臣の誼よしみで仲良く暮らしたいのだ。それぞれに意見が分かれ、別の道を歩んだが、これからはまた心を合わせ、徳川のために尽くそうではないか」

高重は、龍五郎の心を固く閉ざしていた扉が、次第に開かれつつあることを感じていた。

龍五郎も胸襟きょうきんを開いて語り合ったことで、わだかまりが溶け、すべてを高重に託す気持ちになつていたのである。

「大草さん。貴公に身柄を預けることにしよう。よしなに頼み申す」

翌日、下戸倉村の龍仙寺に彰義隊の面々が集まった。当初九十五人いた隊士のうち本堂に集ま

ったのは、五十人にも満たない。

龍五郎は、集まった諸士の前で彰義隊の解散宣言をした。その上で、血盟連判状を全員の面前で焼却し、改めて静岡藩から、牧之原開墾方助勤を拝命したのである。

明治三年七月の蟬しぐれの激しい暑い日であった。

(二) 新旧移住者の対立

龍五郎は沢水加の村役人をしている山田万吉の離れを借りて妻のりゅうと二人で暮らすことになった。

沢水加は、牧之原の西のはずれに位置し、万吉の家からは、富士山がよく見える。裏手には、小川が流れ、閑静な土地柄である。

龍五郎は、剣術を日課とし、ときどき山や森に出掛け、鉄砲で鳥を撃つたりしていた。

百姓仕事は一切しない。こうした龍五郎の生活態度が、新番組（開墾方）武士たちの反感を買った。

彰義隊士の入植は、牧之原に紛争の火種を植え付けることになった。高重の思惑とは裏腹に新たな緊張と対立を生むことになったのである。

中條景昭や大草高重ら幹部は、彰義隊士たちを快く迎えるつもりであった。だが、五十人を超える隊士とその家族が移住して来るに従い、さまざまな問題が生じて来たのである。

最大の問題は、彼らの多くが、百姓仕事を嫌ったことである。武士の魂と称して刀を離さない。仮住いしている農家の庭先で、剣術の稽古をしたり、近郷近在の若者を集めて剣術を教えたりした。そのため、村人の百姓仕事が滞りがちとなった。

また、野良着の上に刀を差して畑に出る開墾方の武士をからかう彰義隊士もいた。

開墾方のうち、岡田原へ入植した高重の縁者たちは、開墾した土地に茶を植え、その脇に大豆、小豆、青物野菜などを作った。

この岡田原の入植組は、農作業を通じて、濃密な人間関係が形成され、新しい村が出来た。神社の改修、道路工事、井戸掘りなどの共同作業はもとより、冠婚葬祭、病人見舞い、村費の負担割合など、話し合いで決め、場合によっては、味噌、醤油、付け木などの生活必需品の貸し借りまで行った。

岡田原の入植者たちは、華やかな江戸の消費社会を自ら放棄し、生産を中心とする農村社会に適応して行ったのである。

それでも武士の誇りだけは捨てなかった。刀は、その象徴である。それ故、耕作をする時も刀は差したままであった。その姿を揶揄やゆされることは、彼等にとって耐え難かったのである。

真面目に働きもしないで過去の栄光にすがり、武士の誇りを、ことさら口にする新移住組の彰義隊の連中は、岡田原の入植者からすれば、時代の流れに逆らって、ただ虚勢を張っているようにしか見えなかったのである。

それだけではない。土地を巡っての疑心暗鬼と不満が双方に生じたのである。

開墾方として入植した中條、大草の新番組には、千四百町歩を超える広大な土地が払い下げられた。一家族当り平均して、四町歩の土地が与えられたことになる。その多くの土地が、まだ未開墾であった。この未開墾の土地を取り上げ、新移住者である旧彰義隊士に分与するのではないかと危惧する声が開墾方の新番組から出始めた。

一方、彰義隊士の中には、新番組の武士としての働きを非難する者も少なくなかった。

「われわれが血を流して官軍と戦っている間、精鋭隊（新番組）は、久能山において何もしなかった。それなのに新番組への土地の配分が厚すぎる」

これに対して新番組では、次のように反論していた。

「恭順を押し通す慶喜公を守ることが、徳川家を存続させる唯一の道であると考えて、あえて戦わなかったのである。むしろ、慶喜公の意向に反して、無謀にも薩長に戦いを挑んだ彰義隊こそ徳川家を危うくするものである。それこそが不忠の極みである。駿府に来て、徳川家の窮状を見かねて帰農を誓い、与えられた土地を緑野に変えてこそ忠義が貫かれるのだ」と。

こうした相互不信の矛先が、隊長の大谷内龍五郎に向けられた。

それが、隊士の殺害事件と結びついて、牧之原を揺るがす大事件へと発展することになるのである。

牧之原にも木枯しが吹き、明治三年の暮れを迎えた。富士山は、雪に覆われ、陽の光を浴びて輝いている。

収穫にはまだ二、三年を要するが、茶の木は、順調に育っている。茶の木の脇に植えたソバ、大豆などが実り、開墾方の食糧不足を救ってくれた。

十二月十九日夕刻、開墾方取締役福井金次郎の家に、六本松の服部一徳、岡田原の入江兼明などの面々が集まった。斎藤金左衛門、上野岩太郎の遺児たちの仇討ちを前日に控えての相談を行うためである。話し合いの結果、福井金次郎が遺児たちの後見人になることに決まった。

沼津で討たれた斎藤金左衛門には妻の他に二男、二女がいる。長男の源八郎は、養子である。また、上野岩太郎には、母と妻の他に弟秀三郎と娘がいた。

斎藤金左衛門の長男源八郎と上野岩太郎の弟秀三郎は、藩庁に対して『仇討ちの願い』を出した。だが、明治となったこの時代に仇討ちはふさわしくないとされ、願いは却下された。

斎藤氏の殺害は、藤田寛三の単独犯行で、上野氏は、藤田、吉沢の両名によって殺害されたことは明白であった。

ところが、そこに隊長である大谷内龍五郎の関与があったかどうかが問題になった。殺害は、龍五郎の示唆によるものか、そうではなく両名がまったく独断で凶行に及んだものかが争点になって、憶測が乱れ飛んでいたのである。

折悪しく、その頃の龍五郎の評判は、悪かった。

龍五郎を誹謗、中傷する声は、牧之原の新旧移住者の中に広がり、直接の下手人である藤田、吉沢を超えて隊長の龍五郎を仇に仕立てようとする動きが強まっていたのだ。

その扇動者の急先鋒は、彰義隊で、五番隊長を務めた朽原くちはらかなえ鼎である。

朽原は、江戸牛込で道場を持つ剣術師範であった。源八郎の師匠でもある。

源八郎は、若干十七歳で、周りから唆されて養父の仇討ちをする羽目になった。だが、気乗りはしない。また、腕にも自信はなかった。

それに比べ、龍五郎は、神道無念流の達人で彰義隊九番隊長として活躍した歴戦の勇士である。上野戦争で傷を負い、右手が不自由であるとはいえ、豪剣で鳴らしていた。

(義父を切ったのは、藤田寛三と吉沢力松で、大谷内ではないのに、何故大谷内を仇として付け狙わなければならないのだ)

源八郎は、自分の関知しないところで話が、どんどん進められていく仇討ちの計画に違和感を覚え、空恐ろしさを感じるのであった。

(三) いわれなき仇呼ばわり

後見人となった福井金次郎宅に大谷内龍五郎を召喚し、その途中の二本松で待ち伏せ、討ち取ろうとする計画が立てられた。二本松には、開墾方及び助太刀の武士たちが矢来を組み、待ち構えている。

龍五郎を仇と狙っているとの情報は、内藤種光よりすでに龍五郎にもたらされていた。内藤は、龍五郎の江戸以来の友人で、中條景昭と共に谷口原に移住してきた開墾方の武士である。

龍五郎は、自分が仇とつけ狙われるのは、筋違いであることは分かっていた。

だが、彰義隊の残党を率いて牧之原に入植以来、百姓仕事を拒み、武士の面目に固執する自分の生き方に非難の声が高まり、彼を排除しようとする動きのあることも承知していたのである。

明治三年十二月二十日早朝、上野、斎藤両人からの果たし状が大谷内の家に届けられた。大谷内は、その果たし状を読み、即刻承知の返事をしたため、妻のりゆうに支度を命じた。

「あなたが斉藤様、上野様を切るようにお命じになったわけでもないのに、何故あなたが討たれなければならぬのです。お一人のお墓まで立ててあげたというのに、理不尽ではありませんか」

「隊士の不祥事の責任は、隊長が取らねばならぬ。それが武士というものである。拙者は、あくまでも武士として生きたいのだ。その思いを貫くことができないのであれば、いつ死んでも悔いはない」

彼は、明治新政府になって激変する世の中の動きについて行くことができなかつた。もはや千五百石取りの旗本としての矜持を保つことはできない。地位を失い、有り金も底をついてきた。誇りまでも失いそうになる自分に嫌気がさしていたのである。

（剣を交えれば勝つ自信はある。だが、助太刀をする者がいる以上、多くの死傷者が出ることは

間違いない。もし、彰義隊の連中が拙者に加勢すれば、牧之原全体を巻き込む大乱闘に発展しかねない。それだけは避けねばならぬ。ここはやはり開墾方幹部の中條さん、大草さんに会って、大事件とまらないようにしなければならぬ」

龍五郎は、中條景昭、大草高重との会談を通じて、事態の收拾を図ろうと考え、その話し合いにすべてを賭けることにした。

十．武士の矜持

(一) 大谷内、中條・大草との会談を切望

果たし状には福井金次郎宅に来られたしとある。大谷内龍五郎が、支度を整え、家を出ようとした。その時、彰義隊の隊士たちが、駆けつけ、不穏な動きのあることを知らせた。

「福井家の途中にある二本松付近で、開墾方の入江兼明、服部一徳等と彰義隊の朽原鼎が、斎藤、上野両名と共に、竹矢来を組み待ち受けている」

「相分かった。この果たし状には、福井家に来られたしとある。承知したと返事した以上、まずは福井氏宅に行かねばなるまい。少し遠回りになるが、二本松を避け、迂回して行くことにしよう」

龍五郎は、後見人の福井氏と言葉も交わさず、いきなり乱闘となることを避けたかった。

「藤田と吉沢の取った行動は、隊規にもとづく正当な行為である。仇呼ばわりされる筋合いはない。まして、大谷内さんを仇と狙うのは、筋違いもはなはだしい。あえて大谷内さんを討とうというのならば、加勢しようではないか」

彰義隊士の血気盛んな連中の中には、助太刀を買って出る者も少なくなかった。

「これは、仇討ちに名を借り、彰義隊をこの牧之原から追い出す策謀だ。開墾方の連中にとっては、後から牧之原に移住したわれわれが邪魔なのであろう」

「まずは落ち着き召され。福井家に来てということなのでそこへ出向くことにする。後見人の福井さんの話を聞いた上で、その足で中條さんを訪ね、そこで大草さんを交えてじっくりと本件について話し合いたいと思っている」

龍五郎は、旧彰義隊士の随行を固辞し、腹心の横山伊三郎だけを伴って家を出た。門前で妻のりゆうが、悲痛な面持ちで見送った。

「心配するな、りゆう。中條さん、大草さんと話をすれば分かってもらえるはずだ」

りゆうは、ことさら平静を装う夫の目に、悲壮な思いが込められていることを感じ取った。不吉な予感がして、思い止まるよう言いたかった。

だが、旗本の娘として育った矜持がそれを許さない。仇討状を受け取った以上、指定された場所に行くしかない。夫には、最後まで堂々たる武士でいて欲しかったのである。

「直参旗本らしく、お振る舞い下されませ」

部屋に戻ったりゆうは、仏壇の前に端座したまま、両手を合わせ、長い間動かなかった。

沢水加から仁王辻の福井家までは、二里の道程である。龍五郎は、二本松の道筋を避け、間道を通って福井の家の前に現れた。

「中條さんの家に赴いて、とくと話し合いたい。拙者は、斎藤、上野両氏の殺害を藤田、吉沢に指示したわけではない。だが、彰義隊の頭としての責任はある。その責任の取り方について中條さんのお考えを伺いたいのだ。それによって、拙者も武士として恥ずるところのない身の処し方を考えている」

龍五郎の話聞いた福井は、しぶしぶ同意した。

(二) 切腹を決断

中條家を訪問する途中、龍五郎は、古くからの友人である開墾方の内藤種光の家に立ち寄った。内藤の家は、建築したばかりで、木の香りが漂っている。庭には、冬の日差しが差し込んでい。その陽を受けた菊が、秋の名残をとどめていた。

内藤は、龍五郎の訪問を受け、座敷に招き入れた。彼の話聞いて、茶を出しながら内藤が言った。

「中條さんはいませんよ。今静岡に行っています」

龍五郎は、内藤の顔をじつと見た。頼みの綱がふつんと切れ、空虚な思いが胸をよぎった。運

命のいたずらに翻弄されている自分を惨めに感じた。

（拙者は、今後もこれまでの生き方を変えられない。そうであれば、このあたりで人生の幕引きを考えてもよいのではないか。自分の命と引き換えに、多くの人が救われるのであれば、武士らしく最期を飾るのも悪くない）

龍五郎は決断した。

「内藤さん。中條さんに会えないのは残念だが仕方がない。拙者は、腹を切ることに決めた。この首を、斎藤、上野の遺児たちにくれてやることにする。ただ、拙者は、彼等の義父と兄を殺害したわけでもなく、ましてや命令したわけでもない。それだけは、彼等に伝えたい。また、この首に免じて、藤田、吉沢を許し、今後彼等を仇として付け狙わないと二人に誓って貰いたいのだ。今、拙者が、刀を抜いて斎藤、上野に助太刀する者と争えば彰義隊の連中も黙っていないだろうし、開墾方の諸氏たちも抜き合わすことになるだろう」

そう言つて、龍五郎は、内藤に斎藤と上野を同家に呼び寄せるよう頼んだ。

斎藤源八郎、上野秀三郎が内藤家に到着すると、龍五郎は、後見役の福井金次郎と共に彼等を部屋に呼んだ。

「源八郎、秀三郎、そこもとたちの義父^{ちち}や兄^{ちち}を殺害したのは、拙者でないことは、承知しておろう」

二人は、頷いた。

「そこもとたちは、この大谷内が殺害を命じたとして拙者を仇と狙っているようであるが、それは違う。断じて命令などしていない。だが、彰義隊の統率力を欠いた責任は拙者にもある。仮に、拙者が藤田、吉沢に代り、死を選べば、今後兩名を仇として付け狙うことはしないかどうか、はつきり聞きたい」

「今後、仇として二人の命を狙うことはありません」

「それで安心した。ならばこの首をそちたちにくれてやろう」

龍五郎は、外にも聞こえるように、わざと大きな声で言った。外では、助太刀を買って出た朽原他大勢の開墾方や旧彰義隊の武士たちが事の成り行きを見守っていたのである。

「拙者は、医王寺で切腹し、武士の誇りを全うしたい」

医王寺は、岡田原にあり、曹洞宗の名刹である。三代將軍家光から寺領、境内、山林などを与えられた。龍五郎は、再三その寺を訪れている。

彼は、内藤に筆と墨を所望し、妻りゆうへの辞世の歌をしたためた。

（昨日まで 曇りし空の今日晴れて つるぎの舟にのるぞ うれしき）
また、中條景昭にも辞世の歌を書いている。

（彰義隊 隊は崩れて この二文字を 生は捨てても けがさざるまし）
陽は傾きかけている。横山伊三郎に妻宛ての歌を届けるように頼んだ。

歌を受取ったりゆうは、嗚咽をこらえ、目頭を押さえて、かねて用意の白装束を取り出した。それに餅を一切れ紙に包み、横山に渡した。

「これは、家主の山田様から頂いた搗き立ての餅です。お正月も近い。この世の名残にせめて一口なりと召し上がるようお伝えください」

「しかと伝えます」

横山は、濡れ縁に手を突いて肩を震わせ涙を流した。

「それからもうひとつ。この白装束の襟には、私の髪が縫い込んでございます。そのことも、そつとお伝えくださいませ」

そう言ったりゆうは、庭に目をやった。庭の向こうの竹林が、風に揺れている。雀が、揺れる竹の枝に止まって、羽を休めようとしている。

強風が吹いた。風に煽られた雀は、羽をばたつかせ、地上に舞い落ちた。

りゆうは、新時代の強風に敢然と立ち向かって散って行く夫の姿と重ね合わせて、その風景を見つめていた。

辞世の歌を詠み終えた大谷内は、座禅を組み、静かに目を閉じて、無の境地に没入しようとしている。

内藤家の妻女が、襖を開けるかすかな音がした。龍五郎には、まるで遠い世界の物音を聞くよ

うに思えた。酒と膳が運ばれた。

「何もごさいませんが、どうぞお召し上がりください」

「折角お支度頂いて誠に申し訳ありませんが、食のほうは遠慮させて頂きます。腹を切るのに不都合があつてはいけませんから。その代わり酒は、遠慮なく頂戴します。ご交誼を頂いた内藤さんと別れの盃を酌み交わしたく存じますので」

内藤としばらく盃をかわした後、龍五郎は、医王寺に向かった。

(三) 壮烈な死

日は、すでに暮れかけている。山門をくぐると、なだらかな石段が続く。両側を覆う松の枝が風に揺れていた。境内の右側の鐘楼に枯葉が舞い、本堂の正面の医王寺と書かれた朱額にまで達している。

龍五郎は、ゆつくりと本堂の控えの間に入った。横山伊三郎はすでに、到着していた。外には、すでに加勢人が二十人以上、寒さに震えながらたむろしている。

伊三郎は、りゆうから頼まれた白装束を風呂敷から取り出し、龍五郎に着せかけ、そつと耳打ちした。

「その襟には、奥様の髪が縫い込んであります」

龍五郎は、頷くと、その襟をいとおしむように優しく撫でた。

伊三郎は、りゆうから託されたもう一つの包みを開けた。

「今日山田さんが搗いた餅です。正月を迎えることなく散っていくのは忍びないと申し、一口なりと召し上がっていたただきたいと奥様から託されました」

「りゆうの肌のようなすべすべした白い餅じゃ」

龍五郎は、餅を手で包んで、その感触を確かめながら口にしました。

やがて、支度を整えた龍五郎は、本堂の脇に控えている医王寺住職の前で居住まいを正し、最期の別れを告げた。

「ご住職。本堂を汚して誠に申し訳ない。お詫びの言葉もござらん。数々のお心遣い忝けなく存じます」

住職は、目礼し合掌した後、無言でその場を立去った。白菊が一輪、三方に添えられていた。

夕闇が濃くなった。境内の木立も黒い影にしか見えない。小坊主が、二本の蠟燭を運んで来た。後見人の福井金次郎と服部一徳、入江兼明が蠟燭の光にぼんやりと写し出され、並んで座っている。

斎藤源八郎と上野秀三郎が、その前に控え、龍五郎の着座を待っている。

切腹の座についた龍五郎は、最期にあたって、胸中を語った。

「拙者、大谷内龍五郎は、彰義隊九番隊長としての責任を背負って武士らしく腹を切る。斎藤、

上野両名の殺害事件は、これにて落着きたい。よいか源八郎、秀三郎そなたたちは、今後直接の下手人である藤田、吉沢に対して、遺恨を持つな。兩人とも落ち着いてこの首を刎ねよ」

龍五郎は、正面に座った検視役の福井金次郎に目礼し、三方を臀部と足の脛裏にあてがった。斎藤、上野の両名は龍五郎の後に立つ。鉢巻に襷掛け、袴の股立ちを半ばに取った源八郎は、一見勇ましそうに見える。だが、足は、がくがく震えている。上野も蒼白な顔をして、歯をがちがちさせていた。

無理もない。源八郎は、十七歳、秀三郎は二十六歳、いずれも人を切ったことはないのだ。

龍五郎は、作法通り落着いて、左手で三方の短刀を取り、右手を添え、押し戴いた。鞘を払って、左手で腹を探った後、右手に持った短刀で、臍の左上を突き立て、きりきりと右へ引き回した。

「ムー」

呻き声とともに介錯を促す声が龍五郎の喉の奥から発せられた。

「エイ」

源八郎が刀を振り下ろした。だが、手元が狂った。龍五郎の右膝に切りつけ、その場に座り込んでしまった。

「源八。しっかり斬れ」

源八郎は、立てない。前髪が乱れ、額から汗が吹き出て、喘いでいる。

立会っていた朽原が、秀三郎に代るよう命じた。

秀三郎は、龍五郎が、首を差し伸べるのを待つて刀を振り下ろした。首は、前に落ち、体がうつ伏せとなった。鮮血が飛び散り、凄惨な光景が蝟燭の光の中に写し出されている。

遺骸は棺に納められ、彰義隊士の手によって医王寺で通夜が行われた。

翌朝、棺は、村人に担がれ、首桶は横山伊三郎が抱いて沢水加のりゅうの元に届けられた。

りゅうは、涙も見せず、首桶のふたを外し、物言わぬ夫の顔をじっと見詰め、ぽつりと呟いた。

「立派でしたね、あなた。よく大谷内家の名誉を守ってくれました。武士としての誇りに満ちたあなたのお顔は、とても満足そうに見えますよ。あなたが大谷内家の婿となって、短い間でしけれど、とても幸せでした」

りゅうは、夫が家を出る時に、永の別れになることを察知して、取り乱さないよう心の準備をしていたのである。

旧彰義隊士や村人たちに囲まれ、りゅうは、首桶を近くの宗源寺まで運び、棺と共に埋葬した。

大谷内龍五郎は、武士の誇りと徳川の家臣としての義を貫き通して自刃した。享年二十七歳。明治三年十二月二十日、武士の世が終焉を迎える直前の出来事であった。

静岡から帰った中條景昭は、この仇討ち事件を聞いて激怒した。関係した開墾方隊士を閉門に処し、一カ年の外出禁止令を出した。

上野、斎藤は、士族の資格を取り上げられ、牧之原から追放された。

景昭、高重の計らいで、藤枝の旧田中藩勤番士川島仙五郎の十七歳の息子を迎え、大谷内家の家名は、存続された。りゆうは、五人扶持を与えられたが、明治四年二月牧之原を去った。その後の消息は、杳として知れない。

昭和二十六年、切腹から八〇年目、初倉村が島田市に合併された時、最後の村長わらしな藁科直次郎氏を中心とする有志が、宗源寺の了承を得て、大谷内龍五郎の遺骨を医王寺に分骨し、墓標を立てた。

その際運んだ舍利塔の中には、変色はしていたが、鬚がそのまま残っていたという。

さらにその二十年後、昭和四十九年の秋、「牧之原開拓幕臣子孫の会」発足を記念して、医王寺に大きな石造りの墓碑が建立された。今も香華が手向けられている。

十一． 廃藩置県と開墾方

(一) 大草高重、慶喜邸を訪問

大草高重のもとに徳川慶喜から一通の書状が届いた。明治三年の春、大谷内龍五郎の切腹事件の起る半年余り前のことである。牧之原の入植地、岡田原での百姓仕事にも慣れた頃であった。書状には、これまでの高重の忠誠に対するねぎらいの言葉に添えて、来訪を求める文面が認め

てあつた。

明治二年九月、新政府より謹慎が解かれた慶喜は、仮住まいの宝台院から紺屋町の元代官屋敷に移り住んだばかりである。部屋数こそ少なかったが、敷地は一万坪ある。慶喜は、この屋敷に移り住んで以来、朝早く起き、庭の散歩を日課としていた。その庭の一隅に、稻荷を祀った祠がある。祠の前に来ると決まって慶喜は、足を止め、徳川家の繁栄を祈った。

(將軍職を辞してから、血気に逸る幕臣たちを抑え、ひたすら恭順を続けて来た。その誠意が、ここに来てやっと朝廷に認められた。新政府は、幾多の難題を抱え、徳川家の存在は、最早脅威ではない。むしろ有能な幕臣の登用を図って、新政府の人材不足を補い、基礎固めをしようとしている)

慶喜は、徳川家の存続に安堵の胸を撫で下ろすとともに、新政府の政策の変化を敏感に感じ取っていたのである。

高重が、慶喜邸を訪れたのは、春霞の漂う朝の九時頃であつた。早朝六時に家を出て、馬を駆り、牧之原から大井川を渡った。八里の道を三時間で駆け抜けて来たのである。

慶喜は、高重の顔を見るなり、満面の笑みを浮かべながら迎えた。高重の来訪を心から待ち望んでいたようである。

高重は、用人の案内で、客間に通された。

「麗しきご尊顔を拝し奉り恐悦至極に存じます。この度は、謹慎も解かれ、新しきお屋敷に移られ、おめでとうございます」

「太起次郎よく来てくれた。そちたちにも何かと苦勞をかけたが、やっと謹慎も解け自由の身となった。近頃は、庭歩きするのが楽しみでのう。堅苦しい挨拶は抜きにして、鳥の声でも聞きながら話そうではないか」

慶喜は、高重を促し、庭に出て、床机を勧めた。

「恐れ多いことでございます」

高重は、固辞したが、たつての勧めに従って、慶喜と並んで床机に腰を下ろした。竹林に朝の光が差し込み、その光が、風に揺れる枝の間でキラキラ光っている。池の水面に大きな鯉が姿を現し、悠然と泳いでいる。

「のう太起次郎、予が上野の大慈院から水戸、駿府と居を移すたびによく警護の務めを果たしてくれた。そちたちのお陰で無事こうして生き延び、徳川家を潰さずに済んだ。朝敵の汚名を着てまで生き延びようとした予を、不甲斐ない將軍と思つたであらう」

「そんなことはございませぬ。かねてから英明の誉高い上様を、多くの家臣が信賴申し上げておりました」

「予には、新しい日本を造り上げなければならぬという使命があつたのじゃ。そのためには幕府は、老木であり過ぎた。陋習ろうしゅうと先例にとらわれ、物事が前に進まない。中から腐りかけて

いた。そこに海の向こうから強風が吹きつけた。メリケン、エゲレス、フランスなどの西洋の列強が開国を迫って来たのじゃ。それを阻止するには武力がなくてはならない。幕府には、こうした列強に対抗するだけの武力を整え、使いこなすだけの力は、最早なかった。そこで雄藩の力を借りることを考えた。朝廷を盟主として、幕府を中心とする連合政権を打ち立てることである。ところが、予想以上に薩長の力が強くなっていた。藩内の守旧派を押しつけて改革を進め、新しい時代を迎える準備を進めていたのじゃ」

高重は、幕臣たちが疑問に思っていたことを思い切って聞いてみた。

「衰えたりとはいえ、幕府の軍事力は、薩長を凌駕していると思われますのに、何故大坂からお帰りになってしまわれたのですか」

「鳥羽、伏見の戦いを見て予は、戦はどうしても避けなければならぬと思つた。これ以上戦をすれば、双方に、あまりにも多くの犠牲者が出て、泥沼化する。そのことを怖れたからじゃ。内乱を防ぐためには、將軍の地位を捨ててもかまわない。朝廷を中心とした新しい政体のもとで、この国を立て直して行くことが必要である。そのために、薩長中心の政府が形成されることになるかもしれないが、それでもかまわないと考えた。ただ、ご先祖様から引き継いだ徳川家だけは何としても守りたい。また、これまで忠誠を尽くしてくれた家臣たちを見殺しにすることはできない。それには、予が、ひたすら恭順を通し、徳川家の旗本たちに戦をさせないことである。戦を起さなければ朝廷も薩長も徳川家を潰す口実がなくなり、断絶は避けられると考えたのじ

や。命乞いのためだけに謹慎したのではないことを太起次郎には、分かって貰いたい」

高重は、慶喜の胸の内を始めて聞いた。

（毀誉褒貶きよほうへんの多い人物であったが、重責を担って歴史の曲がり角に立ち、新時代の到来のために自ら捨石となった慶喜は、やはり偉大な主君である。日本を救い明治維新を成し遂げた陰の立役者は、慶喜公である）

高重は、尊敬の眼差しを慶喜の顔に向けた。その顔には、大きな仕事を無事成し遂げた満足感が漂っている。

頭の先には、陽の光を浴びた富士が燦然と輝いていた。

慶喜は、高重の帰り際に、数々の貴重な品を下賜している。徳川伝来の陣羽織、葵の御紋入りの馬具一式、愛用の指揮棒、将軍家に伝わる越中松倉、郷義弘の刀、自身着用の葵紋入り袴など、日頃彼の愛用していたものばかりである。

これを見ても、慶喜の高重に対する感謝の気持ちがいかに強かったかを、窺い知ることができ。これらの貴重な品々は、今でも大草家に大切に保管されている。

（二）家達いえさと牧之原を視察

中條景昭、大草高重たち新番組の隊士が、金谷開墾方となつて、牧之原に入植し、半年が過ぎた。明けて明治三年正月、高重が年始の挨拶に景昭宅を訪れた。

「静岡藩の藩主となった徳川家達公を牧之原に招いて金谷開墾方の実情を視察して頂いたらどうだろうか。家達公は、八歳の幼君ではあるが、聡明であられる。われわれが、一致協力して開墾に当たっている姿をお見せしたい」

高重は、景昭に提案した。

「分かった。家達公にご来臨願い、牧之原開墾の苦闘をつぶさに視察して頂こう。それにはまず静岡藩に出向き、大久保一翁、勝海舟、山岡鉄舟など、藩のご重役方を説得しなければならない。重役方に顔の効く高橋泥舟を誘って、貴公と三人で静岡に参ろう」

景昭と高重は、田中藩の町奉行に転出していた高橋泥舟に同行を頼み、静岡に出向いた。

家達は、幼いとはいえ、物事の判断ができる年齢に達している。

藩重役方の協議の結果、牧之原への家達の視察が決まった。

家臣たちが家族ともども鍬や鋤を持って土と戦っている姿を見て頂くことは、将来の家達の人格形成と治世に役立つ。また、金谷開墾方の武士たちにとっても主君のねぎらいの言葉は、これから開墾を進める上で、励みになると判断されたのである。

家達の牧之原視察は、旧暦明治三年三月三日と決まった。

牧之原に行くには、大井川を渡らなければならない。大井川には、江戸時代から橋がなかった。

川を渡るためには、川越人足たちの手を借りるか、舟を利用するしかない。

幼君家達公を無事お渡しするために、安全な渡河方法が検討された。

その結果、水が流れている本流には、仮橋を架け、河川敷には小石を敷き詰め、歩きやすいようにするということが決まったのである。幸いにして、視察日の四、五日前から、雨が無く水量が少なかった。開墾方の藩士たちはもとより、人夫たちも動員して材木を切り出し、三日、三晩の徹夜作業で架橋を終えた。

当日、景昭、高重以下開墾方藩士二百五十名が河原にひざまずいて家達の来訪を待っている。薄雲のかかったうららかな良い天気である。

家達は、途中とところで駕籠から降りた。満開の桜を眺め、富士を望見し、家臣の説明に耳を傾け、終始ご機嫌である。

大久保一翁と榊原健吉が家達に従い、三十人の供廻りを連れている。

一行は、大井川堤で河原へ下り、小砂利を敷き詰めた仮道を進んだ。

家達は、駕籠に乗ったまま仮橋の前まで進み、そこで駕籠から降り、歩いて橋を渡った。

開墾方藩士たちの中には、家達の姿が見えると感涙し、嗚咽する者も少なくない。

家達が、仮橋の中央に差しかかった。すると漢学者の服部一翁が、「ああ、蓬萊、ああ、蓬萊」と叫んだ。その声を聞いた迎えの家臣たちは、河原に両手をつき、平伏して頭を上げることができない。

「まこと蓬萊でござります」

服部の音頭に唱和する声が、大井川の川風に乗って、遠くまで聞こえた。

その日は、開墾方の家族全員五百人が、谷口原に集まった。

床机に腰を下ろした家達の前で景昭が、開墾方藩士を代表し、牧之原の土地を下賜され、はるばるご来臨賜ったお礼を言上した。続いて高重が、開墾家族たちを代表して、徳川家安泰の祝辞を述べている。

大久保一翁が、家達の言葉を伝え、儀式は終わった。

家達の渡った仮橋は、それ以来蓬萊橋と名付けられ、江戸時代から続いた渡船は禁止された。だが、この仮橋は、翌年秋の台風によって流出し、改めて三隻の渡船が許可されている。

その後、島田の宿屋清水永蔵氏が架橋運動に奔走し、明治十二年春、架橋が完成し、改めて「蓬萊橋」と名付けられ、今日まで利用されている。

この橋は、全長九百三十メートル、近年堤防の改修などで短くなり、八百九十六、五メートルとなっている。あちこち修繕した跡が見られるが、木造の橋としては、世界最長であり、ギネスブックにも掲載されている。

(三) 川越人足の牧之原入植

徳川家達の牧之原視察の翌月、大井川徒渉制度が民部省令によって廃止された。

二百数十年続いたこの制度は、それによって生活してきた川越人足たちの生存権を奪うことになってしまったのである。

困窮した人足たちの中に不穏な空気が漲っている。事態の收拾を図るため、救済策を藩に訴えようとする動きが高まった。だが、人足の中には、藩への交渉を有利に進めることのできるような人物はいない。

そこで、金谷宿の商人仲田源蔵が選ばれた。川越人足総代として、その交渉に当ることになったのである。

明治三年九月、仲田源蔵は、島田郡役所に人足救済嘆願書を提出している。この嘆願書には、金谷、島田両宿場の川役人および名主、組頭の奥書があり、丸尾文六ら六人の世話人が署名している。その嘆願書に、次のような内容が盛り込まれていた。

「当大井川歩行越えは、二七〇年余、規則によって守られ、人足は、それに従って生活して来ましたが。そのことは、深く感じ入っているところであります。このたび維新によってこの制度が廃止されました。結構なことであるとは思いますが、川越人足共は、その日の生計にも窮し、飢餓に瀕する者が大部分です。つきましては、持洸山御林跡開墾地（牧之原の一部）をこれら窮民にお譲り頂き、渡船および通船の一切を彼等にお任せ願いたいと存じます」というものであった。

仲田源蔵が、何故川越人足の総代に推されたかは、明らかでない。多分、仲田は、金谷宿を取り仕切る有力な商人で、身長、体格ともに人に優れ、学問もあり、洞察力と行動力を兼ね備えた人物であったからであろう。

仲田は、島田郡役所に失業人足の救済を再三陳情したが、らちがあかない。そこで、静岡藩へ

の請願を試みたのである。

静岡藩では、それを受け、川越人足の生活実態をさらに詳しく知るため、仲田に調査を命じた。仲田は、速やかに報告書を取りまとめ、同年十二月、静岡藩に提出した。

しかし、その後、何度も藩庁に督促したが、一向に進展する様子はない。その間にも、川越人足の窮状は、増すばかりである。

痺れを切らした仲田は、直接明治新政府の民部省に嘆願することを決意した。上京した仲田は、民部省駅逓司に出頭し、嘆願に及んだが、その場で捕らえられた。直訴嘆願は、江戸幕府の慣例に倣い、明治になっても、禁じられていたのである。

しかし、その熱情と誠意あふれる嘆願に動かされた新政府は、明治四年三月島田郡政役所を通し、救済策を提示した。

その内容は、特別困窮者二百七十四人に土地を払い下げるというものである。だが、そのうち、実際に川越人足が入植したのは、百人ほどであった。それでも、東西萩間村（旧相良町）に属する入会採草地、二百四町七反（二百三ヘクタール）が、川越人足に分け与えられることになった。

明治四年六月八日、牧之原開拓を希望する川越人足百人は、住み慣れた宿場町の島田、金谷を出て、西萩間村に入植した。

請願書には、島田、金谷の両宿場町の川役人、名主、組頭らの奥書と丸尾文六を初めとする世

話人六人の署名がある。

世話人には、近郷近在の富農が名を連ねている。仲田は、開墾、営農に、全く経験のない川越人足たちの入植には、これら世話人たちの指導が必要であると考えていた。その意図を静岡藩も明治新政府も承知していたようである。

ところが、その請願書に仲田源蔵の名はない。

仲田は、もともと商人であったことから、入植して、開墾の仕事をするつもりはなく、川越人足たちの救済の目途さえ立てばそれでよかったのである。

六人の世話人は、署名はしたものの、入植した者は四人で、最終的には、丸尾文六だけが残った。それだけ開墾は、困難な仕事であったと言える。

この入植地北側には、開墾方の藩士たちの千四百町歩の原野が広がっている。川越人足の入植地も開墾方の土地と同様、赤松の生えた疎林であった。林の下には、イヌツゲ、ヒササキなどの低木と雑草類に覆われた赤褐色、重粘土質の痩せた土地であった。

二年前に入植した開墾方の藩士たちに比べ、川越人夫たちの入植は、さらに悲惨であったと伝えられている。

人足たちは、米、味噌、醤油、鍋、釜を背負い、家族連れでの入植であった。家も無く野宿をしておの開墾作業が続いたのである。

百家族入植したが、過酷な労働に加えて、慣れない仕事のため、六十七家族が当日貰った十円

の下附金を受け取ると、そのまま土地を捨て、逃げ出してしまった。

仲田源蔵が命懸けで勝取った失業対策であったが、結局この開墾地に残った者は、わずか三十三人に過ぎなかった。それでも後世になって、仲田の功績は、この残った人々によって顕彰され、牧之原に頌徳碑が建てられるほどの高い評価を受けている。

残った三十三家族は必死の覚悟で開墾に当った。幾多の困難を乗り越え、食糧を確保し、茶園を造り成功した。

その成功を支えた一人の偉大な人物がいた。最後の世話人として残った丸尾文六である。

丸尾は、牧之原南部、池新田を拓いた豪農であった。祖先は、高天神城の徳川方の武将丸尾修理亮義清である。義清の兄は、本間八郎三郎氏清といった。兄弟とも武田方の猛攻を受け、天正二年（一五七四）六月二八日討死した。兄の氏清二十八歳、弟の義清は、二十歳であった。

一族は、池新田村や山名郡高部村に隠れ帰農した。後に、本間、丸尾両氏は、池新田の開墾に努め、横須賀藩の大庄屋となったのである。

丸尾は、川越人足の世話人として明治十一年までに一万八千円の巨費を投じている。その費用は、ほとんど丸尾の個人資産から出ていたという。

彼は、牧之原台地開墾と併せて、近くの低地に水田を拓いた。水田の収穫は、少なかったが、茶園の生産が、生活を支えるまでの数年間は、入植者たちの食糧確保に役立った。

また、丸尾は、茶の未成木の間、食用の雑穀、芋などを作らせた。加えて、楮こうぞ、雁皮がんぴなどの換金作物の栽培や桑を植え、養蚕を奨励するなどのキメ細かな農業指導を行っている。

丸尾は、常に開墾の陣頭に立ち、人足たちを激励した。家族と離れ泊り込み、家を建て、村づくりをしている。

明治五年三月、丸尾は、郷里の池新田から水神宮を勧請し、入植者たちの氏神としてこれを守らせた。この水神宮は、丸尾の祖先たちが、徳川の初期に新野池を干拓する際に、池端の新野から新田村の氏神として勧奨したものである。

川越人足たちの開墾事業は、丸尾文六の献身的な努力により、着々と成果を上げることが出来た。

水田を含めた丸尾組の茶園は、二十一家族で、明治十一年には、四十二町に拡大している。ちなみに二百人で入植した開墾方隊士たちの同年の茶園は、二百町歩である。そのことからしても、いかに丸尾文六の指導が適切であり、川越人足たちが、それに応え、厳しい労働に耐えたかを物語っている。

丸尾は、明治二十二年五月、郷里に残してきた愛妻に、茶の事業が順調に進み、新しい機械を入れ、四く五十人の摘み手と三十人の職工を使って、製品にして三百三十六貫の茶葉を生産したと書き送っている。

牧之原に入植した三十三世帯のうち、丸尾組に入った一七人と八十原付近の野村組の六人と

合わせて二十三人の子孫が、平成の今日でも茶園を続けている。子孫たちは、結束して、仲田源蔵、丸尾文六の報恩碑建立の発起人となった。

丸尾組二十一戸が入植した四集落は、現在丸尾原と呼ばれている。そこには、氏神水神宮が建ち、境内には丸尾文六、仲田源蔵の報徳碑二基が立っている。大窪の丸尾の住宅には、今も子孫が住んでいて近在の川越人足の子孫たちとともに茶業を営んでいる。

十二．廃藩置県後の牧之原

(一) 廃藩の衝撃

明治四年（一八七二）七月十四日、「廃藩置県に関する詔勅」が布告され、各藩に衝撃が走った。

当時、二百六十一藩あった日本全国の藩が消滅し、新しく府県制が敷かれるというのである。当初は、三府三百二県であったが、多過ぎるとする意見が強く、同年十一月、三府七十二県に落ち着いた。さらに、これまで大名の世襲となっていた藩知事がすべて免官され、東京在住が義務づけられた。新しい府県知事は、中央から派遣されることになったのである。

また、この改正で、県知事は、県令と改められている。

この版籍奉還によって、徳川幕府の残滓が一扫され、中央集権的な統一国家が、名実ともに誕

生したのである。

廃藩置県当時の静岡県は、東から韮山県（伊豆）、静岡藩（駿河、遠江）堀江藩（遠江の一部）の二藩一県であった。それが、廃藩置県によって、静岡藩は、駿河と遠江が分離し、駿河のみで静岡県となった。一方、堀江藩は、静岡藩の遠江の部分と合併し、遠江の国を一まとめにした浜松県として新発足した。また、韮山県は、足柄県の一部となり、韮山県の県名はなくなった。

藩知事の徳川家達は、免官となり、東京に居を移すことになった。新県令には、大久保一翁が就任している。

牧之原は、遠江の国に属していたことから、静岡県ではなく、浜松県に編入された。開墾方は、藩の廃止にともない消滅した。それによって、静岡藩から支給されていた給金も、廃止されることになったのである。牧之原に入植した士族たちにとっては、まさに死活問題であったのだ。

大草高重は、中條景昭の内意を受け、善後策の相談のため、服部一徳と共に、勝海舟宅を訪れた。

年の瀬も迫り、空風の吹く寒い日であった。

「大草さん。茶が銭になるのは、あと何年くらいかかりそうかね」

「三年くらいかかる見込みです。家達公も東京に戻られることになり、最早徳川家からの支援は覚束なくなりました。新知事に陳情するにしても、今度赴任してきた浜松県の多たく久く茂げ族ぶ県令は、旧幕臣ではないので、おそらくまともには取り合ってくれないでしょう。勝さん。何とか三年ほ

ど持ちこたえられる資金を出してくれるよう新政府に掛け合っては頂けませんか。中條さんからも、よろしくお願いしたいとのことですよ」

高重は、勝海舟の政治力に期待した。

海舟は、高重に言われるまでもなく牧之原の開墾方の藩士たちの将来を心配していた。

「大草さん。服部さん。そのことについては、わしも気を病んでいたところだ。先日も新政府の大久保利通さんに会ったので、牧之原に入植して茶の栽培を始めた旧幕臣のために、その収穫まで二万両ほど勸業奨励金として支給してやってはくれまいか、と切り込んでみたところだ」

「その反応はどうでした」

海舟は、すかさず答えた。

「すると、大久保さんは、牧之原の旧幕臣たちに、今ここで騒がれては困ると思ったのか、善処すると言ってくれたよ。今更薩長の連中に頭を下げるのは、面白くないが、背に腹は替えられない。新政府も廃藩置県に対する士族たちの不満が高まるのを恐れているようだね。特に旧幕臣の動きは、気になってしょうがないといったところだ」

「勝さんには、いつもながら大変ご迷惑をおかけして申し訳ない。よろしくお願いします」

「分かりました。何とか新政府から金を引っ張り出しましょう。ただ、大草さん。金の出所については、新政府からと言わないほうが良いでしょう。徳川家から出たことにするほうが無難だ。薩長から出たとなると、受け取らねえ、などとおかしな意地を張る奴もいるかも知れないからね」

「では、そういうことにしておきましょう」

高重も一徳も勝の心配りに感謝するばかりであった。

「ところで、勝さんも、山岡さんも東京に行つてしまわれると聞きましたが、まことですか。これまで何かと面倒を見てくれた二人がいなくなり、支えがなくなることは牧之原にとつては大きな痛手です。だからと言って、お二人の出世を妨げる理由にはならない。この機会を利用して、思う存分、ご活躍ください」

高重は、万感の思いを込めて勝の目を見た。勝は、表情を崩さず、ぽつりと言った。

「静岡に残した旧幕臣たちが、暮らしの立つように新政府の中に入ってできるだけのことはするつもりです」

その目には、時代の流れに翻弄され、市井の片隅に消えて行つてしまった幕臣たちへの愛惜の念がこもっていた。

廃藩置県のあつた翌年の明治五年の春、中條景昭、大草高重に浜松県から呼び出しがあつた。勸業奨励金二万両が下賜されることになったのである。

表向きは、旧藩侯徳川家達から二万両下賜されたことになっている。だが、廃藩置県後の当時の徳川家の財政状況から見て、二万両もの開墾資金が与えられたとは考えにくい。

いずれにしても、廃藩置県にともない、静岡藩は無くなり、開墾方という職制も消滅した。牧之原に入植した旧幕臣たちは、茶が収穫期を迎えるまで、困窮と苦難に耐え抜かねばならなかつ

たのである。

(二) 収穫の準備

一度も茶摘みを経験することなく、多くの入植者たちが牧之原を去った。借金の抵当に土地を取られ、夜逃げ同様にしていなくなった者、過酷な労働に体を壊し、仕事を続けられなくなった者、華やかな都会生活が忘れられず、土地を売って出て行く者など、様々な理由により、開墾地を離れている。

また、牧之原茶園の誕生に尽力し、陰で支えた静岡藩の要人たちも静岡から各地に移って行った。勝海舟、山岡鉄舟、関口隆吉なども廃藩置県にともなって、静岡を後にしている。

まず、関口隆吉が、明治五年一月五日権参事となって、三瀨^{みずま}県（現福岡県）に赴任した。関口は、明治三年、東京から金谷開墾方頭並となり、牧之原に茶園を造るために移転してきて、一年しか経っていないかった。

次いで勝海舟が、その年の五月、東京に移った。

大草高重は、静岡まで海舟を見送っている。海舟は、別れに際して、高重に牧之原開墾の後事を託した。

「牧之原開墾は、道半ばである。徳川家の威信にかけても、幕臣の名誉にかけてもこの事業を完成してもらいたい。国の政^{まつりごと}は、薩長に譲ったが、国を富ませ、豊かな暮らしを支えるには、

何が大切か身をもって示して頂きたい」

高重は、海舟の言葉に頷き互いに手を取り合って別れを惜しんだ。

海舟の後を追うように、六月には、山岡鉄舟が東京に居を移した。西郷隆盛が推挙した宮内省の侍従に着任するためである。

高重と鉄舟は、千葉周作道場玄武館以来の旧友で、共に幕府講武所で師範を務め、その後幕末の動乱期に手を携え、駆け抜けた仲である。二人の胸の奥には、特別な思いがあつたに違いない。

高重は、鉄舟のこれまでの交誼を謝し、別れを惜しんだ。

「東京に行っても、牧之原の同志のことは忘れないでくれ。これからも引き続き支援をお願いしたい。貴公は、侍従になることによって、幕府時代からの勤皇の志を、十分發揮する場が与えられたのだ。活躍を期待する」

「有難う。今更、宮仕えする気はなかつたが、西郷さんからの話で、断るわけにも行かなかつた。幕臣の拙者が、帝（みかど）に仕えるようになったのは、逆賊の汚名を世間から払拭するためであつたのだ」

鉄舟は、侍従になつた心情を高重に吐露し、住み慣れた静岡を後にした。梅雨の終わりを告げる強い雨が降っている。

旧幕臣の中でも有能な家臣は、人材不足の新政府にとって、必要な人物であつた。政権基盤を固めるために、有用な人物を必要とした新政府は、かつて敵対した幕臣であっても、有能とあれ

ば、登用に躊躇はしなかった。

それだけではない。廢藩置県後、明治新政府に対する士族たちの不満が高まり、日本各地に、反乱の危険が漲っている。新政府としても、その芽を摘み取り、懐柔の必要があつたのだ。特に、旧幕臣たちの動きは、新政府としても警戒しなければならなかったのである。

そうした世間の動きを横目で眺めながら、残った牧之原の士族たちは、目前の生活に追われ、茶や作物生産に懸命の努力を続けていた。

そんな時、牧之原戸長役場が新設された。戸長には、中條景昭が就任した。

景昭は、毎日役場に出所し、牧之原の行政に専念している。そのため、茶園の経営は、人任せにせざるを得なくなっていた。そのことが、後に牧之原開墾方士族の分裂の危険をはらんだ苟美館事件こうみかんの遠因にもなったのである。

明治六年元旦、高重は、牧之原のうち、彼と共に岡田原に入植した旧開墾方士族とその家族を自宅に招いた。その年の五月に茶の収穫を迎えるに当つての具体的な準備と作業心得を協議するためである。

高重は、年頭の挨拶に、これまでの開墾の努力に、ねぎらいの言葉をかけ、さらなる団結を呼びかけた。開墾方伍長で岡田原二十九番地に入植した小島勝直が、協議の取りまとめ役を努めている。高重は、全員に語りかけるように、収穫期の協力を要請した。

「今年初めて茶が収穫できることになった。だが、生育状況から見て、全戸が収穫できるとは限らない。来年からは、全戸がこぞって、毎年収穫できるようにしなければならぬ。そのためには、手入れを怠らないで頂きたい。収穫までに、妻女には、茶摘み用の作業着を調べ、手揉み師の飲食、寝具などの用意をして頂きたい。費用については、勝さんが静岡を去る時に用立ててくれた五百両がある。中條さんと話し合ってそのうちの百五十両を岡田原のわれわれに配分して貰うことになった。その金をここに居る小島氏に、わずかずつであるが全戸に行き渡るように分けてもらう」

高重の家に集まった全員が感涙に咽んだ。廃藩置県以来、収入の当てもなく貧乏所帯をやりくりしてきた妻たちにとっては、まさに干天の慈雨であった。多くの妻たちがその場に泣き崩れた。高重は、収穫に間に合うよう弓道場の脇に茶部屋を作った。中央には、焙炉を置き、湯を沸かす大釜を用意した。部屋の隅には、畳を敷き、茶摘み娘たちの食事や休息ができるようにしている。摘んだ生葉は、大釜に入れて蒸し、それを焙炉で乾燥させながら手揉み師が製茶にするといった作業を一ヶ所で行えるようにしたのである。

牧之原で初めての茶摘み日は、明治六年五月二日八十八夜の日と決まった。入植した開墾方全員がその日を待ち望んでいる。

この年は、春から雨が多く霧の深い日が続いた。茶の葉にはこの霧が大切である。

入植した武士たちが、これまで開墾した土地は、百余町歩で、茶園は、そのうちの八十町歩で

あった。それでも下賜された土地の一割にも満たない。茶園の周りには、まだまだ広い未開墾の原野が広がっている。

(三) 辛苦の初茶

いよいよその日が来た。岡田原入植の全員が、早朝から茶園に出た。茶樹は、腰の高さまで育っている。黄緑の新芽が、朝の光を浴びて、まぶしく輝いている。

女たちは、青空に映える緑の茶園の中を、慣れない手つきで、茶摘みを始めた。

紺の手甲・脚絆に、赤前垂、赤襷を掛け、頭には、紅白に染め抜いた手拭を被り、赤紐で吊った茶駕籠を首に掛けている。

駕籠いっぱいになった新芽を男たちが運ぶ。茶園は、収穫の喜びに沸き、笑顔で包まれていた。

岡田原の茶樹は、ひときわ生育がよかった。なかでも、高重の組は、最初に摘むことができるほどの素晴らしい出来であった。

一番摘みは高重の茶園から始められた。

高重は、新芽がていねいに摘み取られる風景をじっと見ていた。すると、後ろで中條景昭の声がした。

「どこの茶園の樹も、立派に育ちましたな。日頃の大草さんのご苦労が実ったわけで、目出度いことです。おそらく来年は、この牧之原一帯で、茶摘みの風景が見られることでしょう」

景昭は、短い袴に刀を差し、岡田原まで祝いに来たのである。

高重は、景昭と初めてこの土地を視察に来た時のことを思い出した。

（狐狸の棲むこの原野は、灌木と雑草に覆われ、人間の立ち入りを拒否するかのようになり、立ちほだかっていた。その土地に鉋や鍬を振るい、開墾を始めて三年有余。一部ではあるが、緑の茶園とすることが出来た。ここまでにすることが出来たのは、徳川家の庇護と勝海舟、山岡鉄舟。関口隆吉など先見の明がある旧幕臣の力によるものである。それに、精鋭隊、新番組、金谷開墾方へと続く誠忠の仲間たちが、家族ぐるみ命懸けで、牧之原開墾に当たったからである）

「中條さん。これで、この土地での茶の栽培に、何とか目途をつけることが出来ました。だが、まだこの数倍の土地が残っています。すっかり緑の茶園にするには、後何年くらいかかりますか、見当も付きません」

「そう。わたしたちの次の世代までかかるかもしれないな。大きな敵陣に対し、やっと突破口を開いたといったところですからな」

景昭と高重は、まだ残された未開墾地を眺め、これからが正念場であることをお互いに確認し合った。

牧之原産の最初の茶は、国内はもとより、輸出にも向けられた。横浜に店を持つ英米の商社は、広く茶の仕入先を求めている矢先であったので、飛ぶように売れたのである。

摘んだ茶の葉は、釜の上の蒸駕籠で蒸してから筵に移し、焙炉の上に乗せて、揉み上げる。朝、摘んだ茶葉は、その日のうちに仕上げなければならない。この時期は、休む暇もないほどの忙しさであった。

高重は、初めての製茶に失敗は許されないと考え、熟練した茶摘み女五人と腕の良い手揉師を二人、金谷の茶産地から雇い、品質に万全を期した。高重の妻うらも茶摘みの方法を、茶摘み女たちから学ぶため、一緒になって作業をした。武士の妻などという体面にこだわっている場合はなかったのである。

うらは、茶摘み作業を続けるうちに、汗を流して働く喜びが、体の中から湧き出てくるのを感じるようになっていた。

茎の先に丸まった針のような葉が一つ出る。それを芯という。この芯の下に一葉ずつ間隔を開けて二枚の葉が生える。芯と二枚の葉を摘むことを「一芯二葉摘み」といってこの三葉を蒸して手摘みにすると極上の茶ができるのである。

高重は、全部を「一芯二葉摘み」とした。それを蒸し、茶師が手揉みで丹念に仕上げる。

床の間の前に、白い布を敷き、できたばかりの新茶を一面に広げた高重は、銀葉や茎の小さい切れ端を取り除いた。綺麗になった新茶を茶筒に入れて「牧之原園」と記し、床の間に備えた。牧之原で最初にできた極上茶を東京にいる徳川家達に献上するためである。

岡田原で摘み取った茶葉は、高重の茶部屋に運び込まれ製品化された。献上品、贈呈品などを

除いて、すべて商品化され、生葉の収穫に応じて、その収益金を現金化し、各戸に分配した。

初収穫は、一週間で終わった。最後の晩は、分配金の報告と焙炉上げのため、高重は、岡田原のすべての家族を自宅に集め、祝宴を設けた。

宴が始まった頃、景昭が、丁髷姿の一人の老人を連れて、高重の家に現れた。男は、かつて講武所仲間伊佐新次郎である。

伊佐は、江戸にいる頃、講武所支配世話人を務め、景昭と昵懇の間柄で、高重もずいぶん世話になった人物である。下田奉行所に支配組頭として勤務中、アメリカ領事ハリスに唐人お吉を世話した人物としても知られている。漢学、仏典、和歌に通じ、書道家でもある。

彼が、苟美館事件こうみかんの解決に大きな役割を果たすことになるとは、この時には、知る由もなかった。

伊佐は、牧之原の初収穫のことを聞き、景昭から誘われるままに静岡に来た。多芸多才な伊佐が加わり、祝宴は、一段と盛り上がったのである。

日が暮れ、月が雲間に見え隠れしている。

高重は、庭に筵を敷いてその周りを提灯で囲み、集まった家族に酒食を提供した。妻のうらは、その家族の女たちとともに酒や料理の支度に余念がない。帰りには、赤飯を用意し、それぞれの家に持たせた。

金谷原から来た茶師の虎次郎が、得意の喉を鳴らし「茶摘み唄」を唄った。

宇治で茶師として修業した時に覚えたものだけに、見事な節回しである。

その時、客人で来ていた伊佐が、立ち上がり、即興で、「茶摘み唄」を作詞し、その席で披露した。

現在牧之原地方に伝わる「茶ぶし」は、この時代に伊佐新次郎が作ったものであるという。

十二．牧之原の土に生きる

(一) 初収穫茶、徳川家に献上

中條景昭、大草高重の二人は、明治六年五月十五日早朝、牧之原を発った。初めて収穫した茶を徳川家ゆかりの人たちに献上するためである。

まず、静岡の紺屋町に住む慶喜邸を訪れた。

二人は、壺に入った香り高い最高級品茶を慶喜に差し出した。

「牧之原のご領地をお下げ渡し頂き、三年有余開墾方として荒地を切り拓いて、茶園を造り、やつとこのような茶が出来ました。真つ先に慶喜様にご賞味いただきたく持参しました」

「有難く頂戴いたす。牧之原に入植した後のそちたちの苦労は、大久保や勝から聞いている。もはや徳川家の当主でない予には、何も出来なかったが、陰ながらそちたちの成功を祈っていた。そちたちの帰農によって予の恭順の誠が天下に認められ、徳川家と多くの家臣を救ったことは

紛れのない事実である。その上、このような立派な茶を世に出すことが出来、牧之原の将来に大きな希望を与えてくれた。誠に喜ばしい限りである。とくと味わいながら喫することにしよう」慶喜の言葉を聞いて、江戸城明け渡しから牧之原開墾にいたる苦闘の日々が、二人の脳裏を掠めた。

慶喜邸を後にした二人は、風呂敷に献上の茶筒を包み、それを背負って清水湊まで歩いた。

五月とはいえ、すでに夏の日差しである。その日差しを受けてキラキラと輝く梢の間を爽やかな風が吹き抜けている。

清水から船に乗り横浜港で下船した。景昭と高重は、横浜から開通したばかりの鉄道に乗り、新橋に出て近くの旅籠に宿を取った。

江戸から東京へと町の様子は大きく変っている。特に、新橋の汐留付近は、鉄道が敷かれて以来一変した。洋風の新しい建物がどんどん新築されている。

江戸が、新しい時代の風を受け、遠くなつて行く。二人は、故郷の変貌振りにただ驚くばかりであった。

翌日、千駄ヶ谷の徳川家達邸を訪ねた。家達は、すでに十歳になっていた。

客間に通され、しばらく控えていると、家達とともに天璋院が現れた。

天璋院は、薩摩島津家の分家、今和泉島津家の島津忠剛ただたけの姫として薩摩に生まれ、篤姫と称した。藩主島津斉彬の養女となり、後に近衛忠熙ただひろの養女として十三代将軍徳川家定の御台所となつ

た。家定死後、天璋院の称号が与えられている。

江戸城明け渡し後、家達が静岡から東京駒込の屋敷に移り住んだ頃から、母代わりとして家達と同居していた。

牧之原で収穫した初めての茶を献上するとあって、天璋院も興味を示し、同席することになったのである。

「徳川家からお下げ渡し頂いた牧之原の土地で育ったお茶でございます。種を播いてから三年余り、今年になって初めて出荷出来るようになりました。家達様にご賞味頂きたく持参しました」
「わざわざお届け頂き、有難く思います。開墾方の人たちにも家達が、お茶の収穫を喜んでいただお伝えください」

少年とは思えぬほどの配慮の行き届いた言葉であった。

「開墾地は、まだほんの一部しか手を着けておりません。家臣一同力を合わせて彼の地を大茶園とする所存ですので、今後も温かくお見守り頂きたく、願い奉ります」

二人は、すすすくと育っている家達のねぎらいの言葉に感激し、ひたすら徳川家の安泰と繁栄を祈った。

「お二方とも牧之原では、大変ご苦労されていると勝さんから聞いております。丹精込めて作ったお茶、有難く頂戴いたします。これから開墾が進めば、もっと多くのお茶が出来、庶民も手軽に牧之原のお茶を飲める時代が来ることになりましょう。どうぞこれからも美味しいお茶をた

くさん作って、牧之原のお茶を世間に広めてください」

天璋院からも温かい言葉を頂き、二人は、これまでの苦勞が報われた気がした。

景昭と高重は、千駄ヶ谷の家達邸を辞去し、その足で勝海舟の屋敷に向かった。

海舟は、明治五年六月、静岡を引揚げ、赤坂氷川町四番地の元旗本千七百石柴田氏の屋敷を手に入れ住んでいる。

攘夷論を唱えた景昭と高重は、海舟とは立場は違っていた。だが、徳川家の存続を願う気持ちは同じであった。大政奉還後は、お互いに力を合わせ、幕臣たちの不満を抑え、慶喜の恭順を支える環境を整えて来たのである。

海舟は、景昭、高重の精鋭隊が、慶喜の身の安全を確保し、政治的に利用されることのないよう務めて来た功績を高く評価した。

その功臣たちが、牧之原に入植するのである。出来る限りの協力をするつもりであったに違いない。事実、土地の下げ渡し、徳川家からの給付金、廃藩置県にともなう政府交付金など、開墾を成功させるための最大限の努力を払って開墾方を支援して来た。

また、彼等に、茶を栽培するよう勧めたのも海舟である。彼は、直接牧之原に入植して鋤を振るうことはなかったが、いつも牧之原開墾方の味方であり、その発展に重大な関心を寄せていたのである。

景昭と高重は、勝邸の玄関前に立ち、大声で取次ぎを頼んだ。すると海舟自ら玄関に出て来て、客間に案内した。

景昭の差し出した新茶を手に取ると早速その葉を眺め、香りをかぎ、味を確かめた。

「これが牧之原最初の茶かね。わざわざ届けてくれて有難う。色、香り、味とも良く出来ている。これなら国内だけでなくアメリカ、イギリスにも大手を振って輸出出来る。ご両人とも元気そうでした。お祝いに一杯やりましょう」

そう言って海舟は、気さくに酒と盃を棚から取り出し、二人に勧めた。海軍大輔の海舟も下戸でありながらこの時ばかりは羽目を外した。旧幕臣の仲間同士、心置きなく盃を酌み交わしたのである。

海舟宅に一泊した二人は、翌日山岡鉄舟宅を訪問した。

鉄舟も久し振りで会う景昭、高重の二人を迎えるため、役所を午後から休んで待機していたのである。

鉄舟も政府高官に迎え入れられ、正六位宮内少丞に任じられている。

二人は、鉄舟にも大変世話になった。静岡藩時代、鉄舟の助言は、徳川家重臣たちを動かす、開墾方創設へと導く大きな役割を果たしたのである。

屋敷は、古風で質素であった。いかにも鉄舟に相応しい。彼は幕府講武所時代を懐かしんで、二人を歓待した。新茶を手にした鉄舟は、感激に目を輝かせ、満面笑みを浮かべて言った。

「よくやった。中條さん、大草さん。こんなに早く牧之原の茶が飲めることになろうとは思わなかった。貴公たちを始め精銳隊の努力のお陰である。同じ徳川の家臣として誇りに思う。愉快だ。実に愉快だ。今日はとことん飲み明かそうではないか」

鉄舟は、旧幕臣に戻って景昭、高重とともに心置きなく酒を酌み交わした。

翌朝二人は、鉄舟に見送られ、新橋駅を発った。途中横浜では、賑わう港の積荷作業を見学して牧之原に帰った。

翌年の明治七年、新政府は、家禄没収による士族の不満を抑えるため「家禄奉還金」制度を設けた。これまでの武士の家禄の代りに禄高に応じて一時金を支給するというもので、俸禄を離れる武士のいわば手切れ金のようなものであった。

一生遊んで暮らせるような大金ではないが、新政府にとっては、大きな財政負担である。この金は、新政府から各藩を通じて支給された。だが、支給日は各藩に任せられていた。

静岡藩は、明治八年禄高に応じて支給している。牧之原では、一人千円以上支給を受けた者もいて、全体では相当な金額になったものと推定される。

困窮する武士にとっては、干天の慈雨であった。だが、それも一時凌ぎに過ぎなかった。俸禄を失った武士たちの不満は、全国に高まり、その後、各地で新政府に対する反乱が起るのである。

(二) 栄達を望まず

満開の桜も散り始めた明治八年の春、山岡鉄舟は、牧之原の中條景昭屋敷を訪ねた。景昭が鉄舟と会うのは、明治六年、牧之原で初めて収穫した茶を鉄舟宅に持参して以来であった。

鉄舟は、洋服を着こなし、すっかり新政府の役人が板についている。景昭は、木綿の紋付、袴を身に纏い、新番組の頭として牧之原に入植した当時のままの姿である。

二人は、身なりこそ異なっているが千葉道場では、景昭が鉄舟の兄弟子に当り、幕府講武所では、お互いに剣術師範を務めた仲である。

景昭は、鉄舟に酒を勧めながら言った。

「貴公や勝さんのお陰でこの牧之原もやっと茶園として世に認められるようになって来た。だが、茶園と野菜作りの仕事だけで暮らせる家族はほとんどない。開墾した土地はまだほんの僅かで、折角拝領した土地を手放す者、借金を抱えてどうにもならず、逃げ出す者も跡を絶たない始末だ」

「なるほど。この谷口原も中條さんと初めて来た時とはずいぶん違って、見事な茶園になっている。そればかり感心していたが、これまでになるには、大変な苦労の積み重ねがあったのである。う。」

鉄舟のその言葉には、感慨がこもっていた。

しばらく酒を酌み交わし、懐旧談から開墾の苦労話が続いた後、景昭が鉄舟に来訪の目的を聞

いた。

「ところで、貴公、今日は何か拙者に用事があつて遠路はるばる東京からやってきたのではないか」

鉄舟は、やっと用件を切り出した。

「中條さんや大草さんがこの牧之原に入植した時は、この土地に骨を埋める覚悟であつたと推察している。その気持ちは今でも変わらないか聞きたいと思つて来たのだ。実は、中條さんには、もう一度中央に出て、活躍して貰いたいと考えている。これは、それがしだけの意見ではない。勝さんも同じだ。神奈川県令の座について頂き、貴殿の指導力を行政に役立てて貰いたいのだ。神奈川は、東京に近いし、牧之原とも縁が深い。茶の輸出にとつても重要な横浜港を抱えている。どうだろうか。承知してくれないか」

中條は、腕を組んで考え込んだ。

（再び世に出るためには、またとないチャンスである。もうこのような機会は巡つて来ないかもしれない。このままこの地で埋もれるには惜しい気がする。鉄舟もこれまで苦楽を共にしてきた友人としてこのわしの処遇を考えてくれている。精鋭隊仲間の関口も新政府の役人となった。幕臣のうち、その能力を買われて新政府の要職に着いたものも少なくない）

景昭は迷った。しばらく沈黙が続いている。鉄舟は、目を閉じて春風に運ばれて来る小鳥の囀りをじつと聞いている。

「山岡さん。貴公の厚意は誠に有難い。だが、この話はお断りしたい。先ほど話した通り、牧之原は、やつと光が見えて来たところだ。今、拙者がこの牧之原を捨てれば、折角ここまで来た開墾の仕事が挫折しかねない。拙者は、開墾方の仲間と共にこの地で果てることを誓った。その誓いを、まだこれからという時に破るわけには行かないのだ。この地を立派な茶園に育てる。それが拙者に与えられた徳川家への最後のご奉公であると思っっている」

鉄舟は、景昭の目をじっと見て頷いた。景昭の決心の固いことが分かり、これ以上説得しても無駄だと覚ったのである。徳川家から頂いた牧之原を守り育てることが忠誠心の証であるとする景昭の心情が痛いほど分かった。

「分かり申した。この話は、これでやめましょう。中條さんの牧之原に賭ける思いを聞いただけでも今日来た甲斐がありました」

「そう言われては、かえって恐縮です。ただ、今も話した通りここに入植した仲間の生活は、依然として苦しい。廃藩置県後徳川家からの俸禄も絶えた。いつまでもというつもりはないが、何とか新政府の援助を取り付けて貰えないだろうか」

景昭は、鉄舟に頼んだ。

「ご意向しかと承りました。勝さんとも相談して、微力ながら努力してみましよう。ところで、中條さんは、今でも竹刀を握っておられますか。隣の道場から元気な掛け声が聞こえて来ますな。一手ご指南頂きたいと言いたいところですが、これから大草さんの家にも参りますので時間が

ありません。またの機会とします」

「久し振りに貴公の腕の冴えを見たいと思いましたが、それは残念です」

景昭は、そう言って鉄舟を高重の家に案内するよう使用人に命じた。

しばらく後、鉄舟は、高重の屋敷に着いた。前方には、新芽の出掛った茶園が広がっている。高重は、鉄舟を客間に案内するとすぐに酒の支度に取りかかった。鉄舟の酒好きを十分心得てのことである。

しばらく盃を酌み交わすうちに、鉄舟は、高重に新政府への出仕を促した。

「大草さん。山梨県令の職が近く空くので、その席に座ってくれないか。明治になってから八年になる。新政府も人材を広く求めているのだ」

「残念だが今更、薩長の支配する政府の役人になるつもりはない。山岡さんも勝さんもご存知の通り、牧之原の開墾事業が成功するかどうか、今が正念場だ。それを見捨てて去るわけにはいかん。それがしは、開墾方を仰せつかったその時から、この土地に骨を埋めることに決めたのだ。武士の志をもって、この地を見事開墾し、直参旗本の意地を貫き通したいのだ」

高重は、そう言いながら、苦労を重ねて開墾したこの土地への愛着が湧き上がって来る自分を愛しくさえ感じていたのである。

翌日、鉄舟は、牧之原を発った。景昭、高重とも栄達の道を捨て、牧之原の土と共に生きる道を選んだのだ。鉄舟は、説得が通じなかったことに悔いはなかった。むしろすがすがしくさえ思

えたのである。

大井川に下る道の前方に富士が輝いている。雲雀が晴れた空高く舞い上がり鳴いていた。

(三) 東照宮造営に向けて

栄達の道を自ら断った景昭と高重は、改めて牧之原の未開墾地の開拓に心血を注ぐ決心をした。それには、過酷な労働に耐える強い精神力と入植者同士のさらなる団結が必要である。

ところが、入植後六年経った明治八年も暮れになると労働に疲れ、怠惰に流れる者も出て来て、開墾作業が滞りがちとなった。つい最近の九月にも中村次吉が、開墾地五反余りを高重に買い上げて貰い、離農して浜松に移ったばかりである。

高重を慕って精鋭隊に参画、一緒に牧之原に入植した加藤則元も去った。

それだけではない。

この頃には、付近の村人とのいざこざを起す者、島田の町に出て夜遊びをする者など開墾にも意欲の低下が見られた。加えて、茶の生産量も相場も当初の計算を下回っている。

高重は、正月も近い暮れの二十八日、景昭の屋敷を訪ねた。開墾の立て直しを図るための方策を相談するためである。

景昭は、高重の顔を見るなり訪問の意図を察し、すぐさま日頃考えていたことを話し始めた。「明治ご維新となって世の中は、大きく変わった。だが、拙者は、徳川譜代の旗本であったこと

を忘れたことはない。百姓を生業とすることになったが、心まで武士を捨てたわけではない。開墾方の中には、地味で過酷な農作業に嫌気がさして、この牧之原を出て行く者もいるが、それは止むを得ないことだ。誰も押しとどめることは出来ない。それでも、残った者は、直参旗本であった誇りを後世に伝え生きて行くことが大切である。それには、皆がまとまるような旗印が必要だ。そこで考えたのは、今、久能山にある家康公の木像を遷座し、神君家康公を祀る神社をこの牧之原に建てることである。大草さんはどう思うかね」

景昭の提案に高重は、膝を叩いて賛同した。

「それは、名案です。今、ここで皆の心が一つになるためには、信仰の対象となるようなものが必要でしょう。それには、神社が相応しい。早速その計画を進めましょう。問題は、資金をどうやって集めるかです」

景昭は、じつと天井を仰いでしばらく考え込んでいたが、突然思い付いたように高重の顔を見た。

「そうじゃ。今井信郎のぶおと服部一徳かずのりが、その資金集めに、向いているかもしれない」

今井は、後に坂本竜馬を斬った男として世間の評判となった。

彼は、天保十二年（一八四二）江戸本郷湯島天神下で生まれた。直心陰流榊原健吉の門下に十歳で入門。二十一歳の時、下谷東坂の道場で免許皆伝。後に、幕府講武所の師範となった。

その後今井は、佐々木只三郎に乞われて副隊長格で、京都見廻組に入っている。慶応三年（一八六三）十一月十五日、京都河原町醬油屋近江屋で坂本龍馬、中岡慎太郎を斬った七人の刺客の一人であったという。

江戸城明け渡し後、戊辰戦争に参加し、各地を転戦、箱館で政府軍に捕らえられ、東京の監獄に収監された。明治三年九月の判決で静岡藩に引き渡されている。明治五年一月に赦免され、家族の転居先、浜松の三方原にしばらくいたが、この時には、静岡県の役人として出仕していた。

服部一徳は、禄高百五十俵の小普請役の家に生まれたが、高重の誘いで精鋭隊に入り、彼と共に三十一歳で牧之原に入植している。一徳は漢学の素養が深く、筆も立ったことから牧之原士族入植の事情や入植後の記録を残している。また、高重の実子和田勝重に娘を嫁がせ、高重とは縁戚関係を結んでいる。

勝重は、大草高重の長男である。が、和田家から大草家の養子となった高重は実家の和田家を継がせるため、長男の勝重を和田家の継嗣とした。

今井、服部の名前を聞いた高重は、諸手を挙げて賛成した。高重も二人の誠実な人柄と実行力を高く評価していたからである。

東照宮遷座の資金集めを任された今井と服部は、早速上京した。だが、思うように資金は、集まらない。

二人は、大久保一翁や勝海舟に相談した。しかし、色よい返事は貰えなかった。

逆に、牧之原の地元では、建設の気運が盛り上がるばかりであった。これを機会に結束を強め、幕臣としての誇りを取り戻そうとしているのである。江戸での資金集めは、思うように進まなかったが、こうした地元での建設気運の盛り上がりをも、看過するわけには行かない。

景昭と高重は、自己資金の提供を決断した。こうして、牧之原東照宮が、旧幕臣開墾方の氏神として建設され、明治十年九月二十七日に、ご神体として神君家康公の木像を勧請したのである。

この木像は、もともと江戸城内の紅葉山にあった。ところが、城明け渡しの際に上野寛永寺に移されている。上野が戦場となる直前、山岡鉄舟が、小石川の酒井安房守邸に運んだ。それを旧幕臣たちが明治三年に久能山に遷座し、以来久能山に安置されていた。

その木造を牧之原に移したのである。

牧之原に入植した幕臣たちの熱意が如何に大きかったかをこの一事を見ても分かる。

明治二十六年四月に行われた勧請十五周年記念式典には、当初造営には、乗り気でなかった勝海舟も榎本武揚と共に自筆の幟を奉納している。その幟は、今も大草家に保存されているという。しかし、このご神体となった家康公の木像は、その後、徳川家から、「新築した千駄ヶ谷の屋敷内に、東照宮の社殿を建てて祀りたいから返して欲しい」との要求がなされ、大正七年四月徳川家に返還した。

ご神体返還後の牧之原東照宮は、開墾方子孫の牧之原在住者が少なくなつたこともあって、維

持が困難となった。そのため、岡田原の八幡神社に一時的に合祀されたが、それも廃絶となり、現在は、大草家の所管する大草神社に合祀されている。

一四．分裂の危機を乗り越えて

(一) 明治天皇に謁見

山岡鉄舟から高重に一通の手紙が届いた。明治十年の年の瀬も近い頃である。

内容は、明治天皇が北陸巡幸の帰路、静岡の行在所へ旧幕臣幹部を招き、併せて牧之原開墾の功を褒賞するというものである。

明治十一年十月三十日、明治天皇は、北陸ご巡幸を済ませ、愛知県の豊橋にご到着された。巡幸の目的は、中央集権国家としての統治者である天皇及び新政府の威光を日本国中に示すことにある。

総勢八百人を超える大巡幸団であった。

宮内省の侍従となった山岡鉄舟が、天皇のすぐ後ろに「御用係」として供奉し、巡幸の総指揮をとった。

西南戦争が終結したばかりで殺伐とした空気が日本国中を覆っている。それだけに警護にも、ひとときわ注意を払わなければならなかった。

人選の結果、劍の達人で、胆力、統率力に優れ、天皇にも政府にも信頼の厚い鉄舟に白羽の矢が立ったのである。

天皇誕生日の十一月三日午前十時、明治天皇は、藤枝を出発、十一時五十五分静岡の伝馬町に設けられたご在所にご到着された。

謁見は、翌日の四日である。

景昭と高重は、宮内省の正式出張辞令を県庁から受けていたため、前日に牧之原を発ち、その日の夕方には伝馬町の旅籠に投宿し、待機していた。

四日は、あいにく雨であった。午前八時の拝謁に備えて二人とも早朝から紋付、袴に威儀を正し、緊張した面持ちで、謁見を待っている。鉄舟が二人を御座所に案内した。景昭は、まだ丁髷を結っている。

「面おもてを上げるように」

岩倉具視が平伏している景昭と高重に声をかけた。岩倉が天皇の御前で、奉書を読み上げる。その奉書が、岩倉から鉄舟を通じて二人に渡され、儀式は終わった。鉄舟に導かれて御座所を下がると、そこに大迫県令が控えていて二人に祝いの言葉を述べた。

奉書には、「牧之原の未開墾地を同志と共に開墾に励んでいる功績を称え、千円下賜する」と岩倉右大臣名で記されている。

謁見を終え二人が、伝馬町の宿でくつろいでいるその時、鉄舟が宿を訪れた。

「本日の謁見は、つつがなく終了した。これで牧之原の幕臣たちも、これまでの苦労が報われることになるう」

「誠にかたじけない。貴公と勝さんには一方ならぬお世話になった。牧之原にいる旧幕臣たちにも早速報告し、この喜びを分かち合いたい」

景昭は、そう言つて鉄舟と高重の手を固く握り締めた。三人はお互いに手を取り合つて感涙に咽び、しばらく言葉を発することができなかつた。

天朝に弓引くものとしての汚名は完全に消え、剣を鍬に代えて荒地を開墾したその功績が、正式に認められたのである。よほど嬉しかったに違いない。

宿の外では、鈴虫の音が一段と高くなつた。その声も二人には祝い歌のように心地よく聞こえた。

明治天皇との謁見の感激を少しでも早く牧之原の同志に伝えようと、景昭と高重は、道を急いだ。大井川を越え、牧之原台地に差し掛かつた。

高重は、台地を見上げた。すると、これまでの苦闘が蘇り、熱い思いがこみ上げて来て、そつと目頭を押さえた。

入植したばかりの頃、付近の百姓を雇つて鍬の使い方を習つた。一人の武士が地面に鍬を打ち込んだ。鍬が抜けない。力任せに鍬を引き抜いたその武士は、鍬を持ったまま尻餅をついて仰向

けに倒れた。武士の顔は、屈辱を隠そうとする苦笑いでゆがんでいた。

冬、綿入れの着物が買えないで寒さに震えて過ごした入植者もいた。

紋付に袴をつけ、その袴の腿立ちを取って荒地に入る者、稽古着に袴をつけて鋤を振るう者、陣笠を被って小刀を腰に差したまま開墾する者、さまざまな風体の武士たちが汗を流した。

一方、家にいる妻女たちは、慣れない生活に戸惑うばかりであった。

初めての茶摘みに振袖姿で茶園に出た女性もいた。

余談ではあるが、手甲、脚半、襷、前掛けが茶摘みの時に用いられるようになったのは、この時の衣装から着想を得たものである。近所の茶農家の着衣を真似て、入植士族の妻女たちが体裁よく改良を加えた。今日では、茶摘み女の制服のように、何処の茶畑でもそのあでやかな姿が見られる。

開墾も茶の栽培も開墾方士族が手掛けた。

だが、それだけでは開墾は進まない。近所の百姓を賃雇いして製茶場で働かせたり、開墾を請け負わせたりした。

(よくここまで耐えて来た。道半ばで脱落した者もいた。さぞかし口惜しかったであろう)

高重は、牧之原を去って行った家族を思い浮かべた。

開墾当初、家族併せて千人近い武士たちが牧之原に入植した。だが、廃藩置県が行われてから

は、藩からの給付金もなくなり、この土地を出て行く者も少なくなかった。

給付金のなくなった開墾方士族たちの多くは、現金支出を抑えるため、陸稻、大豆、小豆、ソバ、甘藷、大根などを茶木の間に植え、食糧を確保した。なかには茶畑を売り、牧之原台地の下の水田を買って米の自給を図った入植者もいた。

高重の家でも一部の土地を売り水田を購入している。

明治二年の入植当時、二百四十戸あった開墾方家族が、明治十一年のこの年には、二百十四戸に減っている。この間途中で相当の入れ替えがあった。開墾当初から一貫してこの土地に残った開墾方士族は、百戸程度になってしまった。

そんな中であって、高重の入植した岡田原は、団結が固く、退去した家族は少なかった。二十三戸の入植者のうち離脱した家族は、わずか一割にしかならない。

ちなみに、景昭以下、谷口原に入植した組は、二十一家族のうち、三割近くが牧之原を離れている。

自分の土地を近所の百姓に委託開拓させる開墾方士族もいた。

下賜された開拓地を百姓に拓かせ、七年程度、無償でその百姓に貸与する。以後は、小作料を徴収し、その百姓に耕作させる。

労働力不足に対しては、こうした苦肉の策もとられていたのである。

明治十五年を過ぎると茶の価格が低下した。

牧之原開墾方士族の生活を圧迫して、離農が相次いだ。明治三十年には、六十余戸、昭和五年には、十六戸と減少している。さらに、高度経済成長の名のもとに都会化が進んだ昭和三十三年には、十戸、昭和四十八年には、農業を続ける家は、七戸に減少してしまった。

開拓方士族の家族も減少した。だが、牧之原全体の家族が、減少したわけではない。明治から大正にかけて士族の土地を購入して移り住む者も多く、全体の生産力は向上している。

平成の今日、牧之原は、日本で一、二を争う茶の生産量を誇っているのである。

(二) 分裂の危機

廃藩置県によって家禄を失った士族たちへの救済措置として、明治六年頃から、全国の士族に対して、家禄奉還金が支給された。

明治八年、この待望の奉環金が牧之原士族にも支給されることになった。

景昭は、その金の使い道について、開墾方士族全員に諮った。その結果、開墾方士族への家禄奉還金は、開拓資金として一括管理し、必要に応じて貸し出すということが決まった。

また、その資金の運用も検討され、運用機関の設立も決まった。苟美館こうみかんと名付けられ、いわば信用金庫のような機関を立ち上げたのである。

十二人の運営委員、頭取及び二名の取締りが選任された。事務責任者には、牧之原士族の中か

ら中山忠敬、森川義仲。助勤に成瀬春久が選ばれた。

運営次第でうまく行くはずであった。

ところが、貸し倒れが出る、使い込みが発覚するといった不祥事が続出した。明治十一年八月の時点で、資本金五万七千七百円の内一万七、八千円が消失してしまったのである。

この金の運用当事者は、中條景昭の関係する谷口原の入植者たちで占められていた。大草高重ゆかりの岡田原の入植者たちは、経営の実態を不祥事の発覚するまで知らされていなかったのである。

岡田原の入植者は、矢口原側の管理責任を厳しく追及した。

「会計が杜撰ではないか。経理を明らかにして、経営の実態を説明せよ。苟美館を解散し、残り資金をそれぞれに分配せよ」

頭取である景昭の責任を追及する声が高まって来た。

景昭は、剣の達人ではあるが、経理には疎い。事務取扱の連中を全面的に信用し、任せていたため、不祥事に気付かなかつたのだ。

入植者たちは、折角下賜された奉還金をうやむやにされてはたまらない。特に岡田原の入植者は、何も知らされないうちに、自分たちの拠出した奉還金が目減りしたことに納得が行かなかつた。

高重は、これまでの景昭との信頼関係もあって、岡田原の強硬派の意見を宥めにかかった。

その矢先、直接金銭出納に携わっていた人物が、妻を連れて二千円持ち逃げしてしまった。それを知った跡取りの倅夫婦が、責任を感じて首を括り、死んでしまった。両親の罪を一身に背負って命を断ってしまったのだ。

遺書には、両親の不祥事を詫び、自分の土地は、牧之原全体のものとして使って欲しいとあった。

この倅夫婦は、景昭が目を掛けていた人物であったので、問題がますますこじれた。高重が、慰撫するだけでは収まりがつかなくなり、責任が景昭のところ集中したのである。

そんな時、救いの神が現れた。伊佐新次郎である。景昭に代わって、高重への弁明を買って出たのだ。

伊佐は、最初の茶の収穫の祝いの席に、景昭が連れて来た人物で、そのまま牧之原に居を構え、書や漢学を教えていた。

伊佐は、高重のもとを訪れた。手土産に酒樽を運ばせている。高重を始めとする岡田原の面々と腹を割って話しをするつもりで来たのである。

高重は、景昭とは友情を超えた信頼関係で結ばれている。彼は、牧之原の開墾士族にとって、最も団結の必要な時に、このような金銭上の問題で、亀裂の入るのを避けたかった。伊佐の来訪は、その意味で正に渡りに舟であったのだ。

高重は、伊佐が来訪したことを知らせ、岡田原の入植者のうち、有力者たちを自宅に集めた。六十八歳になっていた伊佐は、洒脱で常識に富み、牧之原の相談役のような存在となっている。入植者たちのギクシヤクした関係を解きほぐすにはうってつけの人物であった。

「岡田原のご一同、今宵は、中條さんの真意を伝えるに参った。中條さんに私心はまったくくない。ましてや家禄奉還金を着服しようなどという気持ちには、毛頭なかったのだ。ただ、苟美館の経営に事務方を信頼し過ぎ、任せきりにしてしまったのは、失敗であった。また、公金持ち逃げ事件についても対応が遅れてしまったことを中條さんは、深く反省している。どうか精鋭隊以来の功績と牧之原に来てからの指導力を評価し、責任論は後回しにして善後策を話し合って欲しい」

伊佐は、景昭を弁明し、岡田原の入植者に苟美館の今後について率直な意見を求めた。

その結果、解散し、残金は出資に応じて割り戻すという意見が多数を占めた。伊佐も高重も止むを得ないと判断し、景昭にその旨進言した。

景昭は、勝海舟と山岡鉄舟にこの事件の顛末を知らせ、牧之原の実情を東京の二人に説明するよう伊佐に頼んだ。

伊佐の話聞いた海舟と鉄舟は、放置しておけば深刻な事態に陥ると察知し、早速対策を講じている。牧之原の開墾事業は旧幕臣たちの意地と心意気を示す大事業である。それが内部崩壊のため、挫折するようなことにならば、それを推進した徳川家重臣たちの威信にも関わりかねない。海舟も鉄舟も推進派の一人として大きな責任を感じた。

二人は、内務卿の大久保利通に相談した。大久保の力を借りて資金を調達しようとしたのである。

大久保は、天皇の御内帑金おないどきんの中から二万円下賜されるよう取り計らった。

景昭は、胸を撫で下ろした。二万円のうち、静岡県庁への借金一万円を返済し、残りの一万円を苟美館の残金と合わせ、全員に分配することにしたのである。

海舟と鉄舟は、さらに牧之原への「産業奨励金」として、三千円政府から拠出させた。この拠出金は、茶の事業だけでは、経営が成り立たない場合の他の事業への投資資金である。

「この金を使って他の産業を興す努力をさせたい」

海舟からの添書があった。

こうして、苟美館事件は、御内帑金によって大事にいたらずに決着を見たのである。

だが、入植者たちの生活は一向に楽にならなかった。飲料への世界の趣向が、大きく変わったのだ。米国や欧州は、コーヒー。英国、カナダ、豪州など英連邦は、紅茶へと変化し、緑茶の需要が激減したのだ。

茶の輸出に限界を感じた海舟は、牧之原の士族に、さらに新しい事業を興す資金にと千円を拠出し、入植者の離散を防ごうと努力した。おりしも牧之原の近くの相良から石油が湧出し、その開発への夢が膨らんできている時であった。

(三三) 石油に賭ける夢

牧之原に石油の鉱脈があるとの報せが、勝海舟より開墾士族にもたらされた。明治十二年二月のことである。

高重は、早速谷口原の景昭を訪ね、その開発について相談した。

「この牧之原のすぐ南の相良から臭水くそうずが出ています。牧之原一帯でも出るのではなからうか。勝さんも有望であると報せてきている。お茶もこのところ売れ行きがよくない。勝さんの勧めに従って臭水を取り出す事業を興してみたいがどうだろうか」

「それもよからう。牧之原は、苟美館のことで入植者の心が離れかけている。生活も苦しい。臭水の事業で生活が楽になり、人心を取り戻すことが出来れば結構なことである。やってみよう」
景昭は、高重の発案に賛同した。苟美館事件の失敗を取り戻し、この事業の成功によって、人心の掌握を図りたいと考えたのである。

海舟からの情報によって、相良（現在は牧之原市の一部）のすぐ隣にある牧之原からも石油が出るかと期待した高重は、同志から資金を集め、試掘してみた。牧之原の坂部村、舟木村、坂本村も掘って見たが、思惑通りには行かなかった。

資金が枯渇し、三千円の当初拠出金にも、手を付けてしまった。

谷口原の試掘の際に出た臭水を集め、高重は、海舟を訪ねた。同席した榎本武揚を交え相談した結果、これ以上資金を投入し、失敗すれば茶の事業にも悪影響をもたらすとの結論に達し、中

止となった。

もともと、相良での石油を発見したのは、旧幕臣村上正局まさちかである。

村上は、明治五年海老江村（相良町大江）の戸長富田伝吾郎の家に奇寓していた。その時、近郷で臭水が出ると聞いた。その現場に行つて火を付けたところ一面が臭気と黒煙に包まれた。その結果を浜松県に報告し、調査官の派遣を依頼した。明治五年当時は、静岡県とは別に浜松県があり、相良は浜松県の一部であった。

ところが、現場に來た調査官は、松根油と判断したのである。

その判断に満足しなかつた村上は、その液体を酒徳利に入れて静岡県庁を訪ねた。当時静岡県庁には、クラークという技師がいた。彼は、米国の石油と同質のものだと判断した。

村上は、早速地主から借地許可を受け、掘削に取りかかった。その情報を聞きつけて石坂周造が相良にやつて來たのである。

「臭水に間違いない。これは職のない幕臣たちの救済事業となる」

村上は、当初、自分たちだけで事業を興そうとした。だが、資金がない。

「機械を入れて、大規模な掘削をしない限り、発展は望めない」

石坂の説得に応じ、村上は、共同で採掘事業を興すことに同意した。

こうして、明治六年十月、日本で最初の機械掘の井戸が完成したのである。

石坂周造は、天保三年信濃の国水内郡桑名川村（現長野県飯山市）に生まれ、幼名を渡辺源蔵と言った。源蔵は、江戸に出て、町医者立川宗達の弟子となる。

その後、立川の師である幕府医師石坂宗哲の養子となり、名前を石坂周造と改めた。

周造は、当初石坂家を継いで、町医者をしていた。が、石坂家に長男宗之助が生まれると養子である彼は、医師を辞め、心機一転、動乱の時代に身を投じ、尊攘運動にのめりこんだ。

そこで清河八郎、山岡鉄舟、高橋泥舟などと知り合ったのである。

攘夷運動に身を投じ、幾度か入退牢を繰り返しているうちに、幕府は倒壊し、明治の世となっていた。

明治三年、周造は、山岡鉄舟の妻英子の妹桂子と結婚した。英子、桂子とも高橋泥舟の実妹であることから鉄舟、泥舟と義兄弟の関係となったのである。

周造は、後に長男の宗之助を山岡家の入婿とした。このことから山岡家との繋がりが、より深まった。

石油との出会いは、偶然のことであった。

捕鯨事業に目つけていたある日、長野から石炭油が持ち込まれた。この石炭油は、将来日本にとってきわめて重要であることを友人の宣教師タムソンから聞いた周造は、明治四年、長野石炭油会社を設立して、同地で開発の準備を始めた。

しかし、翌年の明治五年、相良での石油発見のニュースを聞きつけ、相良にも関心を持った。米国から三台の採掘機を購入した周造は、明治六年九月、長野で試掘を試みたが、失敗に終わっている。

だが、彼は、諦めなかった。かねて目をつけていた相良に機械を移動し、試掘したところ、一日に三石（五百四十リットル）の原油が湧き出たのだ。

こうして相良は、国内初の機械掘による石油の生産が行われることになったのである。この年、周造は、長男の宗之助を米国に留学させ、本格的な石油事業に乗り出そうとした。ところが、経営は火の車である。

明治七年から八年にかけて周造は、経営の建て直しを図るべく、米国に出張して、さらに採掘機二台を購入した。だが、その機械が威力を発揮する前に経営が悪化し、油田も人手に渡ってしまった。

周造は、帰国後、事業の再開を図ったが、明治十年には、長野製油所が焼失するという不幸な事件が起こった。このため、社長を辞任する破目になり、失意のどん底にあった。

そんな時一人の救世主が現れた。

時の右大臣岩倉具視である。

岩倉は、周造に三万円の資金を提供した。周造は、この資金をもとに東京を引き払い、相良に移住。長野石炭油会社の共同経営者である村上正局たちの協力の下に人手に渡った油田を取り

戻し、石油事業に邁進した。

米国から輸入していた採掘機を菅ヶ谷に据付けた。その工事には清水次郎長も一役買っていたようだ。

明治十四年五月、山岡鉄舟と高橋泥舟が、相良に来て一カ月周造と共に過ごした。周造の事業は、全盛期を迎えていた頃である。

周造は、明治二十五年相良を去っている。経営不振による責任を取ったのだ。すでに彼は、六十一歳になっていた。

盟友村上正局と長男宗之助をこの地で喪った周造は、その碑を残して失意のうちに相良を後にしたのである。

周造の事業にかける情熱は、相良を去った後も残っていた。新潟県の西山油田の開発に当たったのである。最後の人生を賭けた努力の甲斐あって、明治三十三年鎌田三号井が湧出して大成功を収めた。

だが、彼は、すでに六十八歳となっていた。周造は、その権利を地元の人たちに分け与え、石油業から手を引き穏やかな晩年を過ごしている。明治三十六年五月下谷西黒門町（台東区上野一丁目）の自宅で、七二年の波乱に富んだ人生の幕を閉じた。正七位を贈られ、谷中全生庵に義兄で盟友の山岡鉄舟の墓と共に眠っている。

勝海舟や大草高重が注目した明治十二年、相良には、二百四十余の手掘り井戸があり、油井小屋が林立していた。海舟や高重が近隣の牧之原でも石油の鉱脈があると考えたのも無理からぬことであつた。

遠州相良の地は、石油産地として全国にも知られ、町内には芸妓二十人余を数え、鉱山関係者で大繁盛を極めたと伝えられている。

明治十一年には、大隈重信も相良を視察し、増産を奨励している。明治十七年頃が最盛期で年間七百二十一、六キロリットルの生産量を誇っていた。

だが、昭和三十年に石油は枯渇した。

相良の油田は、その役割を終え、静かに眠っている。石坂周造、石坂の長男宗之助、村上正局の三人の碑が仲良く山裾に並んで、記憶のかなたに消え去ろうとする繁栄の跡をじっと見詰めて立っている。

十五．入植幕臣たちの明治維新

(一) 栄誉の天覧流鏑馬やぶさめ

西南戦争終結後十年が経った。

明治政府による一連の改革が、新時代の到来を告げ、日本は、西欧近代国家への道を歩み始め

た。

新政権による統治がようやく定着してきた明治二十年十月三十一日、明治天皇が、千駄ヶ谷の徳川家達邸いえさとしに行幸され、流鏑馬を天覧されることになった。

騎射には、流鏑馬の宗家である小笠原清務が門人百人余を従えて参加。牧之原からは、大草高重、小島勝直、山名時富の三人が出場した。

実技披露は、東西百五十間、南北二十六間の邸内馬場で行われた。

玄関には、国旗が掲げられている。場内は、紫に白く葵の紋を染め抜いた幔幕が張られ、正面に玉座が、設けられている。

騎射には、十六組が参加。牧之原からの出場は、高重、勝直、時富の三騎立である。

幕末最後の流鏑馬から二十五年が経っている。牧之原の三人は、鍛錬は積んでいるものの、いささか不安であった。

だが、鎌倉時代からの伝統の装束をまとい、騎乗すると、その不安は消えた。きらびやかな装束の武者ぶりは、周囲の賞讃を浴び、どよめきの声が上がった。

牧之原の三人は、互いに健闘を誓い合い、騎射に臨んだ。全員三箭とも見事に的を射た。技倆は、いささかも衰えていない。茶園を造成しながら、武士の誇りを失っていないかった。日頃の鍛錬が見事に功を奏したのである。

高重にとって、この日の快挙は、生涯忘れ得ぬものとなった。

鎌倉以来、騎射は、武士の最も大切な武技であった。いわば武士の表芸であったのだ。だが、実戦のない江戸時代では、狩や儀礼に用いられるだけで、次第に様式化している。

ところが、この日の騎射は違った。高重の実戦さながらに繰り出す矢は、うなりを生じ、的を射抜き倒して行く。それはあたかも幕臣の誇りと意地が、矢に込められているような迫力であった。

明治天皇は、その迫真の演技に感動し、侍従の山岡鉄舟にご下問された。

「東の宮（後の大正天皇）にも見せてやりたい。宮中の馬場で再現してもらえまいか」

「お上からのそのお言葉は、弓箭の道に励む者にとって、この上ない名誉であると心得ます。早速に手配いたします」

鉄舟は、近代化の波に洗われ、ともすれば忘れがちな武士の魂を取り戻す良い機会であると思っただ。

それだけではない。流鏑馬を通じて、朝敵とされた旧幕臣たちの名誉を回復し、そのことを世間に広く知らしめようとしたのである。

流鏑馬の宮中披露は、十一月五日と決まった。

まず、小笠原宗家が代々受け継いできた「古式の流鏑馬」が披露された。次いで牧之原の高重、勝直、時富の三人衆による模範演技である。

高重は、先日の家達邸での演技をさらに上回る連続五箭の射技「五技壺簾」の技を披露し、見事に五本とも的を射落とした。

後日、出色の出来であった高重には、明治天皇から「重藤弓」の所持が勅許されている。

勅許に当っては、山岡鉄舟、勝海舟の尽力が大きかった。二人は、「重藤弓」が、高重に勅許されることは、天皇及び明治政府が、旧幕臣を朝敵ではなく、朝臣として認めたとを意味すると考えたからである。

「重藤弓」は、本来天皇が、武家の棟梁である將軍家に与え、將軍家が、所持するものである。だが、実際には、將軍家は、その弓を保持するに相応しい直参の旗本に預けるのが、慣わしとなっていた。それには、朝廷の許しを得なければならぬ。言い換えれば「重藤弓」は、朝廷が、幕府に統治権をゆだねる証として使われていたのである。従って、將軍職継承には、欠かせないものであった。

徳川慶喜が、大政奉還以来、「重藤弓」は、明治天皇のもとに置かれていた。

（征夷大將軍のいなくなったこの時代、「重藤弓」の持つ意味は、変わらなければならない。技倆の最も優れた弓の名人に、直接与えるべきである）

そう考えた明治天皇は、鉄舟や海舟の意向を受け、高重に「重藤弓」を授与することにした。こうして高重は、明治天皇から「重藤弓」の所持を許され、弓術の最高位を得たのである。

これを契機に、朝廷及び明治政府の徳川家に対するわだかまりは氷解した。慶喜は、翌年の明

治二十一年、従一位に昇進、参内を許されるようになったのである。

高重が、天覧流鏑馬に見事な腕前を發揮したという報道は、全国にあまねく知れ渡った。

精銳隊以来の盟友関口隆吉は、この報に接し、高重に賀状を送っている。隆吉は、当時静岡県知事の職にあつた。この時彼は、折悪しく体に腫れ物ができていて上京することができなかった。その賀状に、次のような内容の祝意を託している。

「快方に向かつてはいるが、上京の機会を失い残念である。過日家達邸で行われた流鏑馬を新聞紙上で知り、喜ばしい限りである。近日中に祝杯を挙げたく思っている。いずれ、帰郷されると思うが、帰路静岡に一泊ともなれば、大変喜ばしい」と。

高重は、帰路立ち寄ることは出来なかった。が、その後牧之原茶園発展の協力依頼のため、時折静岡県庁の知事室を訪ねている。

(二) 相次ぐ盟友の死

山岡鉄舟が、他界した。明治二十一年七月九日、座禅のままの大往生であった。享年五十三歳。胃穿孔による腹膜炎併発が直接の死因であった。

鉄舟の死は、中條景昭、大草高重を始め牧之原の入植幕臣たちに大きな衝撃を与えた。

ことに、高重は、北辰一刀流千葉道場で鉄舟と知り合ってから、肝胆相照らす仲であった。幕府内の尊王攘夷派として共に手を携え、幕末の動乱を生き抜いて来た。

大政奉還後は、十五代将軍徳川慶喜を警護し、江戸城無血開城を果たした。慶喜の駿府蟄居後、高重は、牧之原開墾に携わり、鉄舟は、明治天皇の侍従となって、共に徳川家存続を陰で支えてきたのである。

盟友を喪った悲しみで、高重は、しばらくは何もする気が起こらなかった。

（牧之原開墾に当って、山岡さんには、本当にお世話になった。また、開墾費用の捻出については、ずいぶんご苦勞をお掛けした）

鉄舟は、高重より年下である。だが、背が高く、筋骨逞しい鉄舟は、冷静沈着で、高重には、いつも頼り甲斐のある存在であった。

（牧之原のことを真剣に考え、親身になって新政府に苦境を訴えてくれるのは、勝さんだけになってしまった）

高重は、鉄舟が、牧之原の開墾を進める上で、精神的にも経済的にも、如何に大きな支えとなっていたかを改めて知った。

近くの蝉が、どこか遠くで鳴いているように聞こえる。その単調な鳴き声が、しやうみやう声明のように耳に響く。空しさがこみ上げて来た。焼け付くような太陽が、茶園を照らし、きらきらと光っている。高重は、ただぼんやりとその茶園を眺め、長い時を過ごした。

鉄舟を喪って一年もしないうちに高重は、静岡県知事関口隆吉の死と直面しなければならな

かった。

明治二十二年四月十一日、高重は、静岡県庁の知事室を訪ねた。関口知事は、書類の整理に追われ、落着いて高重と面談する時間がない。陽も傾きかけている。

「これから招魂祭出席のため、名古屋に出張しなければならない。大草さんも一緒にどうですか」
招魂祭とは、明治維新前後に殉難した人々を祀る祭礼のことである。

愛知県では、名古屋の招魂社で行う招魂祭に近県の知事を招待していた。隆吉も静岡県知事として招待されていたのだ。招魂祭は、高重にとってもゆかりの深い祭礼であったため、すぐに同行を決意した。

隆吉と高重は、予定の列車に乗り遅れてしまった。そこで二人は、たまたま静岡駅を通る土木工事資材運搬用の臨時貨物列車に乗って名古屋に向かった。

その下り貨物列車が、安部川の鉄橋を渡って用宗まで来た時、前方から静岡に向かって来る普通列車と正面衝突してしまったのである。ブレーキを掛けたが間に合わなかった。

隆吉は、貨車の後方の壁に寄りかかって座っていた。

衝撃は、突然襲った。隆吉は、前に放り出され転倒した。その時、運悪く後方車両の鉄材が荷崩れして、隆吉たちの車両に倒れ掛かった。隆吉は、その下敷きとなり、左の踝に鉄片が刺さって、重傷を負った。

「関口さん大丈夫ですか」

高重は、自分に折り重なるようにして倒れてきた隆吉の上のしかかっている鉄材を、渾身の力で跳ね除け、血まみれになっている足を鉄材の間から引き出した。助けを呼ぼうとしたが、人里から離れた田圃の中にあるため、救助隊はなかなか来ない。

「大草さん。怪我は」

「関口さんが身をもって鉄材を防いでくれたお陰で、たいしたことはなかった」

「意識的にそうしたわけではありません。たまたまそうなたただけです。気にしないでください」

隆吉は、高重が余分な気を使わないように、痛みをこらえながら明るいう声で言った。救助隊が到着したのは、二時間ほど経った後で、すでに陽は沈み、あたりは闇に包まれていた。

隆吉は、担架で私邸に運ばれた。出血多量で重傷である。

列車事故による隆吉の怪我は、全国に報じられ、見舞い客は、引きもきらなかつた。

四月十七日には、徳川慶喜が病室を訪れた。慶喜は、徳川家存続に尽くした功績を謝し、牧之原茶園への支援に対する感謝の気持ちを述べ、併せて県知事としての労をねぎらった。見舞金百円を枕元に置いて行つたと伝えられている。

隆吉は、傷が原因で破傷風に罹っていた。

慶喜が見舞いに来た日の夜、隆吉は、病室に妻の静子、養継嗣の隆正夫妻、次男の出ひだりを呼んで、後事を託した後、親族たちを入室させている。

明治二十二年五月十七日未明、隆吉の容態は急変した。一ヶ月余の闘病生活で、体はやせ衰え、

疲れきっていた。意識も混濁している。幕末から明治にかけての動乱の中で、倒れた人たちの顔が浮かんできたのか、名前を呼んでいる。眼もかすんで見えないようだ。

その日の夜、隆吉は、永い眠りに着いた。享年五十四歳、波乱に富んだ一生であった。

関口隆吉は、天保七年（一八三六）幕府与力関口隆船の次男として本所相生町に生まれた。父の隆船は、御前崎佐倉の池宮神社宮司の子である。長じて関口家の養子となり、養家を継いでいる。

隆吉は、幼少の頃から、武術、儒学、兵法を学び、嘉永三年（一八五〇）十五歳で元服、翌年お持弓与力見習となった。

関口家は、戦国大名今川氏の一族で、徳川家康の正室築山御前は、関口氏広と今川義元の妹との間に生まれている。

慶応三年、隆吉は、中條景昭の下で市中取締りを命じられた。翌四年二月慶喜が、江戸城を去り、上野寛永寺の大慈院に謹慎すると隆吉は、中條景昭、大草高重の率いる一隊と共に慶喜の護衛に当った。後に景昭、高重、松岡萬、成瀬春久等と共に精鋭隊を結成、高重と共に頭並となり、御奉行支配調役兼務を命じられた。

徳川家駿府移封後、隆吉は、牧之原開拓を推進する一人となった。

ところが、優れた行政官を欠く明治政府は、隆吉を必要とした。隆吉の人格、識見を高く評価

し、新政府の要職を歴任させ、静岡県知事としたのである。

高重は、前年の明治二十一年七月に盟友山岡鉄舟と徳川家重臣大久保一翁を喪った。

その上、関口隆吉の死である。喪失感にとらわれ、空しい時が流れて行く。しかし、いつまでも無気力に過ごすわけには行かない。

勝海舟から、牧之原に在住する同志の様子や離散した家族の詳細を知らせてほしいとの書簡が届いたのだ。それに取り掛からなければならぬ。

高重は、服部一徳にその調査を依頼し、報告書を海舟に送った。海舟は、幕臣でありながら、薩長と一戦も交えず、ひたすら恭順する慶喜の護衛を務めた徳川の遺臣の牧之原開墾の労苦を後世に伝えたかったに違いない。

後に、この書簡の作成に協力した入植者から、開拓記念碑を建てる運動が盛り上がった。

その碑文の文案は、文才の誉れ高い服部一徳が担当することになった。

一徳は、禄高百五十表の小普請役の家に生まれた。高重の呼びかけで、精鋭隊に入り、後に、高重と共に、牧之原に入植している。漢学の素養が高く、筆も立つことから、士族一同の入植の事情や入植後のことなど、数多くの記録を残している。高重の良き相談相手で、高重の長子勝重は、一徳の息女いしを妻に迎えている。勝重は、高重の実家和田家の継嗣となって和田の姓を名乗っている。

一徳は、土地争いやさまざまな揉め事を穏便に収めるなど近隣の人たちにも親しまれていた。碑文は、贅正善や内田忠正の意向を入れ、八百字にも及ぶ文案となった。高重は、長過ぎるとして、大幅に削るよう指示した。これを受け、一徳は、高重の校閲のもとに二百字に取りまとめた。

これに海舟が揮毫した。

ところが、何か特別な事情があったのか、高重没後、記念碑建立が中止され、その文案は、長く一徳の机の中に眠っていた。

その碑文は、昭和四十年になってやっと目の目を見ることとなった。牧之原開拓百周年を記念して「牧之原開拓遺功の碑」が建立されることになったのである。海舟の揮毫した書も改めて山口正氏が、石碑に刻んでいる。牧之原開拓の淵源を述べ、開拓の苦労を称えたこの碑文は、牧之原の丘に現存し、開拓の歴史を語っている。

一徳は、明治三十二年十一月二十八日永眠した。墓は、松原山医王寺境内の墓地にある。その墓は、高重の娘の嫁ぎ先である和田家の末裔によって再建されたものである。

(三三) 茶園の自立

関口隆吉が逝った翌年の明治二十三年には、松岡萬つむぎがこの世を去った。享年五十二歳であった。

萬は、隆吉と並んで、牧之原開墾と茶園殖産の陰の立役者であった。天保九年（一八三八）江戸小石川日向に生まれた。その生家は、大草高重の実家和田家の隣である。高重は、萬の三歳上で二人は幼馴染であった。

松岡家は、旗本で、鷹匠組頭を務める家柄である。

萬は、幼少の頃から、幕府講武所で中條景昭から剣術と柔術を学び、家督相続後は、「市中見回り組」に属していた。五尺八寸余の長身である。幕府の中では、尊王攘夷派に属し、攘夷十七人組の一人であった。

江戸城明け渡しの際には、精銳隊に属し、駿府に来てから新番組と名を改めた後も、ずっと景昭、高重と行動を共にしてきた。開墾方として牧之原入植が決まった時は、景昭が頭取で、萬は、高重と同格の開墾方頭取並であった。

しかし、萬は、静岡藩庁の要請により、開墾方頭取並の資格を持ったまま幸浦（現浜松市南区福田町）の製塩方士族の頭取を務めている。その後、静岡県庁に在籍していたが、明治八年、東京に転居し、警視庁一等大警視となった。

萬は、静岡藩の役人当時、山林の所有権争いと水利権争いの二つの係争を解決したことで、住民から感謝され、生祠として祀られている。その一つは、藤枝市岡部町廻沢（めぐりさわ）の飛龍神社の境内にある松岡神社で、もう一つは、磐田市南部大池の郷社神社の境内にある池主神社である。

藤枝の松岡神社は、岡部宿と廻沢集落村民の山林の所有権を巡る争いを、萬が仲介し、解決した実績を称えて、関係者が建てたものである。一方、磐田の池主神社は、大池の干拓を進める静岡藩庁への住民の訴えを当時水利路程掛であった萬が取り上げ、干拓を中止したことを住民が感謝して、建てたものである。

萬の死によって、高重は、幼き日の江戸の面影が、また一つ消えて行くような思いに駆られた。

（江戸がますます遠のく。人も屋敷も町並みも、すっかり変って行く。最早それがしには、帰る所はない）

高重は、牧之原が、安住の地であり、故郷になったとの思いを強くした。

萬と高重は、精鋭隊では、中條景昭配下の双壁として、お互いに競い合い、幕末の動乱を生き抜いてきた。牧之原でも心を合わせてこの荒地を緑の茶畑にしようと誓い合った。だが、萬は、官吏の道を歩むことになった。それでも、高重にとって萬が、最後まで徳川家を護る誠忠の士であることに変りはなかった。

明治二十四年三月、桜の蕾が膨らみかけた頃、伊佐新次郎がこの世を去った。八十二歳の高齢で眠るような最後であった。

伊佐が牧之原にやって来たのは、六十七歳の時である。彼は、高齢のため、開墾の仕事には就かなかつた。だが、入植者たちの融和を図り、子弟の教育を援け、牧之原の教養文化向上にはな

くつてはならない人物となった。

苟美館こうみかん事件では、「館員の使い込みは、中條景昭頭取の監督不行届きにある」とする岡田原大草組の追及をかわし、一触即発の危機を今井信郎と共に救っている。

伊佐と今井は、上京し、勝海舟と山岡鉄舟に打開策を相談した。海舟と鉄舟は、大久保利通に事情を訴え、天皇の御内帑金おないどぎんの中から二万円を下賜されることになり、その金を出資者に分配し事なきを得たのである。

それだけではない。岡田原の大草家で初めて茶の製品が出来た祝いに茶摘唄を即興で作詞したことも語り草となっている。

伊佐は、文化六年（一八五四）江戸湯島三番町で、直参旗本伊佐新左衛門の長子として生まれた。元服後十五歳で幕府勘定奉行配下となり、嘉永七年〜安政六年（一八五四〜一八五九）の五年間下田奉行所組頭を命じられている。その間ハリス領事と下田条約などの折衝に当った。

その後、江戸に戻り、具足奉行、御幕奉行、講武所組頭、海軍奉行並支配組頭などを歴任している。明治九年、中條景昭の勧めに応じて、谷口原に客分として移り住んだ。その後、東照宮に居を定めて、私塾を開き、旧幕臣の子弟だけでなく、近隣の農民にも漢籍や書を教えていた。

教養人でありながら洒脱な人柄が受け、景昭、高重の良き相談相手となっていたのである。

牧之原茶園を支援してくれていた山岡鉄舟、大久保一翁の相次ぐ逝去に加え、関口隆吉、松岡

萬、伊佐新次郎の他界は、中條景昭と大草高重に牧之原茶園存続の危機感を呼び起した。

二人は、開墾方旧幕臣の動揺を抑え、結束を図るため、各入植地の組頭を集めることにした。「おのおの方もすでにご承知のとおり、この牧之原開墾に当って常に後盾となってくれていた山岡さん、大久保さんが他界され、県知事の関口さんも一昨年 of 列車事故で不慮の死を遂げられた。その上、昨年は、松岡萬君まで喪った。これまで牧之原の茶園形成に尽力下さった方々で、勝さんを除いてことごとく旅立ってしまった。開墾を始めてからすでに二十年余になる。これからは、政府や県に支援を頼むわけにも行かない。おのおの方も、支援に頼ることなく、今後は、自力で、茶園を守り育てるようにして頂きたい」

景昭は、開墾方として入植した同志たちの日焼けした顔を前にして言った。

じつと目を閉じて景昭の話を聞いていた高重が、おもむろに口を開いた。

「今日お集まり頂いた方々は、いずれもこの地に骨を埋める覚悟であるとお見受けする。入植以来、苦節二十年、すでにこの牧之原の土となった方々も少なくない。それに、志し半ばにしてこの地を去った同志たちを加えると、今ここに踏み留まって茶園を続けている人より多いことになる。後盾となってくれた方々の大多数がすでに鬼籍に入られた。そうした厳しい状況下にある今こそこの牧之原開墾の真価が問われる時である。それには、残ったわれわれが、結束し、お互いに助け合って、この茶園を育てて行かなければならない。幸いにして同志は去っても立派な茶園は、残してくれている。今一度気を引き締めて茶園を買い取り、引き継いでくれた人たちと

も協力して、残りの人生を賭け、茶業の発展に尽くそうではないか」

高重は、盟友を喪った悲しみに押し潰されそうになる自分を鼓舞するように、強い口調で語った。

その約一年後、山名時富ときとみがこの世を去った。明治二十五年一月十三日、肌を突き刺すような寒風が牧之原の茶園に吹いていた。時富の死も入植旧幕臣にとって痛手であった。

時富は、天保四年（一八三三）三月、山名時敏ときとしの子として生まれた。母は大草高基（高重の父）の娘である。時敏は、流鏑馬の名手として知られていたが、四十九歳で死去。天保十二年（一八四〇）四月、時富は、九歳で跡目を相続した。天保十四年（一八四二）小普請諏訪若狭守支配に入った。文久三年（一八六三）十二月、一橋慶喜が大坂へ出立の折、講武所から同行。そのまま大坂警護となり、元治元年（一八六四）七月江戸に帰っている。

慶応三年（一八六七）大政奉還後、お役御免となる。だが、家達駿府移封後、御用人支配となり、伊佐新次郎や関口隆吉などと江戸城の残務整理に当たった。明治元年駿府藩勤番組、その後、相良藩勤番組となるが辞任した。

明治三年二月、開墾方となり、二町五反が与えられた。その後宅地として四反五畝が、大草割地より割譲されている。

明治二十年徳川家達邸にて天覧流鏑馬挙行の際には、大草高重、小島勝直と共に参加した。

時富は、明治三年、入植以来、高重と苦楽を共にし、入植者の多くが経営不振や後継者不足で牧之原を出て行く中で、最後まで踏み止まった。現在もその子孫が茶業を続けている。

互いに流鏑馬の名手として認め合い、入植以来、励まし助け合ってきた時富の死は、高重に計り知れない悲しみをもたらした。

葬儀に参列後、高重は、ぼんやりと庭を眺めていた。

裸木が風に揺れている。鶉ひよどりが一羽飛来し、その裸木に止まった。

高重は、幕末の動乱の中に生きた盟友の顔を思い浮かべ、しばらく瞑想に耽っていた。目を開けると鶉はすでにいない。ふとわれに返った高重は、中條景昭、落合正中、小田信樹、服部一徳など、今もなお、牧之原の地で、共に茶園を開いている同志のことに思い至った。

（せめてこの牧之原が日本一の茶処になるまでは、もう少し同志と共に生きなければなるまい）
気を取り直した高重は、手塩に掛けて育てた茶畑に出てみた。茶の喬木は、寒風の中にじっと耐え、緑を絶やさずに春を待っていた。

十六．茶園にかけた夢

（一）牧之原の土となれ

幕臣たちが牧之原に入植してから二十三年の歳月が流れた。雑木と雑草で覆われた台地に緑

の茶園が広がっている。茶の木には、かすかに新芽が覗いていた。

(今年もまた桜を見ることができた)

大草高重は、散り行く桜の花びらを、いとしむように眺めながら呟いた。

明治二十五年四月、彼岸も終わり、柔らかな春の日差しが岡田原に降り注いでいる。

だが、高重の体調は、すぐれなかった。変り易い春の気候の変化に、体がついて行けなくて、一昨日から床に伏せていた。

(風邪を引いたのかもしれない。いや、老いが気力を奪い、体の疲れを感じさせているのだろう)

高重は、気力を取り直し、体力を回復するための雉狩りを思い立ち、北隣に住む石井兼正に計画を打ち明けた。

兼正の長男石井一松は、高重の末娘まさの夫で、高重にとって石井家は、末娘の嫁ぎ先である。

「兼正殿、どうやら風邪も治ったようだ。快気祝いをかねて、心配してくれた皆と共に、雉狩をしようと思っている。われらの弓の腕も鈍っていないかどうか確かめる良い機会だ。については、貴公にその準備を頼みたい」

「分かりました。早速支度に取り掛かりましょう」

兼正は、騎射に自信のある入植士族たちに触れを出し、雉狩の準備を進めた。

石井兼正は、嘉永四年(一八五二)江戸牛込榎町四三番地、旗本山田孝道の嫡子として生まれ

た。男三人、女三人の六人兄弟である。嫡男であったが、旗本石井家の継嗣として入籍し、石井家を継いだ。

彼は、大草高重の内弟子として幕末から精鋭隊に加わった。水戸から駿府へと、高重と行動を共にし、明治二年七月、開墾方として牧之原に入植した。当初は、大草家に居候をしていたが、中條景昭、内藤種光の世話で、明治六年春、神谷久三郎の二女きよを娶り、世帯を持った。

嫡男、一松の誕生を期して大草家の北側に家を建て住んでいる。

「ところで、貴公にもう一つ頼みがある。服部一徳さんから、わしの孫の鉄次郎の節句祝いが届いた。その返礼の品を雉狩の知らせのついでに届けてもらいたい」

服部一徳は、高重の長子和田勝重（高重の生家和田家の養子となり、同家を継いだ）の妻いしの父親である。一徳も、精鋭隊以来、高重の同志であり、共に牧之原に入植している。

漢学の素養が高く、入植後も高重の良き相談相手となっていた。

「承知しました。必ずお届けします」

兼正は、高重の意向を受け、一徳の屋敷に向かった。

大井川の流れを眼下に見下ろしながら、雉狩が行われた。五和村の童子わっぱさわ沢辺りが獵場となった。雉を追い始めて数時間後、高重は、右手と右足に痺れを感じた。感覚がなくなり、座り込んだまま、動くことができない。声も出ない状態であった。

異変に気付いた人たちが駆け寄って、高重を抱き起こした。呼び笛を合図に、全員が集まった。

高重は、駕籠に乗せられ、岡田原の自宅に運び込まれた。

報せを聞いて、この地方の名医水野良介がすぐ駆けつけた。彼は、高重とは昵懇の間柄であった。

「脳溢血です。完治は困難と思われます。兆候は、見られませんでしたか」

水野医師の問いに家族は、下を向いたままである。が、しばらくして妻のうらが重い口を開いた。

「めったに床に伏せたことのない人が、風邪だと言って四、五日寝込んでいましたので不思議に思い（お疲れのご様子、大事ございませんか。水野先生に見て頂いたら如何ですか）と聞いてみましたところ（何のこれしきのこと。多分風邪であろう。心配には及ばぬ）と申しますので、先生に往診をお頼みしませんでした。でも、私の目には、いつもと違って、体に張りがなく、生気がないように思えました」

高重は、うらに心配を掛けまいとして元気を装っていたのである。

報せを聞いて、中條景昭が、すぐに駆けつけて来た。

「大草さん。しっかりしてくれ。貴公に倒れられたら、牧之原はどうなる。もう少しで、われわれの労苦が報われる。入植者全員が笑って暮らせる時が来ることは、貴公も分かっているように」

景昭は、そう言いながら、高重の手を強く握った。

水野医師は、安静を保つよう指示した。病状は、予断を許さない状況にある。そのことを家族を始め、集まった入植者たちに告げた。

「今夜が峠となりましょう。医者としては手を尽くしました。この上は、お集まりの皆さん全員で、快癒を祈ろうでは、ありませんか」

そう言い残して、水野医師は、自宅に戻った。

景昭は、集まった人びとに、呼びかけた。

「さあ、今となつては、大草さんの本復を祈るばかりじゃ。皆、八幡神社に集り、大草さんのために蠟燭を灯し、お百度を踏んで平癒を祈ろうではないか」

景昭の呼びかけに多くの入植者が、八幡神社に参集した。家族同伴の者もいる。社殿は、蠟燭の灯で明るく、境内には、松明が焚かれている。

入植者全員が、高重の平癒を祈った。その祈りが通じたのであろうか。倒れたまま眠り続けた高重が、翌朝目を覚ましたのである。言葉は、はっきりしなかったが、意識は、確かであった。

うらが、高重の耳元で、ゆっくり休むよう囁いた。

高重は、頷いて静かに目を閉じ、眠りに就いた。

しばらくした後、再び目を覚まし、枕元で見守る家族の顔を一人一人見詰め、喉の奥から絞り出すような声を発した。

「皆良く聞いてくれ。わが大草家は、未来永劫、たとえ乞食になろうとも、牧之原の土塊つちくれとなれ、これはわしの遺言じゃ。この遺言を子々孫々に伝えよ」

言葉は、はつきりと聞き取ることができない。だが、高重の意志は、家族に伝わった。その意志は、平成の今日まで、脈々と受け継がれている。大草家の現当主省吾氏もその意志を継ぎ、有力な茶園経営者の一人として牧之原の発展に貢献している。

高重は、近親者に看取られて、永遠の眠りに就いた。明治二十五年四月十日、散り急ぐ桜のよきな生涯であった。享年五十八歳。

前々年の明治二十三年、明治憲法が制定され、日本は立憲政治の道を歩み始めている。朝鮮における権益を巡って、清国との軋轢が生じ、やがて日清戦争へと突入する二年前の年であった。

高重逝去の翌々日、四月十二日未明。松原山医王寺にて、寛鳳和尚が、導師となつて、盛大に葬儀が営まれた。武家の葬儀は、陽のあるうちには、行わないという風習に従った。大草家は、神道の家柄であったため、戒名はない。高重は、岡田原が、一望できる西の高台に葬られた。

参列者は、夜明け前の暗い道を岡田原の西山へと登った。棺を土中に埋め、盛土をかけ葬儀を終えると、陽が登り始めた。眼下には、高重の造った茶園が、薄闇の中から、次第に姿を現して来た。東方には、真っ赤な富士が、夜明けを告げるように輝いている。

参列者は、思わず感嘆の声を上げ、この台地の素晴らしい景観に包まれて眠る高重の遺徳に、

思いを馳せた。

「大草先生は、この岡田原の西山の地からいつまでも牧之原を見守ってくれるに違いない。先生の墓がこの地にある限り、牧之原から茶園が消えることはないであろう」

参列者は、互いにそう語りつつ西山を下った。

景昭は、この牧之原開墾事業での高重の存在が、いかに大きかったか、改めて痛感した。まるで片腕をもぎ取られるような痛手である。この先、茶園をどのように守り育てて行くか思い悩んだ。

盛大な葬儀の後、参列者の間から、高重の遺徳を偲ぶ立派な墓を建てようとの動きが高まった。その墓石に刻む碑文を勝海舟に依頼することになった。石井兼正、速水行秀、和田勝重が使者に立ち、氷川町の海舟邸を訪れた。

依頼を受けた勝海舟は、即座に快諾した。

「惜しい男を喪った。かねてから栄達を望まず牧之原の土になると言っていたが本当にそうになってしまった。本望であったろうよ。ただ、惜しむらくは、もう少し長生きし、牧之原が、さらに発展する姿を見届けてもらいたかった」

《手馴れつる 玉の小琴の緒をたたむ 古りし調は聞く人もなし》

勝は、すらすらと筆を運び、物部安房と署名した。

現在、岡田原の墓地には、高重の墓が、江戸を向いて立っている。その傍らに妻女うらと家族

の墓石がある。参道の両側には、高重の子息男女七人とその家族、さらには、近親の開墾士族の墓が、高重を取り囲み並び立っている。墓石群は、木立の中にあつて、大草家十四代大草省吾氏によつて守られ、牧之原の歴史を刻んでいる。

(二) 大草高重の遺徳

大草高重は、弓術、劍術、などの武術の鍛錬の傍ら、書を読み、絵を描くことを好んだ。

絵は、達磨や布袋などの人物像が得意で豪放にして洒脱な画風は、多くの人に好まれ、乞われれば描き与えることもあつたという。

書は、とくに晩年によく書いた。最晩年の明治二十五年正月、地元の僧から書画を乞われ、すぐに書き与えている。僧は、大変喜び各地の寺で自慢げに話をした。高重逝去後は、遺墨を掲げ読経に務め、盂蘭盆会には、その書画を幻燈に写し出して、往時を偲んだ。

高重の外孫和田鉄次郎は、彼の言葉を深く胸に刻んで座右の銘としている。

「われ人に富を施すことあれば、これをすべからく忘れよ。人もしくは、われに恩あれば、必ず忘れべからず」という言葉である。

高重の他界後、心配された茶園も中條景昭以下、残留開墾方士族が努力を重ね、年を追うごとに拡大した。「牧之原茶」というブランドも全国に浸透し、茶の一大生産地として発展を遂げつつあつた。

大草高重の墓碑が完成した。その墓前で中條景昭は、精銳隊の結成以来、二人三脚で幕末動乱の時期を駆け抜けてきた盟友の死を悼み、手を合わせた。高重を喪った悲しみがこみ上げて来る。目を閉じると在りし日の高重の強い意志を感じさせる謹厳実直な、それでいて親しみ深い顔が浮かんできた。

(どんな苦境に立っても互いを信じ、協力し合って生きてきた。とくに苟美館事件では、大草さんにお世話になった)

家禄奉還金を明治政府から受けた牧之原の旧幕臣たちは、その奉還金を基金に、苟美館を設立した。同館は、出資者が必要に応じて、資金を借り入れ、開墾事業を円滑に進めようとする趣旨から設立された金融機関である。

だが、数年後、多額の損金が生じ、経営困難となった。

使い込み事件が発生したのである。景昭は、苟美館の頭取であったため、監督責任を問われ苦境に立った。

拙いことに苟美館は、谷口原にあり、岡田原の出資者には相談なく事業が進められていた。そのため、経営の実態を知らされていない岡田原の出資者の不満が爆発、入植士族の分裂を招きかねない危機に直面したのである。

そんな時であっても、高重と景昭との信頼関係は、揺らぐことはなかった。高重は、激昂する

入植者たちを鎮め、関係者との協議を重ね、解決策を図った。その結果、勝海舟と山岡鉄舟に相談することになった。

使者に、今井信郎と伊佐新次郎が選ばれた。二人は、海舟と鉄舟に、牧之原の苦境を率直に語り、場合によっては、分裂しかねない状況にあると訴えた。

それを知った海舟と鉄舟は、大久保利通を通じ明治政府に働きかけた。その結果天皇の御内帑金おないどぎんが下賜され、危機を免れたのである。

ここでこの苟美館事件解決に伊佐新次郎と共に大きな役割を果たした今井信郎の歩んだ道について触れてみる。

今井信郎は、天保十二年（一八四二）十月二日、江戸本郷湯島天神下で生まれた。剣は、直心影流榊原健吉に師事し、免許皆伝の腕前であった。後に、幕府講武所の師範代に取り立てられ、「片手打ち」という独特の剣法を編み出した。

その後、今井は、文久三年（一八六三）横浜の幕府出先機関に出仕し、密貿易取締役となっている。その時、甲州の豪農天野家の娘いわを娶った。

元治元年、京都守護職の下に京都見廻組が設置された。今井は、その三年後の慶応三年に参加している。見廻組は、新撰組とは異なり、旗本の子弟だけで結成されたもので、隊員は三十人ほどである。

隊長は佐々木只三郎。佐々木は、速水又四郎などと共に、新撰組の前身浪士隊の隊長清河八郎を亡き者としている。

慶応三年十一月十五日、佐々木は、見廻組同志七人と糾合し、京都の醤油屋近江屋にいた坂本龍馬と中岡慎太郎を襲った。その時、龍馬を切ったのは、今井信郎だと取沙汰された。

この近江屋事件については、誰が暗殺の真犯人であったか、現在でも謎に包まれている。

今井は、見廻組の一員として鳥羽、伏見の戦いに参戦した後、古屋作左衛門と共に「衝鋒隊」を結成。八〇〇人余の反薩長の武士たちを率いて、北越、会津と転戦し敗れた。その後、榎本武揚率いる軍艦に乗り、函館五稜郭に立てこもった。

五稜郭の陥落によって、今井は薩長軍に捕らえられ、戦犯として兵部省の取り調べを受けた。さらに、坂本龍馬暗殺グループの一人として、静岡にて服役している。

だが、明治五年の特赦によって自由の身となった。出所後、駿府城の跡地に学校を創設、藩士の指導に当たった。明治九年、今井は、静岡県吏十等出仕に補され、八丈島に赴任した。島では、戸籍の整備、貯水池の開発、八丈織の奨励、学校の設立に尽力している。

明治十年、今井は、西南戦争が始まると静岡県を依願退職し、新政府の西郷軍討伐隊に志願、一等警部心得を拝命、八五〇人を統率する隊長となった。

西郷軍討伐参加の真意は、討伐隊に加わり、現地で西郷軍に合流する意図があったのではないかと子息の今井健彦氏は、後に語っている。

だが、八月二十日、浜松まで下ると、西南戦争は終結。八月二十七日に帰京した。習志野で解団、今井は、静岡に帰った。

その後、今井は、中條景昭の勧めで、牧之原坂本村に入植した。その頃に、苟美館事件が起き、その調停に伊佐新次郎とともに尽力した。伊佐については、すでに、その事績と人となりを紹介した通りである。

今井は、後に自由民権運動の先駆けとして、「三養社」を設立、明治十三年地元の農業振興に尽くし、明治二十八年静岡県榛原郡はしばらぐんの農会長、明治三十九年、初倉村村長。大正七年六月二十五日、坂本村二六〇番地で、永眠した。享年七十二歳。その生涯は、実に波乱に富んでいた。

剣を持って幕臣の意地を貫き、薩長に立ち向かった二十代までの今井信郎と三十二歳で出所した後の彼の人生は、大きく変っている。

明治新政府の出現は、武士の時代の終焉を告げた。そのことを冷静に受け止めた今井は、中條景昭、大草高重との交流を通じて、足元を見据えて生きる大切さを学んだのだ。

八丈島でも、初倉村でも農業の振興と特産品の育成に尽力し、その地方の功労者として讃えられる業績を残し、人生の幕を閉じた。

苟美館事件の不祥事は、生涯の痛恨事として景昭の胸に、いつまでも残っていた。だが、入植者たちは、時間とともに、その傷を忘れ去ろうとしている。

（事件の解決に当たった伊佐新次郎は、もはやこの世にいない。だが、今井信郎がいる。彼は、今後も牧之原には、なくてはならない人物であり続けるに違いない）

景昭は、高重の命日に、旧幕臣入植者仲間と共に、高重の墓前に立ち、牧之原の将来に思いを馳せた。

雨降って地固まる。高重の墓前に集まった入植者の顔には、苟美館事件のわだかまりは、最早感じられなかった。

景昭は、高重の遺徳を慕って、墓前に集まった旧幕臣の入植者とともに、牧之原を日本一の茶園に育て上げることを誓うのであった。

（三） 駆け抜けた動乱の時代

新芽が出揃い、茶園は、若草色に染まっている。爽やかな風が茶園の中を吹き抜けている。

高重が逝って三年目の茶摘みの季節が巡ってきた。

中條景昭は、牧之原にとって最も大切なこの素晴らしい季節に、何か欠けていることを感じていた。爽やかな風さえも、景昭の沈んだ心を癒すことは出来ない。この収穫の喜びを共に分かち合う盟友大草高重が隣にいないのである。

景昭は、新芽の出揃った茶園を見廻りながら、高重との思い出に耽っていた。

拙者が、大草さんと初めて知り合ったのは、幕府講武所が設置された頃であった。彼は、騎射指南役として出仕し、実践用の弓術を教えていた。

当時の講武所は、武芸の達人が、指南役として迎えられ、幕府最強の武術集団であった。教授の中には、夷荻を打ち砕くには、武術の鍛錬しかないと信じて疑わない攘夷論者が多かった。稽古も激しく、実に活気に溢れていた。

槍の高橋精一（泥舟）、剣の榊原健吉、山岡鉄太郎（鉄舟）、関口隆吉、松岡萬つもろ、落合正中、柔の成瀬三五郎などそうそうたる連中が、指導に当たっていた。その講武所の師範たちが、外圧に屈する幕閣の態度を潔とせず、幕府に攘夷の決断を迫り、「旗本攘夷十七人組」を結成した。

しかし、攘夷組が、幕府内での力を得る前に、時代は大きく変貌した。攘夷論は影を潜め、日本は、挙げて開国へと傾いて行ったのである。

攘夷の急先鋒であった薩長は、薩英戦争、四国連合艦隊下関砲撃事件を通じて、西欧列強の實力を知り、攘夷の旗を降ろした。だが、攘夷で沸き上がったエネルギーは、薩長が手を結ぶことによつて、倒幕へと向けられた。

十五代将軍徳川慶喜公は、英明な君主として囑望されていた。が、英明であるが故に、先を見る目が利き過ぎる。あえて火中の栗を拾うようなことはしない。身体を張つて、幕府の倒壊を防ごうとはしなかった。幕府の存続が、日本の将来を危うくすると考えたのかもしれない。

慶喜公の生まれた水戸藩は、尊王思想の牙城であり、彼もその思想の影響を受けて育っている。

彼の天皇家に対する尊崇の念は、歴代將軍の中では、群を抜いている。その心だけは、一貫して変わらなかつた。

慶喜公は、十五代將軍を引き継いだ。だが、幕府の組織と制度の硬直化は進み、財政破綻や軍事力の弱体化は、目を覆うばかりであつた。彼は、幕府が、内憂外患に、最早対応出来ないことを覚つた。そこで、新しい政治体制を造るため、朝廷に政権を返上するという驚天動地の措置に出た。

大政奉還である。

拙者も大草さんも山岡さんさえも攘夷は、虚妄に過ぎないことが分かつてきた。だが、倒幕は、幕臣として許しがたい。薩長の盟約は、拙者にも大草さんにも寝耳に水であつた。大政奉還と討幕軍の編成は、幕府を大混乱に陥れた。

討幕軍の進攻に対し、幕臣としていかに対応すべきか鳩首協議を重ねた。徹底抗戦を主張する者、慶喜公の意向に従う者、幕臣の地位も名誉も捨て、夜逃げ同様に立ち去る者、さまざまであつた。

新政府の盟主をもくろむ薩長にしてみれば、徳川家の存続は、邪魔な存在でしかなかつた。鳥羽、伏見の戦いで幕府軍の実力を知つた薩長軍は、時代の勢いに便乗し、一挙に倒幕に打つて出て、徳川家の息の根を止めようとした。

ところが、肝心の慶喜公は、ひたすら恭順を決め込んで、上野寛永寺大慈院に謹慎した。慶喜

公は、薩長との武力闘争を何としても避けたかったようだ。

仮に、幕府方が勝利を納めたとしても、旧態依然とした幕府機構を根底から変えなければならぬ。そのエネルギーは、新政府を組織し、操るより困難であると慶喜公は、判断したのでろう。幕府が、引き続き政権を担うよりも、新政府のほうが、日本の将来のためになると考えていたのかも知れない。

慶喜公は、新政府にあつて、政治の辣腕を振るいたかったに違いない。だが、それは、薩長の策謀により、朝敵にされ、阻まれてしまった。

幕府の中にあつては、薩長の横暴許し難しとして、徹底抗戦を主張するものも少なくなかった。が、勝さん、大久保一翁さんに代表される開明派は、主戦派に対し、恭順こそが、徳川家だけでなく、日本全体を救う道であると訴えた。

拙者や大草さんを始め、山岡鉄舟、関口隆吉など攘夷派の幕臣たちも、この頃には、勝さん、大久保さんなどの開明派との親交を深め、攘夷論は、絵に描いた餅に等しいことが分かってきた。それどころではない。徳川家の存続さえ危うくなってきたのだ。徳川宗家を守るためには、勝さんの言うように、やはり慶喜公の恭順しかない。

そのためには、慶喜公の身の安全を確保することである。

そこで、拙者は、大草さん、山岡さん、関口さんなどと図って、慶喜公の護衛を目的とした精鋭隊を組織したのだ。

大草さんは、親戚筋の山名時富、小島勝直を始め、友人や門下生を集めてきた。拙者は、弟の加藤光正、山本七郎、配下の内藤種光などを説き伏せ、参加させた。それに山岡、関口さんなどの講武所の関係者が加わって、精鋭隊は二百人を超える勢いとなった。拙者が頭、大草さんが頭取であった。

思えばあの頃が、人生の華であったような気がする。

慶喜公が、一ヶ月ばかり、水戸に謹慎している間に、徳川家の処遇が決まった。徳川家は、七十万石に縮小され駿府に移封、田安亀之助様が十六代当主となって、廃絶は免れた。

慶喜公は、水戸での穏やかな生活を続けていた。だが、世情は、一段と騒がしくなり、仙台、米沢、会津を中心に奥羽列藩同盟が成立。このままでは、政治的に利用されかねないと、慶喜公は懼れた。

十六代家達様が、駿府に移ったこともあって、慶喜公も駿府で謹慎を続けることになった。

七月の暑い日、水戸から駿府まで旧幕府軍艦「蟠竜」に乗り、清水湊に着いた。拙者は、大草さんと共に精鋭隊を率いて、その護衛に当たった。

旧幕臣の中で、選びぬかれた武力集団の精鋭隊は、新政府にとっても脅威であっただろう。それだけにわれわれも新政府に刺激を与えないように気を使った。

そこで、慶喜公の護衛から東照宮の護衛に切替え、名称も「新番組」と改めた。一年が経った。が、徳川家からの扶持米では、どうにも暮らしが成り立たない。困窮の度合いは、増すばかり

である。そこで、帰農することを決意した。

「このままでは、新番組も生活のために解散せざるを得ない。この際、なりふりなど構っては
いられない。百姓をやりましよう」

大草さんの声が今でも耳に残っている。

徳川家に忠誠を尽くすわれわれ家臣団が、解散を免れるためには、集団で自活するしかない。
それには、まとまって生活ができ、互いに助け合える百姓が相応しい。幸いにして関口隆吉氏
が、金谷ヶ原に広大な未開拓の土地があり、その土地は、徳川家のものだという知らせをもたら
してくれた。

山岡、大草さんとその土地を見に行った。土地は、荒れていた。だが、東に富士を臨み、眼下
に大井川が流れ、駿河湾に注いでいる。景観が素晴らしい。

大草さんと手を携えて、この荒地を開墾することにした。徳川家が無償で、土地を払い下げ、
しかも藩の金谷開墾方として、扶持米まで頂けることになったので、開墾事業に目途が立ち、入
植者も増えた。

これも勝さん、大久保さん山岡さんなどの口添えがあつてのことである。

それから、版籍奉還、廃藩置県、家禄奉還、秩禄処分、廃刀令など相次ぎ、武士の時代は終わ
り、四民平等の時代へと移って行った。

だが、拙者も大草さんも新時代の制度には馴染めなかった。旧幕臣であるという誇りも捨てき

れなかった。そのため、開墾作業も袴をはき、刀を差したまま行ったものだ。鬚を切る者も少なかった。

景昭は、高重と初めて視察に来た地点に到着した。大井川の流れは、二十七年前と変わっていない。富士も夕映えを受け、その雄姿を留めていた。

だが、目を転じて、牧之原の台地を見ると、当初とは、すっかり景色が変わっている。緑の茶園が広がり、灌木や雑草に覆われた荒地は、片隅にその名残を留め、かつて原野であったことを物語っている。

景昭は、高重の牧之原に懸けた夢の実現が近いことを覚るのであった。

十七．幕臣の残した茶園

(一) ねぎらいの宴うたげ

大草高重の死は、牧之原開墾士族たちに大きな衝撃を与えた。とはいえかしら頭の中條景昭は健在で、高重と共に半生をかけて育てた「牧之原茶」は、全国的にも知られるようになった。

その牧之原も紅葉の季節を迎えていた。

富士に懸かる雪の冠が、山裾広く降りている。青空を突き抜ける冠雪の富士は、毅然として孤

高を貫いていた。

明治二十七年の晩秋、高重の死から二年半が過ぎている。

維新による一連の改革が進み、文明開化、富国強兵のスローガンのもとに、社会が大きく変貌し、軍備が強化された。その動きに呼応するかのようにナショナリズムが台頭。東洋の覇権を巡り、日清間で熾烈な戦いが繰り広げられていた。

景昭は、牧之原開墾に生涯を捧げた組頭たちを自宅に招き、これまでの労をねぎらった。いずれも日焼けし、その顔の皺の一つ一つに苦闘の歴史が刻まれている。

酒を酌み交わし懐旧談に耽っている。景昭は、その傍らに、この席に招くことの出来なかった旧幕臣入植者たちの幻影を見た。

（刀を鍬に代え入植した土地を去らなければならなかった入植者たちは、さぞ無念であったろう。苟美館こうみかんのような事件がなければもう少し救済の手を差し伸べることが出来たかもしれない）
景昭は、開墾組頭としての役目を十分果たすことが出来たのか、内心忸怩たるものがあつた。招いた客の中に落合正中がいた。

景昭は、落合の顔を見て、苟美館の経理を落合のような人物に任せれば不祥事は、起きなかつただろうと思つた。

落合は、武士としての誇りを失わず、ひたすら開墾に励み、その誠実な生き方は、入植者たちの信望を集めていた。

「落合殿、苟美館事件では、大變世話になった。そこもどのような清廉な士がいたからこそ明治政府も金を出したと思う」

「いえ、それは違います。中條さん、大草さんの書面を見て、勝さん、山岡さんが、大久保さんに窮状を誠心誠意訴えたからです」

「あの頃は、西南戦争も終わったばかりだった。旧士族の反乱は新政府にとっても脅威である。帰農した旧幕臣たちが、牧之原で成功したとなれば、士族の殖産振興を促すことが出来、不平不満も収まると、うまい具合に、勝さん、山岡さんが大久保利通を説得してくれたからであろう」

落合正中は、弘化三年（一八四六）江戸小石川竹原町の旗本の家に生まれた。長兄が早世したので、家督を相続。小普請、講武所奉行支配、精鋭隊、新番組と景昭と行動を共にし、開墾方部長として二十四歳の時に牧之原に入植した。

幼少の頃から劍、槍、弓、柔、馬、の武術を学び、成人後山岡鉄舟の知己を得て攘夷十七人組の一人として活躍している。

入植後、土地が割り当てられると直ぐ仮小屋を建て、そこに住み、開墾に従事した。ほんの少しの家財道具を持ち込んだだけの清貧洗うような生活であった。

「何もそこまですなくともよいのに。まるで野戦に出ているようだ」と評する同志たちも少なくなかったという。

「牧之原の開墾者たちは、経営、経理の知識が乏しく窮状を呈している。折角土地を下賜されながら主君に合わせる顔がない」

落合は、開墾が思うように進まないことを嘆くのであった。

苟美館事件の後始末のため、政府に資金援助を求めて上京した際も、旅費は、自費負担している。

「落合殿、そこもとは、これからもずっと牧之原に留まって、この地の発展のために尽くし貰いたい」

景昭は、落合の手を取り、後事を託した。

「はい。そのつもりです。茶園の経営も何とか目途が立って参りましたので、このまま続けます」
落合は、景昭の他界後も二十年以上牧之原で茶業に専念し、大正六年二月、七十二歳で同地の土となった。彼は、近隣の農民からも「牧之原聖人」と崇められた。翌七年の牧之原開拓入植五十周年記念に、落合正中の徳を讃える落合正中顕彰碑が建立されている。

景昭は、落合の脇に座っている小田信樹に視線を移し、声をかけた。

「ところで小田殿、新政府の仕事を終え、この牧之原に帰って来てくれたことは、喜ばしい限りだ。これからもよろしく頼むよ」

「はい。中條頭取には、何かとご迷惑ばかりお掛けしていますが、開墾の傍ら近所の子供たちに

学問を教えてください。これからは、百姓といえども学問は大切で、この牧之原から、無学な百姓を一掃したいと思って始めました」

「それは良いことだ。この地の子供たちも学問を身に付け、牧之原だけに留まらず、広く国の役に立つ人物に育ってくれること願っている」

景昭は、共に入植した同志の子弟の中から、牧之原はもとより日本の国を託すことの出来る人物の輩出を期待していた。

信樹の父小田彰信は、幕府きつての開明派で、数々の要職を歴任している。彰信は、幕府勘定組頭、大坂具足奉行、外国奉行支配組頭、を歴任した。蘭学を修め、勝海舟と共に安政二年、オランダから初めて日本に渡来した電信機などの実験もしたという。幕府は、彰信の能力を高く評価し、オランダ文翻訳の新組頭とし、御書物奉行の要職に付け、オランダ語辞典の編纂も行わせている。

また、彰信は、二宮尊徳とも交流があり、幕府財政改革にも強い関心を示していた。

信樹は、父の感化を受け育った。が、活躍の場が与えられる前に、幕府は瓦解してしまった。明治元年七月、江戸城御留守居番となり、公用人として江戸城明け渡しの際の残務整理に当り、その後静岡藩で、廃藩置県の事務処理を担当した。そのため、金谷開墾の入植第一陣には加わっていない。

信樹が入植したのは、明治四年のことであった。やや遅れて入植したため、当初の開墾用地割

当を受けなかった。彼は、瓜ヶ沢（島田市湯日）に仮住まいし、明治四年四月、関口隆吉の住む月岡村（現菊川市月岡）の近く横地村（現菊川市横地）に住居を移している。その頃に、関口隆吉の開墾地の一部を譲り受けた。

小田信樹は、茶園も拓いたが、教育に特に熱心で、自宅付近に「菜園義塾」という私塾を設け、近隣の農家の子弟を集め、修身や算法を教えた。

その後、明治十一年（一八七八）内務省からの要請により、土地、屋敷をそのままにして出仕。農商務省、鳥取県、島根県、福島県参事などを歴任、明治二十七年、再び横地に戻り、学問の普及を通じ、地域の発展に尽くしていた。

その後、小田信樹は、呢墾の間柄であった渋沢栄一に請われ、北海道十勝開墾会社の経営に参画し、耕地三千町歩の土地開発に当たっている。明治四十三年五月、信樹は、東京の病院で永眠した。享年六十七歳。遺体は、遺言により、彼のかつて住んでいた横地の近く常泉寺に葬られた。牧之原は、信樹にとって片時も忘れることの出来ない故郷であったに違いない。

（二）品質を高める牧之原茶

牧之原開墾幕臣の中には、精銳隊士でなかった者もいた。だが、中條景昭は、精銳隊士でなくとも、発足当初から牧之原開墾に加わり、苦楽を共にした同志たちをこの宴に招き、ねぎらった。

その中の一人に森盛鑑もりもりずみがいた。彼は、静岡藩が、金谷開墾方を設置し、入植者を募った時から

参加している。一町六反余の開墾地の割当を受け入植したのである。

森家は、俸禄百五十俵の旗本で、実父は、栄十郎という小十人組の武士であった。幕末の動乱期に、嫡男盛照が、朝臣となったため、弟の盛鑑が、静岡藩に出仕し、三人扶持を与えられた。

盛鑑は、慶応二年の長州征伐に十八歳で志願参戦した。その殊勝な心掛けを愛でた十四代将軍家茂は、盛鑑に木杯を下賜している。実直で、誠実な人柄は、開墾方同志からも信頼されていた。

明治二年十二月、静岡藩が、幸浦に塩田開発を計画、松岡萬つもろが、その責任者に指名された。

その塩田開発には、開墾方士族三十一人に加え、新門辰五郎など江戸の火消町人など七十数人が参加している。

この開発に、盛鑑も参加した。だが、事業は失敗し、明治三年の末に解散した。

それ以来、盛鑑は、牧之原牛渕原の開墾地に戻り、開墾に専念して来た。

「森殿、そこもとは精鋭隊の一員でないのに何故、この牧之原開墾事業に参加し、他の入植者も羨むほどの成果を上げることができたのかね」

「それは、武士の時代がすでに終わったと思っただからです。長州征伐に参加した時、長州の奇兵隊に散々な目にありました。百姓風情が生意気に、と思いましたが、あの火力と団結力には、かないません。武士は、一人一人個々の戦いには、優れています。集団となるとまとまりがない。百姓は、それとは逆です。しかも隊列を組んで、鉄砲を撃ちかけてくるので、接近戦になる前に倒されてしまい、刀を有効に使うこともできませんでした。長州との戦いで、弱いものでも団結

すれば想像以上の強さを発揮することを知りました」

「そうか。それで、かつて幕臣であった者同士が、お互いに助け合って開墾作業を行うこの牧之原に入植する気になったのだな」

「そうです。だが、それだけではありません。これからの時代は、物を生み出す仕事が大切かと考えたからです。たとえ今貧しくとも田畑を耕し、作物を育てれば、やがて実りをもたらし、その作物を口にすることも、金に替えることも出来ます。自分の手で豊かな生活の道を切り開くことが出来ると考えたからです」

「良い考えをお持ちのようだ。聞くところによると、そこもとの茶園は、素晴らしい出来栄で、どんどん土地も増えているというではないか。どのようにして増やしているのだね」

「それは、付近の百姓衆の手を借りることです。自分たちだけでは、どんなに一所懸命開墾しても、たかが知れています。付近の百姓衆で手の空いた人を雇って開墾して貰うことにしたのです」

「だが、それだけでは、なかなか開墾は、進まないと思うがのう」

景昭は、自分の開墾地と比較してみた。

「はい。これまでのやり方に加えて、共同作業の方法を取り入れてみました。たとえば十人の百姓を雇った場合、十人が共同で作業すれば、一日百坪の開墾を行うことは可能です。一人当たりになれば一日十坪の開墾です。共同作業は、能率の上がるもので、一人で行えば、五坪ほどしか開墾できませんが、共同で行うと作業能率も向上し、十坪の開墾も可能となります」

「なるほど。そうした方法で開墾地を広げることができたのか。しかし、百姓だけに任せておくわけには行くまい。日当で雇われていると思えば、つい怠けぐせが出てこよう」

「はい。その通りです。ですから私は、自ら鋤を振るって、彼等とともに働きました。そして、開墾した土地には、開墾に最も功績のあった人の名を地名として付けることにしたのです。ただ、私の与えられた土地が、開墾しやすい土地であったことも幸いしたようです」

「牧之原の開墾を道半ばで去って行った旧幕臣たちの多い中で、よく耐えてこのような立派な茶園を仕上げた。その功績はまことに大きい。これからもこの土地の発展のために尽くして頂きたい」

盛鐙は、景昭の言葉に思わず目頭が熱くなった。精鋭隊の仲間でもないのに、分け隔てなく接してくれる景昭の懐の深さに感激したのである。

だが、これまでの過労が知らず知らずのうちに盛鐙の体を蝕んでいた。この景昭のねぎらいの言葉を受けた一年後に旅立った。

四十七歳の短い生涯であった。盛鐙は、その後半生を牧之原の開墾に捧げ、原野を日本一の茶園にした功労者の一人である。

盛鐙の子孫は、五代にわたって連綿と続いている。現在も三町歩近い茶園を経営しているという。

多くの入植士族が、離散した中で牧之原に残り、茶農家として成功している数少ない名家の一

つである。

景昭は、盛鑑との話を、徳利を手に持ってじつと聞いている一人の若者がいることに気付いた。若者は、景昭と盛鑑との会話が、途切れるのを待ちかねるように景昭に近づいてきた。

内田忠正である。

「いつもお世話になっております。中條頭取、まず一献」

内田忠正は、景昭の差し出す盃に、両手で持っていた徳利を傾けた。

「どうかね内田殿。茶の品質向上の教育は進んでいるかね。牧之原の茶も早く日本一の品質だと認められるようになりたいものだ」

「はい。まだそこまではまいりませんが優秀な製茶教師を招いてその技術を若者に習得させておりますので、そのうち最高級品として世に認められる品質の茶を生み出すことが出来るものと思います」

内田忠正は、金谷開墾方御雇伍長という資格で入植した。明治二年五月に、大沢原に一町七反あまりの土地の割当を受け、開墾を始めたのである。

彼は、明治六年に他の入植士族と共に製茶の輸出を試みた。しかし、製茶技術が未熟であったため、良品としての扱いを受けられなかった。そこで内田は、牧之原に製茶教師を招き、自宅で組合員の製茶品評会を行って、良品の育成に努めたのである。

また、明治二十二年には、榛原、小笠郡茶業組合と協業して製茶教師を招き、品質向上技術の教えを乞うた。さらに、再製事業にも手を染め、ここでもその技術を持つ人物を招き、その習得には、牧之原の近隣茶業者にも公開している。

内田は、景昭他界後も、牧之原茶の品質向上に努力し、静岡県茶園品評会から表彰を受けたほどである。

大正十四年八十八歳の高齢でこの世を去った。大沢原の墓に、妻の幸と共に眠っている。開墾士族の中では、経営感覚に優れ、森盛鎧と共に牧之原の茶園の隆盛に貢献した人物の一人であった。

(三) 沃野に眠る

大草高重が、逝って四年目の冬を迎えた。静岡藩金谷原開墾方として旧幕臣たちが入植してすでに二十七年余りとなる。

茶園は拡大し、生産量も増加、牧之原は日本有数の茶処となった。「牧之原茶」の銘柄は、全国的にも知られるようになったのである。

荒地として放置されて来た牧之原台地は、入植者の血と汗によって沃野に変わりつつあった。だが、入植した多くの同志が倒れ、離散し、最早開拓当初の歴史を語る者も少なくなった。その上、父祖の事業を継ぎ、牧之原に留まって茶業を営む子孫も年々減ってきている。

景昭は、じつと孤独をかみしめ、広い屋敷内を眺めていた。寒風が木々を揺らし、風花が舞い始めた。

(入植した朋輩たちやその子供たちは少なくなったが、茶園は立派に残った)

景昭は、旧幕臣たちが、血と汗によつて開墾し、育て上げた茶園が、人手に渡つて行く有様をつぶさに見てきた。

だが、茶園そのものは、大きく育っている。

(牧之原の茶園は、幕臣たちが始めたが、それを近隣の百姓たちが引き継いで大きく育て、この地方を豊かな茶処にしてくれた。それで良かったのかもしれない。そんな中であつて、大草さんの子供たちは、彼の意志を継いで立派に茶園を経営している。羨ましい限りだ。わが中條家は、大草さんのようなわけには行かなかつた。しかし、拙者は、大草さんとの誓いを守つて、この牧之原に骨を埋めることにする)

景昭は、衰退する徳川家に忠誠を尽くし、武士としての誇りを貫き通した生涯を振り返つた。

文政十年(一八二七)六月十九日、中條景昭は、旗本中條家の七代目市衛門の次子(庶子)として江戸六番町(現千代田区六番町)で産まれた。江戸文化が爛熟していた時期である。

実父市衛門は、中條家四代目の当主であつた。家禄は、三百俵で、旗本の内では、小身の部類に属する。

市衛門は、先妻の子で嫡子の六三郎景寿に、家督を譲り隠居した。だが、その景寿が、天保十一年（一八四〇）三月急死したため、その子の作一郎景忠が、家督を継いで六代目となった。景忠は、若干十二歳で、急遽元服し、中條家の当主となったのである。

しかし、景忠も病弱で、夭折してしまったため、叔父の金之助景昭が家督を継ぐことになった。

景昭は、市衛門の次男で庶子であったため、中條家の家督には、縁の薄い存在であった。

事態が、変わったのは、弘化三年（一八四六）のことである。

景昭は、景忠の死によって、はからずも中條家の七代目の当主になったのである。二十一歳の血気盛んな青年期を迎え、武術に打ち込んでいた頃であった。

景昭は、幼少の頃から伊庭道場入門、大内六左衛門のもとで剣技を学び、「心形刀流」の免許皆伝となった。同時に、師範に抜擢され、達人とまで言われた。また、柔術にも優れていた。

実母のます女は、直参旗本加藤光直の娘で、文政九年（一八二六）十八歳の時に、景昭の実父中條市衛門の後妻となっている。金之助景昭の他に四人の男子を設けている。そのうち二人は夭逝したが、景昭は、残る二人の弟と共に牧之原開墾に当った。

ペリー来航の翌々年安政二年（一八五五）四月、景昭は、講武所剣術世話係心得。万延元年（一八六〇）柔術世話係心得。文久元年（一八六一）幕府奥詰。同二年剣術教授師範方、同小納戸役となった。

文久三年（一八六三）浪士取締。同年五月、新徴組支配、同年九月には御徒歩頭を歴任した。

が、慶応二年には、将軍家茂が他界し、徳川慶喜が十五代将軍となって、幕政改革が行われ、お役御免、俸禄返上となった。

しかし、風雲急を告げた慶応四年正月には、御留守居支配組頭、同年（明治元年）九月には、新番組組頭となっている。

徳川家が駿府に移った明治二年には、金谷原開墾方頭取を拝命、同志二百五十世帯と共に金谷原（牧之原）に入植した。

景昭の弟拾三郎は、母の実家加藤家を継ぎ、加藤光正と名乗り、実兄景昭の率いる精鋭隊の取締役として参加、その後も景昭と行動を共にし、牧之原に入植している。

また、末弟の鈕之助は、旗本幕府奥詰銃隊の山本小三郎の嗣子となり、名を七郎忠敬と改め、兄景昭と共に牧之原に入植している。

景昭が、牧之原に入植した時は、四十二歳。人生で最も充実した時期であった。景昭の嗣子克太郎は、父の剣法「心形刀流」を学び、後に山岡鉄舟の「一刀正法無刀流」を継承している。静岡に出た後、剣道師範として四国に赴任。茶園は継がなかった。

明治八年、景昭は、新政府から神奈川県令として任官することを要請されたが、固辞している。この要請は、山岡鉄舟が使者に立った。だが、景昭は、薩長出身者の跋扈する政府に興味はないとして断った。

景昭は、明治二十九年一月十九日、牧之原一番地の自宅で永眠した。享年七十歳。法名「常純院殿中穆号昭大居士」。島田市阪本の地福山種月院の裏山に葬られた。その裏山には、牧之原開墾に従事した中條家ゆかりの旧幕臣たちの墓が一箇所に集められている。

葬儀は、種月院で厳粛に行われた。盟友勝海舟が、自ら葬儀委員長を務めた。

海舟は、景昭を偲んで短歌を揮毫している。

「君が為　まめなるこころひとすじに　加辺り見なさで　果てしますら雄」

墓石東面に刻まれたこの歌は、誠忠の志を後世に伝えている。

中條景昭は、明治という時代を通して、終生官途に就くことはなかった。ただひたすら牧之原開墾に半生を捧げたのである。鬚も下ろさず、刀も差したまま、武士としての誇りを持ち続けて、自分の生き方を貫き通した。

「それがしは、この牧之原に骨を埋め、茶の肥やしになる」と広言してはばからなかった。彼の死後、牧之原茶園の繁栄と中條景昭、大草高重をたたえる歌が作られている。

木々の若草　燃え立つ頃は

牧之原にも　そよ風吹いて

お茶は芽を吹き　雲雀は歌う

沃野三里は　茶の香り　茶の香り

あかねたすきに 姉さんかぶり
優しい乙女の 手にするお茶は
富士をのぞみて ここ牧之原
中條、大草茶の香り 茶の香り

塚本昭一著、遺臣の群像一九三頁より

なお、同書に歌詞は、国際ことば学院校長 高木桂蔵氏提供とある。

日清戦争は、日本の勝利で終結した。

下関条約を締結後、清国に植民地的野心を持つ露、仏、独の三国干渉によって、遼東半島を清国へ返還した政府の弱腰外交を非難する声が、巷に漲っていた。

攘夷から武力を背景とした対外進出の積極化に、日本は大きく舵を切っていたのである。

幾多の旧幕臣たちの埋まっている牧之原は、日本が武士の時代から市民社会の時代へと移る過渡期の歴史を留めている。

緑の茶園は、その武士の血と汗の結晶として誕生し、変貌を遂げ発展して来たのである。

だが、広大な台地は、まだ開発の余地を残し、既設の空港と共に新時代を切り開く、第二、第三の中條景昭、大草高重の出現を待っている。

(完)

あとがき

太田精一

嘉永六年（一八六三）、浦賀沖に停泊したペリーは、日本に開国を迫った。

太平の夢をさまされた日本は、開国か攘夷かを巡って世論が沸騰し、徳川幕府を震撼させた。幕臣の間でも、開国派と攘夷派に分かれ激論が戦わされた。

開国派には、大久保一翁、勝海舟、川路聖謨、岩瀬忠震などがいて、攘夷派には、山岡鉄舟、高橋泥舟、本編の主人公である中條景昭、大草高重、今井信郎を始めとする幕府講武所の教授たちがいちがいた。

開国派は、西欧の知識を学んだ開明的な幕臣たち、攘夷派は武力によって、外国の脅威を取り除こうとする保守的な幕臣たちが中心となっていた。

しかし、攘夷派幕臣たちも薩英戦争、四国艦隊下関砲撃事件など西欧列強の強大な軍事力を目の当たりにし、攘夷が困難なことを覚り、次第に開国やむなしとの方向に傾いて行く。

慶応三年（一八六七）十五代將軍徳川慶喜は、大政奉還を決意。政権を朝廷に返上することにより、政治的混乱を避けようとした。だが、薩長を中心とする西国雄藩にとって、新政府を創設

するには、徳川家は邪魔でしかない。そこで、朝廷を味方につけ、錦の御旗を押し立てて東征軍を編成、徳川家の滅亡を図った。

慶喜は、ひたすら恭順を続けることにより東征軍の武力攻撃を回避し、徳川家の存続を願った。かつて攘夷派であった中條景昭、大草高重らは、精鋭隊を組織し、慶喜の護衛に当り、勝海舟、大久保一翁などと手を携えて徳川家の存続に腐心した。

当主である慶喜の命を守ることが、徳川家の存続に繋がると考えたからである。

その結果、慶喜の命が保障され、徳川家の存続が認められた。だが、四百万石の所領が、七十万石に減封され、駿府への転封となった。駿府（静岡）への移転とともに徳川家当主は、慶喜から家達に変わった。

減封により、これまでの家臣団を抱える余裕が無くなったため、藩は帰農を奨励した。幸い牧之原（現静岡県島田市）に、未開墾の広大な徳川家の所領があったので、その土地を慶喜の護衛に当った精鋭隊の面々に下げ渡した。

こうして、中條、大草の率いる精鋭隊の旧幕臣たちは、剣を鋤に替え、同地の開墾を行うことになったのである。だが、台地であるため、水田耕作は困難である。そこで、畑地でも可能な商品作物を栽培する必要が生じた。

勝海舟は、茶の栽培に目を付け、入植者たちにそれを勧めた。

茶は当時、生糸と共に日本の重要な輸出品であり、横浜港からも出荷されている。牧之原の土

壤は、幸いにして茶の栽培に適していたため、生産量は増加し、次第に栽培面積も拡大した。

だが、開墾には、多大な労力を必要とするため、慣れない農作業に挫折する者も続出した。

また、周辺の農民との水利権争い、彰義隊士の入植に伴う幕臣同士の軋轢、入植者たちで組織した金融機関内での使い込み事件など多くの障害に直面した。だが、入植した旧幕臣たちは、お互いに助け合い協力し合って、困難を乗り越え開墾を進めて来た。

その苦闘の歴史の積み重ねによって、今や牧之原は、全国一の生産量を誇る茶処となり、今日の繁栄を築くことが出来たのである。

幕末から明治にかけての激動の時代に、崩壊する幕府の中にあつて、牧之原入植の幕臣たちが何を考え、どう行動したか。新時代の到来をどのように受けとめ対応したか。

明治維新の裏面で、苦闘した旧幕臣たちの歴史を語ることは、グローバル化という名の第二の開国に伴い、その奔流に押し流されそうな人たちが、新しい道を模索する上で、参考になるかもしれないという思いで筆を執った次第である。

本作品は、同人誌「まんじ」113号（平成二十一年八月発行）から123号（平成二十四年二月発行）まで120号を除き十回にわたり連載した物語を取りまとめ、訂正加筆したものです。

執筆に当って静岡県島田市の初倉郷土研究会塚本昭一会長には、多数の著書及び資料のご提供とご助言を頂き、加えて牧之原開拓幕臣子孫の会大草省吾会長にもご協力を賜りましたので

ここに改めて感謝申し上げます。

また、単行本としての取りまとめに当っては、「まんじ」及び「史遊サロン」でのご厚誼頂いて
おります新井宏氏に多大なご尽力を賜りましたことを厚くお礼を申し上げます。

〈著者紹介〉

太田精一（おおた せいいち）

東北大学文学部社会学科卒。

民間会社を経てジェットロに入る。カメルーン、旧ユーゴスラビア（現セルビア共和国）、チリに駐在。国内外の勤務を通して各国、各地方の歴史、文化を研究。市井の歴史家の集まり「史遊会」に所属。

数々のエッセイを執筆。同人誌「まんじ」の会員として小説や歴史物語を同誌に寄稿。

著書 『遙かなるカメルーン』（彩流社）。

『遠い処へ』、『霧の彼方に』

（まんじ特集号 栄光出版社）。

誠 忠 の 茶 園

一牧之原の荒地に挑んだ幕臣たち一

刀を鋏に替えた幕府精鋭隊

平成 28 年 6 月 30 日発行

著者 太田精一（おおた せいいち）

〒248-0032 鎌倉市津 1040-65

電話番号 0467-32-6808

出版協賛 史遊会サロン